

南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XV

(伊集院IC～市来IC)

おお た じょう あと  
大 田 城 跡

(日置郡伊集院町)

2005年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



縄文時代早期の土器



## 序 文

この報告書は、南九州西回り自動車道鹿児島道路（伊集院 I C～市来 I C間）の建設に伴って、平成 9 年度に実施した日置郡伊集院町に所在する大田城跡発掘調査の記録です。

調査によって、旧石器時代～縄文時代の遺構・遺物が発見されました。

なかでも、岩本式土器から前平式土器への移行期に位置付けられる土器の出土は、南九州の縄文時代早期初頭から前葉の土器群の文化変遷を考える上で貴重な資料となりました。

この調査の成果が地域の歴史研究や埋蔵文化財の啓発普及の一助になれば幸いです。

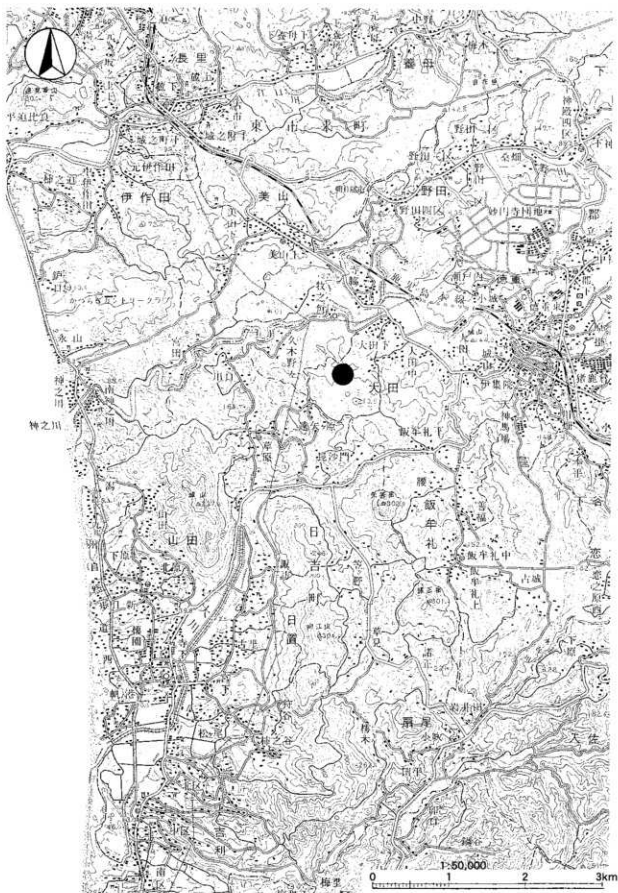
最後になりましたが、調査にあたり御協力いただいた国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所ならびに発掘調査に従事された地域の方々に厚く御礼申し上げます。

平成17年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター  
所 長 木 原 俊 孝

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	おおたじょうあと							
書名	大田城跡							
副書名	南九州西回り自動車道鹿児島道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	XV							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第95集							
編著者名	星野一彦・中原一成							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4461 鹿児島県国分市上之段1175番地1 Tm0995-48-5811							
発行年月日	2005年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〃 〃	東経 〃 〃	調査期間	調査面積 ㎡	調査起因
		市町村	遺跡番号					
おおたじょうあと 大田城跡	かごしまけんひおまつぐん 鹿児島県日置郡 いづみいんたうおおた 伊集院町大田 あびしんかやまざき 字城山迫	463639	3011	31° 37' 34"	130° 22' 23"	確認調査 19961202 ～ 19970108  全面調査 19971201 ～ 19980316	4,000	南九州西 回り自動 車道鹿児 島道路建 設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大田城跡	散布地	旧石器時代  縄文時代早期	集石3基 土坑2基		三稜尖頭器 ナイフ形石器 石核 岩本式・前平式土器 石鏃・石槍 スクレイパー 石斧 磨石・敲石			



第1図 大田城跡位置図

## 例 言

- 1 本報告書は、南九州西回り自動車道鹿児島道路建設（伊集院ⅠC～市来ⅠC間）に伴う大田城跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県日置郡伊集院町大田字城山迫に所在する。
- 3 発掘調査は、国土交通省鹿児島国道事務所から鹿児島県教育委員会が受託し、鹿児島県立埋蔵文化財センターが調査を実施した。
- 4 発掘調査事業は、確認調査を平成8年12月2日～平成9年1月8日まで実施し、全面調査を平成9年12月1日～平成10年3月16日まで実施した。報告書作成事業は、整理期間を含めて平成15・16年度に実施した。
- 5 遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・図版の遺物番号は一致する。
- 6 挿図の縮尺は、各図面に示した。
- 7 本書で用いたレベル数値は、国土交通省鹿児島国道事務所が提示した工事計画図面に基づく。
- 8 発掘調査及び現場における図面の作成・写真の撮影は、発掘調査担当者が行った。
- 9 土器の実測や図面等のトレースは、当センターの整理事業員が行い、報告書作成担当者が監修した。
- 10 復元完形土器立面図・石器の実測・トレースの大部分を（株）九州文化財研究所に委託した。
- 11 遺物出土状況図等のデジタルデータの作成・作図は、馬籠亮道、内村光伸が行った。
- 12 遺物の写真撮影は、当センターにおいて鶴田静彦、西園勝彦、吉岡康弘が行った。
- 13 本書の執筆・編集は、旧石器時代を中原一成、縄文時代・その他を星野が行った。
- 14 遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する予定である。

## 凡 例

- 1 大田城跡の出土土器については、岩板式土器、前平式土器どちらの範疇で捉えるのか判断に苦慮するところだが、これまでの各研究者の型式概念についての論考や研究史を踏まえて、Ⅰ類を岩板式土器、Ⅱ類を前平式土器と呼称することとして分類した。
- 2 土器の実測に際しては、遺物との誤差を少なくするために傾き・厚み・形状等は特に注意を払って行った。
- 3 石器については、出土層を基に時代区分を行い、器種や用途の違いにより分類した。
- 4 石斧の製作段階を示した模式図は、取り上げ遺物からによる判断で作成したものであり、必ずしも他遺跡に共通するものではない。

# 目 次

序 文  
報告書抄録  
例言・凡例

第Ⅰ章 はじめに .....	1
第Ⅱ章 発掘調査の経過 .....	7
第1節 調査の経緯 .....	7
第2節 調査の組織 .....	7
第3節 調査の経過 .....	9
第Ⅲ章 遺跡の位置及び環境 .....	13
第1節 地理的環境 .....	13
第2節 歴史的環境 .....	15
第Ⅳ章 発掘調査の概要 .....	21
第1節 発掘調査の方法 .....	21
第2節 遺跡の層位 .....	22
第3節 旧石器時代の調査 .....	25
・遺物	
第4節 縄文時代の調査 .....	39
・遺構	
・遺物	
第5節 古墳時代～古代の調査 .....	104
・遺物	
第Ⅴ章 まとめ .....	106
あとがき	



## 挿 図 目 次

第1図	大田城跡位置図	
第2図	南九州西回り自動車道調査遺跡位置図…	4
第3図	伊集院町及び大田城跡位置図…	6
第4図	鹿児島県周辺の四万十層群分布図…	12
第5図	遺跡周辺の四万十層群・安山岩等分布図	14
第6図	周辺遺跡図…	17
第7図	遺跡周辺地形図及びグリッド配置図	20
第8図	基本土層柱状図…	22
第9図	土層断面図1…	23
第10図	土層断面図2…	24
第11図	旧石器器種別出土分布図…	26
第12図	旧石器石材別出土分布図…	27
第13～18図	旧石器(1)～(6)…	28
第19図	縄文時代早期遺構配置図…	37
第20図	1号集石・2号集石…	38
第21図	3号集石…	39
第22図	1号土坑・2号土坑…	40
第23図	縄文土器出土分布図…	42
第24図	縄文土器類別出土分布図…	43
第25図	縄文時代早期土器分類模式図…	44
第26～28図	I a 類土器…	45
第29～35図	I b 類土器…	49
第36・37図	II a 類土器…	57
第38図	II b 類土器…	59
第39～45図	II c 類土器…	60
第46図	その他の縄文土器…	67
第47図	縄文石器器種別出土分布図…	74
第48図	縄文石器石材別出土分布図…	75
第49～57図	縄文石器(1)～(9)…	77
第58図	石斧製作段階模式図…	87
第59～70図	縄文石器(10)～(21)…	88
第71図	古墳時代～古代の土器…	104
第72図	遺跡残存範囲図…	105

## 表 目 次

第1表	南九州西回り自動車道遺跡一覧表…	5
第2表	大田城跡の周辺遺跡地名表…	18
第3表	旧石器時代石器観察表…	36
第4～9表	縄文時代石器観察表…	68
第10～12表	縄文時代石器観察表…	101
第13表	古墳時代～古代土器観察表…	104
第14表	土器分類表…	108
第15表	石材別点数・重量割合・重量表…	109

## 図 版 目 次

巻頭グラビア	縄文時代早期の土器	
図版1	遺跡近景・基本土層(1)(2)…	111
図版2	1号集石・2号集石・3号集石…	112
図版3	1号土坑完掘状況・2号土坑撤出、完掘状況…	113
図版4	E・F-8区 IV層遺物出土状況…	114
図版5	刃部磨製石斧出土状況(1)(2)…	115
図版6	調査風景(1)(2)(3)…	116
図版7	旧石器時代の遺物…	117
図版8	縄文時代早期の土器 (I a 類土器)	118
図版9	縄文時代早期の土器 (I b 類土器)	119
図版10	I a 類土器…	120
図版11	I b 類土器…	121
図版12	II a 類土器…	122
図版13	II b 類土器…	123
図版14	II c 類土器…	124
図版15	胴部 (I・II類) …	125
図版16	底部 (I・II類) …	126
図版17	その他の縄文土器・古墳時代～古代の土器…	127
図版18	剥片石器(1)…	128
図版19	剥片石器(2)…	129
図版20	石斧未製品…	130
図版21	石斧未製品(1)…	131
図版22	石斧未製品(2)…	132
図版23	石斧未製品(3)…	133
図版24	礫石器…	134

# 第Ⅰ章 はじめに

## 第1節 調査に至るまでの経過

建設省九州地方建設局（中央省庁再編により平成13年1月より国土交通省九州地方整備局に改称）は、鹿児島～市来間に南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課（組織改革により平成8年度より文化財課に改称）に照会した。この計画に伴い、文化課が平成3年6月に伊集院ICと市来IC間の埋蔵文化財の分布調査を実施したところ、当事業区内には、27か所の遺物散布地及び確認調査の必要な地点が存在することが判明した。

事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについては、建設省鹿児島国道工事事務所と文化課の協議に基づき、鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ、埋蔵文化財の確認調査・本調査が実施されることになった。

これを受けて、平成8年度から平成12年度にかけて、毎年度、計画的かつ継続的に各遺跡の確認調査及び本調査を実施し、埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。発掘調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

なお、事業区間内の遺跡の概要については、以下の通りである。なお、確認調査等によって遺跡でないことが判明した11か所は、除いてある。

## 第2節 遺跡の概要

- 1 一ノ谷……伊集院町下谷口字一ノ谷の飯牟礼台地から西側へ延びた標高90～95mの丘陵端部に位置し、調査面積は1,250㎡である。中世～近世の古道・五輪塔及び染付や近世～近代にかけての掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑・ピットが青磁・染付・土師器・薩摩焼などと一緒に見えられた。
- 2 永迫平……伊集院町下谷口字下永迫の恋之原台地から延びた支脈が盆地状の水田地帯に落ちる直前の標高約150m程の小台地上に立地している。調査面積は14,000㎡で旧石器時代ナイフ形石器文化の2か所のブロックと細石刃文化期の細石刃が出土し、縄文時代早期前半の前平式期には9軒の住居跡を始め、3基の連穴土坑と9基の集石、多数の土坑を検出。その他、古墳時代から近世にかけての遺物も出土している。
- 3 下永迫A……伊集院町下谷口字下永迫の標高85～110mのやせ尾根に挟まれた谷間に立地する。調査面積は2,600㎡で、縄文時代後期の指宿式土器と石鏃、古墳時代の成川式土器、古代～中世では土坑・集石が検出され、青磁・白磁が出土した。
- 4 柳原……伊集院町下谷口の標高約90～100mの山間の谷間、傾斜地及び周辺のやや小高いテラス状の尾根部に立地する。調査面積は6,000㎡である。縄文時代早期の集石4基や後期の石匙、石鏃、古代の土坑、焼土跡と共に土師器・須恵器が見えられた。
- 5 上山路山……伊集院町大田字上山路山の標高約130mのシラス台地上に位置する。舌状台地の端部にあたり、平坦面から続く緩やかな斜面と、谷頭を含んだかなり急な斜面とからな

る。調査面積は6,000㎡である。旧石器時代細石刃文化の遺物と縄文時代（早期・後期）、弥生～古墳時代の遺物が発見された。主になるのは縄文時代早期で、遺構は道跡や集石、遺物は岩本式・前平式・吉田式土器等が出土した。

- 6 大田城跡…伊集院町大田字城山迫の標高約120mの台地上に所在する。調査面積は4,000㎡である。中世山城の可能性を指摘された遺跡であったが、山城の存在を示す遺構は検出されなかった。旧石器時代の遺物と縄文時代早期の集石、土坑等の遺構と岩本式・前平式土器等の遺物が発見された。（本報告書）
- 7 堂平窯跡…東市来町美山の標高約85～92mの傾斜面にある江戸時代の薩摩焼の窯跡である。調査面積は3,500㎡で、窯、作業場、物原が発見された。窯は長さ約30m、幅1.2m、傾斜角17°の半円筒形をした単室傾斜窯である。陶器（甕・壺・徳利・土瓶・こね鉢・摺鉢・動物形土製品）、瓦（軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・のし瓦）や窯道具が多量に出土した。
- 8 池之頭…東市来町美山字池之頭にあり、美山池北西部の標高約80～100mのシラス台地の尾根状部分に立地し、調査面積は7,500㎡である。旧石器時代のナイフ・台形石器・スクレイパー・細石刃核・細石刃、縄文時代早期の集石8基・前平式・吉田式・石坂式土器や中期の春日式・並木式・阿高式土器、晩期の入佐式や黒川式土器が出土した。また古墳時代の成川式土器（甕・壺・高坏等）が多く発見された。
- 9 雪山…東市来町美山字雪山の標高約95mの台地東端に立地する。調査面積は2,700㎡で、旧石器時代の細石刃核・細石刃、縄文時代の集石2基と前平式・春日式土器・石鏃・石皿・磨石、古墳時代の成川式土器が出土したが、主体は近世～近代の薩摩焼の遺構・遺物で、炉跡・物原？・土坑等が薩摩焼（茶家・土瓶・搦鉢・瓶・碗）、染付（碗・皿）や窯道具と一緒に発見された。
- 10 猿引…東市来町長里字猿引の標高約110～115mの尾根状の台地に立地する。調査面積は800㎡で、旧石器時代ナイフ形石器文化の礫群1基と三稜尖頭器・ナイフ・台形石器・蔽石や細石刃文化の細石刃核・細石刃と縄文時代前期の曾畑式土器・黒曜石片が出土した。
- 11 犬ヶ原…東市来町伊作田字犬ヶ原の標高約66mの独立丘陵のシラス台地に立地する。調査面積は、2,000㎡で、旧石器時代の細石刃核・細石刃、縄文時代の浅鉢・深鉢・石弁・石皿・石鏃・石匙、古墳時代の成川式土器（甕・壺・鉢）等が出土したが、主になるのは平安時代で、掘立柱建物跡（4間×4間・総柱）が製鉄に関する遺物（鑪羽口・鉄滓・鉄製品）・土師器・須恵器と共に多く発見された。
- 12 向椀城跡…東市来町伊作田の標高約50mの独立台地上に所在する。調査面積は14,000㎡である。旧石器時代ナイフ形石器文化の剥片尖頭器・ナイフ、縄文時代草創期の隆帯文土器が多量の石鏃と一緒に見つかった。また、古墳時代の竪穴住居跡や中世～近世にかけての空堀・帯曲輪・堀切・竪穴状遺構・掘立柱建物跡・炉跡などが発見され、中世山城の遺構が検出された。
- 13 堂園平…東市来町伊作田の遠見番山から下る斜面の裾部にあり、標高約50mの平坦地に立地

する。調査面積は2,000㎡で、旧石器時代のナイフ形石器文化の礫群9基と剥片尖頭器・ナイフ・台形石器と細石刃文化の細石刃核・細石刃、縄文時代の集石4基・吉田式・塞ノ神式土器や轟式土器等が発見されている。また、古代の土師器・須恵器等も出土している。

- 14 今里……東市来町伊作田字今里の標高約65mの台地端の傾斜地に所在する。調査面積は14,000㎡で、旧石器時代ナイフ形石器文化の礫群、剥片尖頭器・ナイフ・台形石器や細石刃文化の細石刃核・細石刃・調整剥片が出土し、縄文時代の集石や前平式・深浦式・出水式・黒川式土器や石匙などの石器、古墳時代の成川式土器が発見された。
- 15 市ノ原……市来町大里字上ノ原前から東市来町湯田字市ノ原に至る標高約50m台地西側に所在する。調査面積は62,000㎡である。遺跡は第1地点から第5地点まであり、旧石器時代ナイフ形石器文化、細石刃文化、縄文時代（早期～晩期）、弥生時代の住居跡・壺棺、古墳時代の住居跡、古代～中世、近世の街道跡など多時期に渡り、多種多様な遺構・遺物が発見された。
- 16 上ノ原……市来町大里の東シナ海を望む標高40mの台地上に立地し、三方は急峻な傾斜面となっている。調査面積は2,000㎡で縄文時代の集石3基、土坑が検出され、塞ノ神式、轟式土器と石斧・石鏃・石匙などが出土した。古墳時代では竪穴式住居跡1基と土坑・成川式土器が、古代～中世は土師器・須恵器・青磁・滑石製石鍋が発見された。

※ 刊行報告書

「一ノ谷遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (31)	2001, 3
「池之頭遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (32)	2002, 3
「今里遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (33)	2002, 9
「市ノ原遺跡 (第1地点)」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (49)	2003, 3
「犬ヶ原遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (50)	2003, 3
「雪山遺跡・猿引遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (53)	2003, 3
「上ノ原遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (62)	2003, 3
「下永迫A遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (72)	2004, 2
「永迫平遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (93)	2005, 3
「柳原遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (94)	2005, 3
「大田城跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (95)	2005, 3

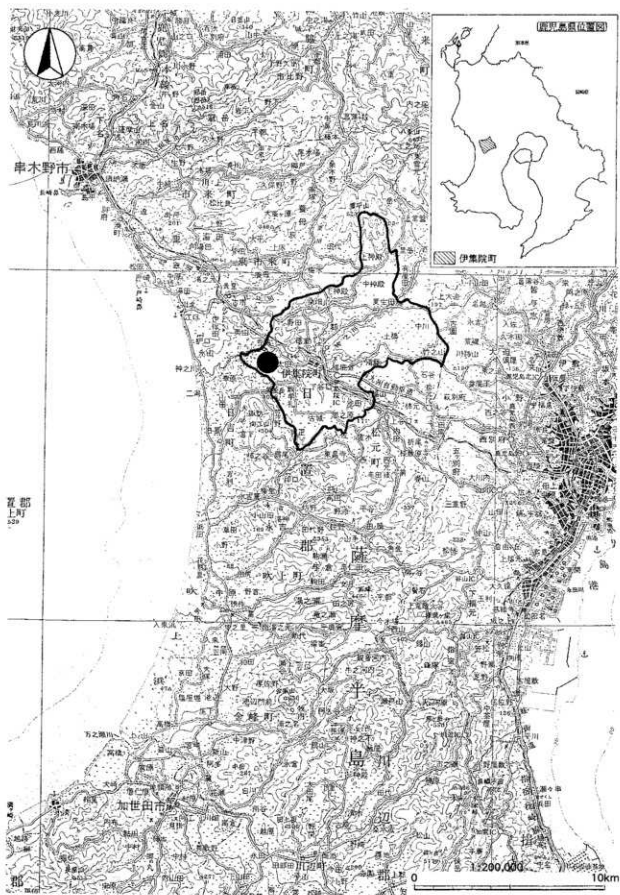


第2図 南九州西回り自動車道(鹿兒島道路)調査遺跡位置図

第1表 南九州西回り自動車道鹿兒島道路(伊集院IC～市来IC間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表

番号	期地名	所在	所在座標	調査面積	調査区画	調査区画	時代	備考
①	一ノ谷	伊集院町下谷口	伊集院町下谷口 伊集院町下谷口	伊集院町下谷口 伊集院町下谷口	伊集院町下谷口 伊集院町下谷口	伊集院町下谷口 伊集院町下谷口	近世 古代	制立柱建物跡・土坑 埋蔵文化センター報告書31 2001 刊行 埋蔵文化センター報告書「アイフ」石形石器 群跡、濁川文通器、アイフ、石形石器 群跡、濁川文通器、集石、濁川土坑、前平式土器 土師器、青磁 埋蔵文化センター報告書93 2005 刊行
②	永迫平	伊集院町下谷口	伊集院町下谷口	伊集院町下谷口	伊集院町下谷口	伊集院町下谷口	近世 古代	制立柱建物跡・土坑 埋蔵文化センター報告書93 2005 刊行
③	下永迫A	伊集院町下谷口	伊集院町下谷口	伊集院町下谷口	伊集院町下谷口	伊集院町下谷口	古代	土坑、集石、土師器、須恵器 青磁 埋蔵文化センター報告書72 2004 刊行
④	柳原	伊集院町下谷口	伊集院町下谷口	伊集院町下谷口	伊集院町下谷口	伊集院町下谷口	古代～中世 中世～近世	土坑、陶器、須恵器、漆器 土坑、陶器、須恵器、漆器 ピット、約体遺物 埋蔵文化センター報告書94 2005 刊行
5	上山崎山	伊集院町大田	伊集院町大田	伊集院町大田	伊集院町大田	伊集院町大田	中世～古墳 古墳	溝跡、埴土、土師器、須恵器 土坑、土師器、須恵器 成用式
⑥	大田城跡	伊集院町大田	伊集院町大田	伊集院町大田	伊集院町大田	伊集院町大田	旧土城 縄文(卑)	三徳土師器、新木式、前平式、石皿、磨石 土師器、土師器 新木式、須恵器 土師器、丸、須恵器
7	堂平畑跡	東市来町美山	東市来町美山	東市来町美山	東市来町美山	東市来町美山	江戸	土師器、須恵器
8	池之頭	東市来町美山	東市来町美山	東市来町美山	東市来町美山	東市来町美山	縄文(卑)	細石器(細石刃) 縄文(卑、後、後)
9	菊田	東市来町美山	東市来町美山	東市来町美山	東市来町美山	東市来町美山	縄文(卑)	集石、前平式 陶器器類、須恵器 埋蔵文化センター報告書32 2002 刊行
⑩	嶺引	東市来町長里	東市来町長里	東市来町長里	東市来町長里	東市来町長里	縄文(卑)	埋蔵文化センター報告書53 2003 刊行
⑪	大々原	東市来町伊丹田	東市来町伊丹田	東市来町伊丹田	東市来町伊丹田	東市来町伊丹田	古代	埋蔵文化センター報告書53 2003 刊行
12	向柳城跡	東市来町伊丹田	東市来町伊丹田	東市来町伊丹田	東市来町伊丹田	東市来町伊丹田	古代	埋蔵文化センター報告書50 2003 刊行
13	堂園平	東市来町伊丹田	東市来町伊丹田	東市来町伊丹田	東市来町伊丹田	東市来町伊丹田	古代	埋蔵文化センター報告書50 2003 刊行
⑬	今里	東市来町伊丹田	東市来町伊丹田	東市来町伊丹田	東市来町伊丹田	東市来町伊丹田	古代	埋蔵文化センター報告書50 2003 刊行
15	市ノ原	東市来町高田市 東市来町大里	東市来町高田市 東市来町大里	東市来町高田市 東市来町大里	東市来町高田市 東市来町大里	東市来町高田市 東市来町大里	古代	埋蔵文化センター報告書50 2003 刊行
⑭	上ノ原	市来町大里	市来町大里	市来町大里	市来町大里	市来町大里	古代	埋蔵文化センター報告書50 2003 刊行

○印 報告書刊行済



第3図 伊集院町及び大田城跡位置図

## 第Ⅱ章 発掘調査の経過

### 第1節 調査の経緯

平成3年6月に伊集院1Cと市来1C間の分布調査が行われ、伊集院町字城山迫で遺物の散布が確認された。これを受けて、国土交通省九州地方整備局と鹿児島県教育庁文化財課は、埋蔵文化財の保護と事業の調整を図るための協議を行い、事業着手前に埋蔵文化財確認調査（以下確認調査）を実施することになった。確認調査は、平成8年12月から平成9年1月まで実施し、旧石器時代・縄文時代の遺物包含層が確認され、遺跡の範囲や性格等を把握した。

県教育庁文化財課と県立埋蔵文化財センターは、確認調査の結果を踏まえ、国土交通省九州地方整備局と協議を行い、平成9年12月1日から平成10年3月16日まで県立埋蔵文化財センターが主体となり、本調査を実施した。発掘調査面積は4,000㎡である。

整理・報告書作成業務に伴う作業については、発掘調査時においても遺物の水洗・注記・図面整理等の作業を並行して行っていたが、本格的な作業は県立埋蔵文化財センターにて平成15・16年度に実施し、平成17年3月に報告書を刊行して大田城跡の調査の全てを終了することになった。

### 第2節 調査の組織

#### 確認調査（平成8年度）

事業主体	建設省鹿児島国道工事事務所				
調査主体	鹿児島県教育委員会				
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課				
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長	吉元 正幸	
調査企画担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次	長	尾崎 進	
				主任文化財主事	
				兼 調査課長	戸崎 勝洋
				調査課長 補佐	新東 晃一
				主任文化財主事	
				兼第三調査係長	池畑 耕一
発掘調査担当者		文化財	研究員	三垣 恵一	
		文化財	研究員	桑波田武志	
調査事務担当者		主	査	成尾 雅明	
		主	事	前屋敷裕徳	
		主	事	迫立ひとみ	

#### 本調査（平成9年度）

事業主体	建設省鹿児島国道工事事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課



調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	吉元 正幸
調査企画担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次 長	尾崎 進
		主任文化財主事	
		兼 調査課長	戸崎 勝洋
		調査課長 補佐	新東 晃一
		主任文化財主事	
		兼第三調査係長	池畑 耕一
発掘調査担当者		文化財主事	湯之前 尚
		文化財 研究員	橋口 勝嗣
調査事務担当者		主 査	前屋敷裕徳
		主 査	政倉 孝弘
		主 事	迫立ひとみ
発掘調査指導	鹿児島大学法文学部	教 授	森脇 広
<b>整理作業（平成15年度）</b>			
事業主体	国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所		
整理作業主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
整理作業責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	木原 俊孝
整理作業企画担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次 長	田中 文雄
		総務係長	平野 浩二
		調査課長	新東 晃一
		調査課長 補佐	立神 次郎
		主任文化財主事	
		兼第三調査係長	牛ノ瀨 修
整理作業担当者		文化財主事	中原 一成
整理作業事務担当者		主 査	脇田 清幸
<b>整理作業（平成16年度）</b>			
事業主体	国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所		
整理作業主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
整理作業責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	木原 俊孝
整理作業企画担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次 長	賞雅 彰
		総務係長	平野 浩二
		調査課長	新東 晃一
		調査課長 補佐	立神 次郎
		主任文化財主事	
		兼第三調査係長	牛ノ瀨 修

整理作業担当者		文化財主事	星野 一彦
整理作業事務担当者		主 査	脇田 清幸
報告書作成検討委員	平成16年12月27日	所長ほか11名	
報告書作成指導委員	平成16年12月20日	調査課長ほか4名	
企画担当者		宮田 栄二・寺原 徹	

### 第3節 調査の経過

#### 確認調査

平成8年12月2日から翌年1月8日まで実施した。確認トレンチを7か所に設定し、人力による掘り下げを行い、溝状遺構やピット等を検出し実測した。また、出土遺物についても平板実測、取り上げを行った。調査の結果、トレンチ内からは、旧石器時代の三稜尖頭器や縄文時代早期の岩本式や前平式の土器片、磨・敲石等が約440点出土した。

#### 本調査

平成9年12月1日（月）～12月5日（金）

本調査開始。

発掘現場及び周辺の竹林・枯木・雑草等を除去、環境整備を行う。

重機による表土の剥ぎ取りを行う。竹や木の根が茂り広がり、Ⅱ層欠如。

平成9年12月8日（月）～12月12日（金）

精査の結果、下層確認のトレンチ2本を設定。トレンチ内のⅢ・Ⅳ層掘り下げる。条痕土器片、石鏃等が出土。遺物取り上げ作業。G-5区遺構検出。

平成9年12月15日（月）～12月19日（金）

F・G・H-8区トレンチのⅣ層掘り下げる。石核や黒曜石剥片出土。遺物取り上げ後、Ⅵ・Ⅶ層掘り下げる。Ⅶa・Ⅶb層から遺物出土。遺物取り上げ作業。

G-6区トレンチのⅤ・Ⅵ層掘り下げる。黒曜石剥片出土。遺物取り上げ後、Ⅵ層掘り下げる。Ⅶ・Ⅷ層遺物なし。

G-7区Ⅲ・Ⅳ層掘り下げる。遺物出土状況図作成は、トータルステーションで行う。Ⅴ層上面精査、コンター図作成、遺物出土状況図作成。

G-8・9区表土直下精査。土坑を掘り下げる。F-8・9区表土剥ぎ。

平成9年12月22日（月）

雨天のため土器水洗作業を行う。

平成10年1月6日（火）～1月9日（金）

G-8区トレンチⅦa・Ⅶb層掘り下げる。G-6・7区Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ層掘り下げる。G-8区Ⅶ・Ⅷa層掘り下げる。E-8・9区トレンチ表土剥ぎ。Ⅲ層掘り下げる。F・G・H-7区遺構検出作業、写真撮影。F・G・H-8区トレンチ東側土層断面写真撮影・実測。F-8・9区Ⅲ・Ⅳ層掘り下げる。

平成10年1月12日（月）～1月16日（金）

G-6区土坑検出、掘り下げ、写真撮影・実測。F-8・9区Ⅲ・Ⅳ層掘り下げる。遺物少量。

G-6・7区Ⅶ層上面コンター図作成，5mメッシュ設定，Ⅶ層掘り下げる。G-5区Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ層掘り下げる。遺物なし。

平成10年1月19日（月）～1月23日（金）

G-6・7・8区Ⅷ層掘り下げる。G-7区は傾斜に沿って遺物出土，遺物取り上げ作業，完掘状況写真撮影，Ⅷc上面コンター図作成。F-8・9区Ⅳ層遺物出土状況写真撮影・遺物取り上げ作業，Ⅵ層まで掘り下げる。F-6・7区Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ層まで掘り下げる。G・H-8区Ⅶ・Ⅷ層遺物出土状況図作成，遺物取り上げ作業。G-6トレンチ完掘状況・南側土層断面写真撮影・実測。G-5区Ⅶa層コンター図作成，Ⅷ層掘り下げる。F-8区集石検出作業。

平成10年1月26日（月）～1月30日（金）

F-6・7・8・9区Ⅲ～Ⅶ層掘り下げる。F-8・9区地層横転多数。F-6区Ⅳ層土器片が集中して出土する。写真撮影・実測。Ⅶ層上面コンター図作成。2mメッシュ設定。F-8区Ⅳ層集石写真撮影・実測。

平成10年2月3日（火）～2月6日（金）

F-5・6・7区Ⅶ層以下2mメッシュ部分掘り下げる。黒曜石剥片・チップ出土。Ⅶ層上面コンター図作成。F-8・9・10区Ⅳ～Ⅶ層上面掘り下げる。Ⅶ層上面コンター図作成。F-8区西側土層断面写真撮影・実測。F-6・7区トレンチⅧb層まで掘り下げる。

平成10年2月9日（月）～2月13日（金）

F-7・8・9区Ⅶ層以下2mメッシュ部分掘り下げる。F-7・8区ブロック状出土状況写真撮影・実測・遺物取り上げ作業。F-8区西側土層断面実測。F-6・7区トレンチ北側土層断面写真撮影・実測。F-8・9・10区トレンチⅦ層以下掘り下げる。遺物出土地点拡張する。F-8・9・10区北側土層断面写真撮影・実測。E-5・6・7区Ⅳ層以下掘り下げる。D-9区Ⅳ層掘り下げる。土器片が集中して出土する。

平成10年2月16日（月）～2月20日（金）

D-8・9区Ⅳ層以下掘り下げる。堆積状況不安定。集石検出・写真撮影・実測。D-8区トレンチ2本設定。遺物少量。E-8・9・10区Ⅳ層以下掘り下げる。D・E-8区トレンチⅣ～Ⅷ層南北方向に掘り下げる。堆積状況不安定。F-7・8区ブロック状出土状況実測・遺物取り上げ作業。F区調査終了。

平成10年2月23日（月）～2月27日（金）

D・E-7・8・9区Ⅳ層以下掘り下げる。土器片，礫多数出土する。遺物出土状況写真撮影・実測・取り上げ作業。D・E・F-8区トレンチⅧ層まで掘り下げる。

平成10年3月3日（火）～3月6日（金）

D-8区集石実測。D・E-7・8・9区Ⅳ層以下掘り下げる。D・E-8区西側土層断面写真撮影・実測。E-6・7区土器片，剥片，磨石，石斧等出土。遺物取り上げ作業。E-8・9区Ⅶ層上面コンター図作成。任意のトレンチ設定。

平成10年3月9日（月）～3月13日（金）

E-8・9区任意トレンチ掘り下げる。遺物取り上げ作業。Ⅶ層上面コンター図作成。完掘状況写真撮影。D・E-6・7区Ⅶ層上面まで掘り下げる。石斧・剥片出土。遺物取り上げ作業。

平成10年3月16日(月)

E-8・9区任意トレンチⅧb層まで掘り下げる。E-6・7区Ⅷ層上面コンター図作成。全ての調査を終了する。

#### 整理作業(平成15年度)

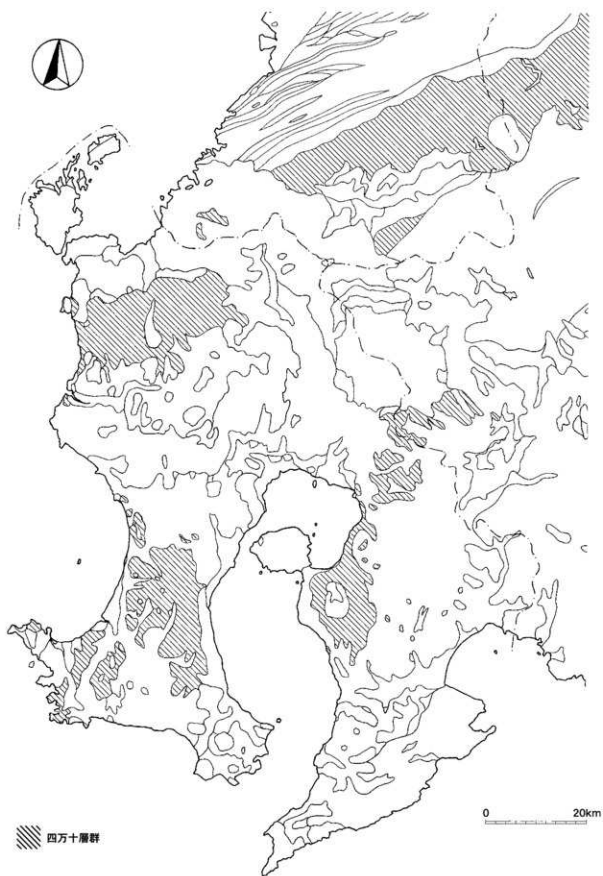
遺物の総数が3,134点で、その中で石器が909点である。その中では、旧石器時代の遺物をはじめ縄文時代までの遺物が出土しているため、まずは、石器の分類・選別を中心として整理作業を行った。石器実測の一部を業者に委託するなど作業の効率化も図った。その他、土器接合や遺構図面の整理を行った。作業内容は、以下のとおりである。

4月・5月	実測図面等確認、遺物注記、遺物接合、遺物選別
6月・7月	遺物選別、石器分類、石器実測
8月・9月・10月	石器実測、遺構図作成等
11月・12月	石器仮レイアウト、遺構図作成等
1月・2月	土器接合、石器観察表作成
3月	土器接合

#### 整理作業(平成16年度)

15年度は、石器を中心として整理作業を進め、16年度は報告書刊行年度になるため土器についても石器と同様に分類・選別・実測等を行った。遺構図面の作成等も行った。作業内容は、以下のとおりである。

4月・5月	実測図面等確認、注記(一部)、遺物接合、遺物選別、遺構図修正、文章作成等
6月・7月・8月	土器接合、土器拓本、土器実測、周辺地形図等作成、トレース、文章作成等
9月・10月	土器トレース、土器仮レイアウト、遺構仮レイアウト、文章作成等
11月・12月	遺物写真撮影、観察表作成、遺物出土状況図作成、遺構・遺物本レイアウト、文章作成及び修正、印刷のための起案
1月	入札 遺物・図面整理
2月	文章校正、遺物・図面整理及び収納
3月	文章校正、遺物・図面収納 納品



第4図 鹿児島島周辺の四万十層群分布図

景地学会編を編同

## 第三章 遺跡の位置及び環境

### 第1節 地理的環境

大田城跡は、鹿児島県日置郡伊集院町大田字城山迫に所在する。町の西部、標高約123mの台地端の緩傾斜地に位置する。伊集院町市街地から現在でも薩摩焼の窯があることで有名な東市来町美山へ至る県道24号線の途中、大田下集落バス停から南の方向へ約800mの地点に位置する。

大田城跡の所在する伊集院町は、薩摩半島のほぼ中央部に位置し、東は鹿児島市、西は日吉町・東市来町、南は松元町、北は東市来町・郡山町に接している。藩政時代には、主要道路として参勤交代にも利用された道（九州街道）が通るなど、地理的な位置から古くから日置郡の中心地として栄えてきた。昭和50年代からは、大型団地の分譲や住宅建設が増え、道路整備も進むと豊かな自然や良好な教育環境を求めて県都鹿児島市のベッドタウンとして人口が増加してきた。また、教育の町づくりをモットーに、子どもたちの教育にも力をいれている町である。鹿児島の三大行事のひとつである「妙円寺詣り」は、平成5年より10月の第4日曜日に実施し、多くの子どもたちが参加している。

伊集院町の地形は、北部に重平山（523.1m）など旧期火山岩山地が連なり、東市来町及び郡山町と町界をなしている。南西部には、矢筈岳（302.9m）や諸正岳（301.4m）があり、日吉町と町界をなしている。これらの山地を除くと町の大部分は、海拔150m前後の火山灰台地である。平地は、この火山灰台地が東シナ海まで注いでいる2級河川の神之川とその支流などの影響で作られた狭い谷底平地となっている。台地と谷底平地との境は崖地となっており、湧水地点もある。つまり、海に面しない、やや内陸的気候の特徴をもつ、小規模な盆地状地形となっている。

伊集院町の基盤地質は、北部の重平山と町の中心部から南西には輝石安山岩が分布している。本遺跡を含め矢筈岳や諸正岳など町の西部の山地は、中生代の四万十層群に属する砂岩・頁岩・礫岩等の互層が分布し、一部ホルンフェルス化している部分もある。河川流域には、小規模な沖積層が分布している。それ以外の地域は、県本土を広く被っている約24,000年前に始良カルデラから噴出した入戸火砕流堆積物（シラス）の台地である。

### 参考文献・引用文献

〔論文・研究史・その他〕

鹿児島県伊集院町1976『伊集院郷土誌第一部』

伊集院町誌編さん委員会2002『伊集院町誌』

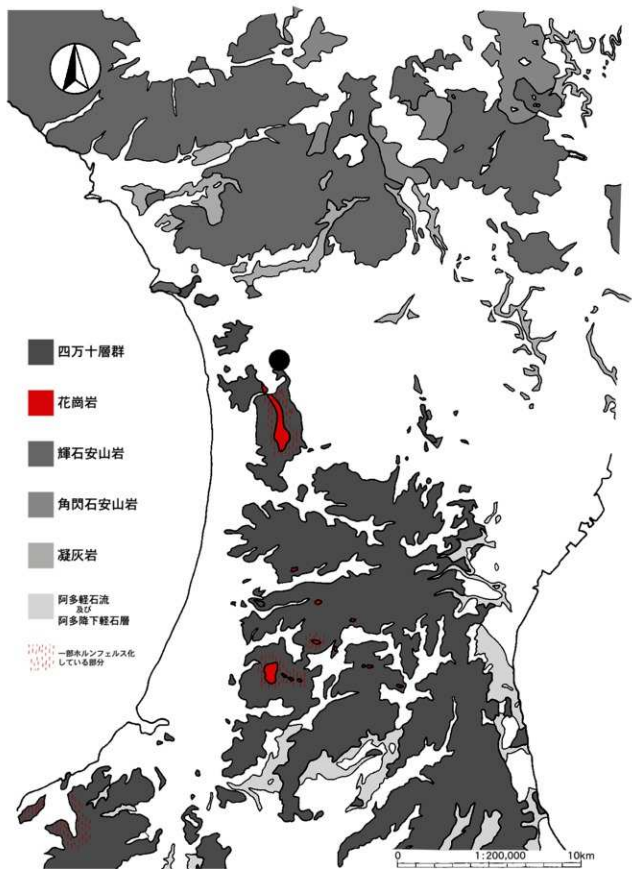
早坂祥三監修・鹿児島県地学会編1991『鹿児島県地学のガイド（上・下）』

大木公彦2002『鹿児島湾と琉球列島北部海域における後氷期の環境変遷』『第四紀研究』

角川日本地名大辞典編纂委員会1983『角川日本地名大辞典（46）鹿児島県』

下中 弘1998『鹿児島県の地名』

鹿児島県地学調査研究会編纂 1967『鹿児島県地質図』



第5図 遺跡周辺の四万十層群・安山岩等分布図

鹿児島地学調査研究会編纂を編図

## 第2節 歴史的環境

伊集院町の考古学的発掘調査の歴史は新しく、昭和62年に大田地区（通称：城山）で、一字治城跡の部分的発掘調査が行われたのが、始まりである。翌年に刊行された発掘調査報告書の遺跡地名表には、町内の49か所の遺跡が紹介されているが、ほとんどが寺院・墓地等に伴う石塔が中心である。以前から集落の畑や神社の裏山から縄文・弥生時代の土器片や石器が断片的に採集されるだけの状況であった。

しかし、平成8年に始まった南九州西回り自動車道鹿児島道路（伊集院IC～市来IC間）の建設や九州新幹線鹿児島ルート（新八代～鹿児島中央間）の建設に伴う考古学的発掘調査が行われたことにより、約2万数千年前の遺構・遺物が発見されるなど伊集院町の歴史が旧石器時代ナイフ形石器文化期まで遡ることとなった。

そこで、周辺遺跡と併せて伊集院町の主な遺跡を時代順に若干紹介することにする。

### 旧石器時代

伊集院町周辺の地形は、地層や岩盤の堆積状況、海水準の変動等を考慮すると、現在の地形に近い姿となっていたと推定できる。湧水地もあり、早くから人が生きていくことができる要因が揃う。

伊集院町では、ナイフ形石器や剥片尖頭器などナイフ形石器文化期の遺物が出土した永迫平遺跡（下谷口）がある。旧石器時代の終焉となる細石刃文化期には隣接する松元町仁田尾に広い範囲で遺物が分布する九州最大級の遺跡が存在するが、伊集院町でも瀬戸頭A・B遺跡（竹之山）や竹之山B遺跡などの遺跡で同時期の石器が出土し、竹之山B遺跡では落とし穴も確認されている。

### 縄文時代

瀬戸頭遺跡では、草創期の土器片が出土する。大田城跡で主体となる時期の縄文時代早期では、気候が温暖化してきたと考えられ、永迫平遺跡で竪穴住居跡9基、連穴土坑3基、集石遺構12基、道跡3条などが発見され、縄文時代早期前葉の定住集落の存在が確認された。これと同じ時期の集落として上山路山遺跡（大田）でも道跡や集石遺構が発見されている。さらに、これらの集落より一段階古い時期とされ、日本でも最古級の縄文時代早期初葉の赤色顔料土器が出土した稲荷原遺跡（恋之原）や上山路山遺跡がある。いずれも、伊集院町の歴史の古さを窺わせるものばかりである。

早期後半以降、遺跡数は少なくなる。後期の上ノ平遺跡（下神殿）では、竪穴住居跡が5基発見され、当時の人々が同じ地に何度も回帰していたことを示すものとなった。

### 弥生～古墳時代

南九州は、始良カルデラから噴出した入戸火砕流堆積物（シラス）の台地などが多く、稲作に適した地域が少なかった為に稲作の生産性が低かったと考えられている。その為、北部九州ほど弥生文化は発達していない。また、これまでの発掘調査対象地域も台地や丘陵地が多いせいも、弥生時代・古墳時代の遺跡数は少ない。伊集院町周辺では、東市来町から市来町にかけて位置する市ノ原遺跡（市来町大里）で、弥生時代の埋設壺4基が確認されたほか、弥生時代前期の突帯文系土器、中期の北九州系とも考えられる土器などが出土した。古墳時代の土器である成川式土器の出土遺跡は、これまでも県内で報告されているものの伊集院町郡に所在する石坂遺跡（町報12）では、竪穴住居跡と思われる遺構を検出し、遺構中心部内からは完形に近い成川式土器も出土した。



## 古代～中世

伊集院町の町名の由来は、古代に租税の物品を収納し、管理する倉庫（＝院）が置かれたことにはじまると考えられている。その後、中世から近世にかけては、幾度かの争いにより薩摩藩主島津氏の拠点の一つとして位置付けられている。その為か、町の歴史も中世以降の文献史学の研究が中心となっていたが考古学的発掘調査によって、さらに当時の生活を知る手懸かりとなった。西原遺跡（郡）・石坂遺跡（郡：泉埋セ報58）や下永迫A遺跡（下谷口）では、古代の焼土・掘立柱建物跡を検出、越州窯青磁碗や赤色土器・墨書土器等が多数出土した。古代末から中世初期に作成された建久岡田帳には当遺跡が所在する大田という地名が出てくる。山ノ脇遺跡（郡）では、中世の伊集院町周辺一帯を治めていた在地豪族が暮らしていた居館群が発見され、当時の豪族の権力の一端を示すものとなった。勢力争いが激化してくる、この頃になると各地で多数の山城が造られるようになるが、伊集院町では一字治城跡（大田）などがある。この山城は、島津貴久がフランシスコ・ザビエルと会談した城として知られ、大きく4つの郭群からなり、多くの曲輪が造られ曲輪間には多数の空堀が掘られていた。現在は、史跡公園として整備されている。

## 参考文献・引用文献

〔報告書〕

伊集院町教育委員会1988『一字治城跡』伊集院町埋蔵文化財発掘調査報告書（1）

伊集院町教育委員会2000『石坂遺跡』伊集院町埋蔵文化財発掘調査報告書（12）

鹿児島県立埋蔵文化財センター2001『竹ノ山A・B遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（29）

鹿児島県立埋蔵文化財センター2003『市ノ原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（49）

鹿児島県立埋蔵文化財センター2003『犬ヶ原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（50）

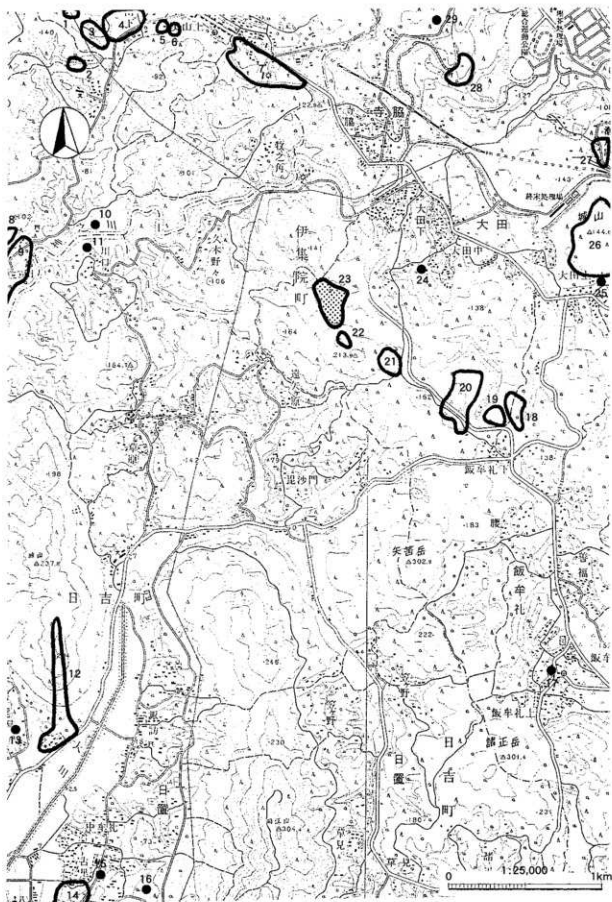
鹿児島県立埋蔵文化財センター2003『雪山・猿引遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（53）

鹿児島県立埋蔵文化財センター2003『山ノ脇・石坂・西原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（58）

鹿児島県立埋蔵文化財センター2004『上ノ平遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（70）

鹿児島県立埋蔵文化財センター2004『下永迫A遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（72）

鹿児島県立埋蔵文化財センター2004『宮尾遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（73）



第6図 周辺遺跡図

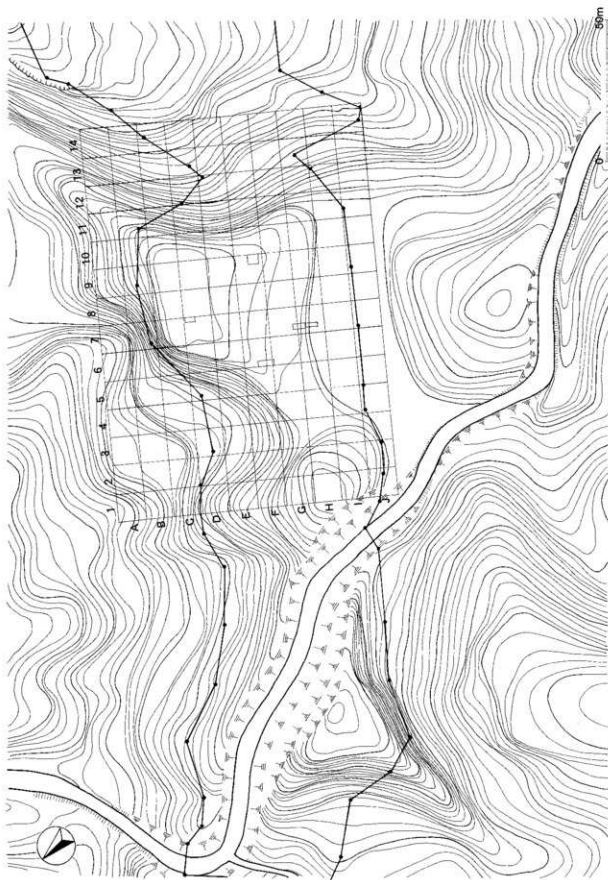
第2表 大田城跡の周辺遺跡地名表

番号	遺跡名等	所在地	地形	時代	遺物等	文献等
1	雪山	東市来町美山字雪山	台地	旧石器 縄文 近世～近代	剥片尖頭器 前平式土器 陶磁器類・竈道具	②
2	五本松窯	東市来町美山500・498-2	丘陵	近世	陶器	(町指) 昭和57. 2. 20
3	池之頭	東市来町美山字池之頭	台地	旧石器 縄文 古墳	細石刃 縄文土器 成川式土器	③
4	池之平	東市来町美山池之平ほか	丘陵	古墳 近世	土器・土師器 陶器	平成3年北薩・伊佐分布調査
5	御定式窯	東市来町美山973・974	丘陵	近世(後)	陶器	(町指) 昭和57. 2. 20
6	南京皿山窯	東市来町美山975	丘陵	近世(後)	陶器・白磁	(町指) 昭和57. 2. 20
7	水溜	東市来町美山上水溜ほか	段丘	中世 近世	土師器 陶器・磁器	平成3年北薩・伊佐分布調査
8	原	東市来町宮田原ほか	丘陵	弥生 古墳・中世 近世	土器 土師器 陶器	平成3年北薩・伊佐分布調査
9	馬通	東市来町美山馬通ほか	丘陵	弥生 古墳 近世	土器 土師器 陶器	平成3年北薩・伊佐分布調査
10	中宮田	東市来町宮田字中宮田	河岸段丘	古墳	土器片	昭和61年分布調査
11	伊勢後	東市来町養母伊勢後	段丘	古墳 中世 近世	土器 土師器 陶器	平成3年北薩・伊佐分布調査
12	松尾城跡	日吉町日置城の下	山麓緩斜面	文治年間	飛来大権現(板碑)	④ 小野小太郎家嗣の時よりの城。別称「日置城」「山田城」
13	桂山寺跡	日吉町日置城の下	山麓緩斜面		仁王像2基・供養中塔	(町指) 昭和52. 8. 12
14	鎮守前	日吉町日吉字鎮守前	低地	奈良～平安	土師器・須恵器	昭和62年分布調査
15	安養院跡	日吉町日置中牟礼	低地	近世 (元禄10)	寺の門前にあった仁王像(板碑)	④ 永禄10年(1567年)2月開基
16	大乘寺跡	日吉町日置吉里東	台地		礎石・宝篋印塔・石の階段・寺院跡墓地	(町指) 昭和44. 3. 11
17	熊野神社境内	伊集院町飯牟礼	低地		五輪塔・宝塔	①
18	道祖瀬戸	伊集院町				①

番号	遺跡名等	所在地	地形	時代	遺物等	文献等
19	狩待迫	伊集院町				①
20	上山路山	伊集院町		縄文 古墳		①
21	木場田	伊集院町				①
22	敷田尾	伊集院町				①
23	大田城跡	伊集院町大田城山道	丘陵	旧石器 縄文(早)	三稜尖頭器 岩本式土器・前平式土 器・石斧	本報告書
24	報恩寺跡	伊集院町大田中	低地	中世・近世	五輪塔・宝塔外	①
25	大知跡	伊集院町大田上	台地	中世・近世	五輪塔・無縫塔	①
26	一字治城跡	伊集院町大田	丘陵	中世 (鎌倉初期)		⑤ 別称「鉄丸山」 「伊集院城跡」
27	大内山城跡	伊集院町小城	山地	中世		① 別称「小城」
28	寺脇	伊集院町寺脇楠牟礼	台地 (海岸段丘)		貝殻条痕文・弥生土器	①
29	円福寺墓地群	伊集院町寺脇南ノ内663	小丘	中世	伊集院忠国夫婦の墓	(町指) 昭和40, 10, 12

## 引用文献

- ① 鹿児島県埋蔵文化財情報データベース 2004年 「市町村別遺跡一覧」
- ② 鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書(53) 2003年 「雲山・猿引遺跡」
- ③ 鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書(32) 2002年 「池之頭遺跡」
- ④ 日吉町郷土誌編さん委員会 1982年 「日吉町郷土誌 上巻」
- ⑤ 伊集院町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)～(6) 1988年～1993年 「一字治城跡」



第7図 遺跡周辺地形図及びグリッド配置図

## 第IV章 発掘調査の概要

### 第1節 発掘調査の方法

#### 平成8年度 確認調査

平成3年度に実施した分布調査やその後に行われた国と県の協議の結果に基づき確認調査は、平成8年12月2日から25日まで、年が明けて平成9年1月7日から8日までの実働17日間行った。

地形を勘案しながら2m×3mを基本とするトレンチを7か所に設定し、層位的に人力で掘り下げを行った。

地元の研究者等により中世の山城跡の可能性を指摘された遺跡であった為、山城跡を想定して調査に入ったが、Ⅱ層から近世の寛永通宝が1点出土しただけで、本丸や堀の跡と推定される部分からは山城跡に関連する中世の遺構・遺物等は、全く発見されなかった。

しかし、Ⅶ・Ⅷ層から旧石器時代のものと思われる黒曜石の剥片が数点出土した。

また、Ⅳ層からは、縄文時代早期の岩本式土器をはじめ前平式土器、打製石斧、磨石、剥片、チップ類が出土した。

#### 平成9年度 本調査

確認調査の結果を踏まえ、国と県は協議を行い、結果により平成9年12月1日から平成10年3月16日までの実働74日間、本調査を行った。国土交通省による南九州西回り自動車道（鹿児島道路）建設計画のセンターライン「S T A、375～380」間の南側の用地杭（幅杭）の2点間を結ぶ線を基準として、10m間隔の区画（グリッド）を設定した。縦は北側から南側方向へA・B・C・・・としてJまで付け、横は西側から東側方向へ1・2・3・・・として14まで付け、A-1区、B-2区のように呼称することとして、調査を行うこととした。

平成8年度の確認調査の結果に基づいて、表土は重機で排除したが、当遺跡が台地端の緩傾斜地にあることや草木や竹が繁茂していたことから、Ⅱ層は欠如していた。Ⅲ層（アカホヤ火山灰）下位の層は、残存していた。Ⅲ層からの遺物は少なく、条痕文土器片や石鏃、古墳時代の土器が数点出土しただけであった。遺構は検出されなかった。Ⅳ層からは、縄文時代早期の集石や土坑を検出した。遺物は、土器や石器が多く出土し、トータルステーションで取り上げた。また、調査区の東側周辺は、地層の横転が多数確認された。Ⅴ・Ⅵ層も同じように掘り下げ、遺物取り上げを行った。Ⅶ層からは、旧石器時代の遺物包含層の調査に入る為、2m×2mの小グリッドを設定した。千鳥格子に掘り下げを行った後、遺物の出土状況を踏まえ、必要な範囲でこれを拡張して調査を行う方法をとった。黒曜石・安山岩の剥片、チップ等がブロック状で検出されたほか、ホルンフェルスの三稜尖頭器も出土した。調査区東側は、層の堆積状況が不安定であった。

## 第2節 遺跡の層位

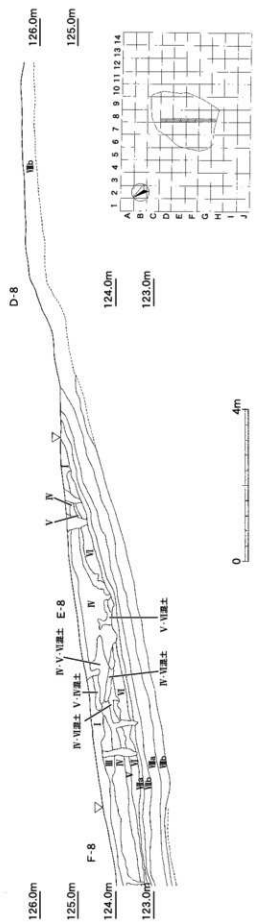
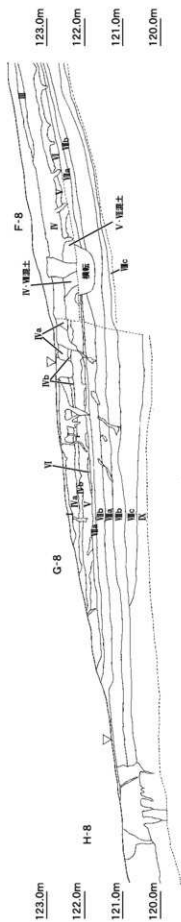
### 基本的層序

南九州では、遺跡に堆積する火山灰層の研究成果により、時代区分を明瞭に把握することができる。縄文時代草創期と早期は薩摩火山灰で、早期と前期はアカホヤ火山灰で区分することが大方可能となっている。

本遺跡は、標高約123mの台地端の緩傾斜に位置し、草木や竹が繁茂していたこと等もあり、地層の欠落した箇所もある。基本的層序は、おおよそ下図のとおりである。

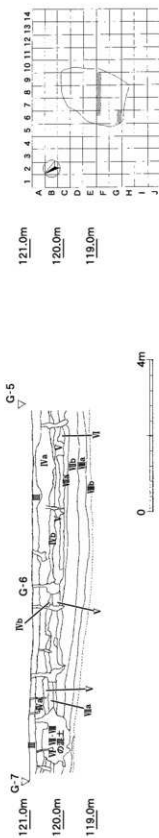
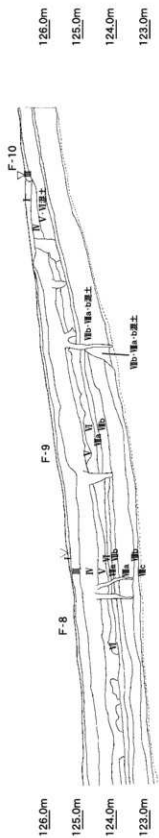
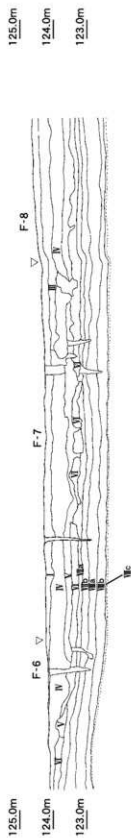
I	I層	表土，現耕作土
II	II層 黒色土	本遺跡では確認できなかったが周辺遺跡との比較の為II層を掲載した。
III	III層 黄褐色土	鬼界カルデラ噴出起源のアカホヤ（幸屋火砕流）火山灰（約6,300年前）
IV	IV層 暗乳褐色土	縄文時代早期の遺物包含層 やや粘質をもつ 下部はやや色が暗い
V	V層 黒褐色土	
VI	VI層 黄色砂質土	桜島噴出起源の薩摩火山灰（約11,500年前）
VII a	VII層 暗褐色土	旧石器時代（細石刃文化期）の遺物包含層 粘質が強く，下部は色が明るくなる 通称チョコ層
VII b		
VII a		
VIII b	VIII層 明褐色土	旧石器時代（ナイフ形石器文化期）の遺物包含層 シラス二次堆積土 下部は色がやや暗い
VIII c		
IX		
IX	IX層 シラス	始良カルデラ起源（約25,000年前）

第8図 基本土層柱状図



第9図 土層断面図1





第10図 土層断面図 2

### 第3節 旧石器時代の調査

旧石器時代の遺物はⅦ・Ⅷ層を中心に出土している。層位的に、細石刃文化期とナイフ形石器文化期に区分される可能性を検討したが、出土遺物を検討した結果、当初、細石刃核とされた資料は細石刃核でないことが判明し、かつ、Ⅶ層出土及びⅧ層出土資料において器種・石材における明瞭な差異を見出しえなかったことから、一括して資料提示をおこなった。遺物の平面的な分布状況からは、3ないし4つのブロックに区分される可能性があるが、一括して器種ごとに分類をおこなっているため、各資料の帰属については一覧表を参照されたい。

出土器種には図示したナイフ形石器、台形石器、三稜尖頭器、スクレイパー、彫器、石核、磨石、敲石類のほか、石器製作に伴う剥片、破片類など総計469点が出土している。

#### 接合資料

接合資料1・2はいずれも彫器を含む接合資料である。いずれも灰色を呈し白色の縞のある緻密な安山岩製で、同一母岩とみられる。

接合資料1は彫器及び破片が接合したもので、素材剥片は母岩から剥出後、接合図左面（素材剥片の腹面）の打縮部分に剥離を加えたのち分割される。分割面は剥離により平坦に整形され、分割面上から端部右側面、及び左側面方向から稜上に向け剥離を加え、端部に鶏冠状稜を形成したのち、再び分割面上から削片を剥出し彫刻刀面を作り出す。当初、偶発的に生じた剥離であることも考えられたが、分割剥片の破片が接合により、彫器の加工過程を明確にとらえることができた。

接合資料2は彫器及び剥片からなる接合資料である。接合した剥片はいずれも比較的平坦な剥離面を打面とし打面調整は行わず、同一打面上から連続して剥出されたものであるが、背面の剥離痕により、一連の剥片剥離以前に90°の打面転移が行われたものとみられる。剥片剥離は石核背部の調整を目的とする剥離と、目的剥片の剥離を交互に繰り返すように進行させ、不定形剥片を剥出する。3は接合資料中、最後に剥出されたやや大形の剥片で素材剥片末端部に左側片方向から剥離を加え打面を作り出したのち、末端の剥離面から左側辺稜上に錐状剥離を加え彫刻刀面を作り出している。剥片末端部への打面の作り出し及び彫刻刀面の再生は順次繰り返されたものとみられる。

#### ナイフ形石器

5は不純物を含む不透明で漆黒色を呈する黒曜石製の幅広の剥片を素材とするナイフ形石器である。下面部分が欠損するため全体形状には不明な点があるが、素材剥片の打面側にあたる右側辺に主要剥離面側からの急傾斜の剥離調整、及び右側面から背面上に向けた平坦剥離調整が加えられていることからナイフ形石器とした。左側辺下端にもわずかに急傾斜剥離調整の痕跡を留めており、二側辺加工のナイフ形石器である可能性がある。機能部とみられる上辺から先端部にかけて微細な剥離痕がみられる。

#### 台形石器

6は不純物を含む不透明で漆黒色を呈する不定形剥片を素材とする黒曜石製の台形石器である。左・右側辺はそれぞれ裏面側から急傾斜剥離調整を施したのち、左側辺は側面上から裏面に向けて、右側辺は側面上から表面・裏面に向けて、平坦剥離調整が施されている。

7も不純物を含む漆黒色の黒曜石製の台形石器で、左側辺部分は素材剥片の切断後、腹面側から部分的に急傾斜の剥離調整を加え、右側辺は素材剥片の打面を残置したまま背面側へ平坦剥離調整

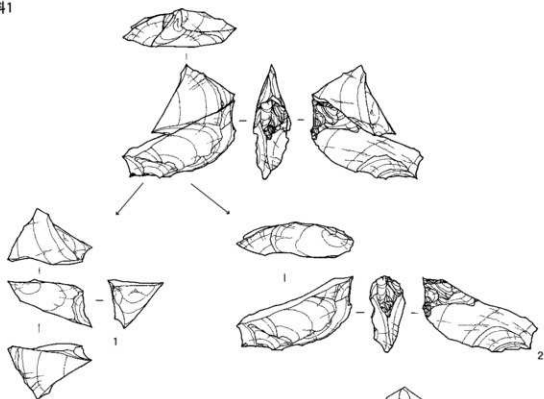


第11圖 旧石器器種別出土分布図

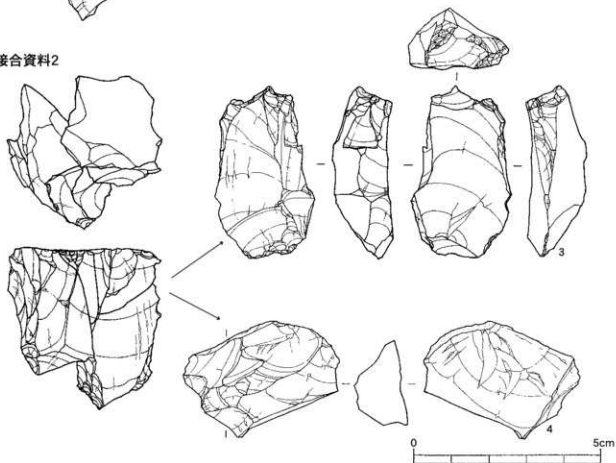


第12図 旧石器石材別出土分布図

接合資料1



接合資料2



第13圖 旧石器 1 (接合資料)

のみを施す。

### 三稜尖頭器

8は黄褐色のホルンフェルス製の三稜尖頭器で、いずれもG-8区から上半部、下半部が出土し、整理作業の過程で接合したものである。背面に稜をもつやや厚みのある縦長剥片を素材として、右側辺上部、及び基部側の左右側辺に腹面側から、それぞれやや荒い急傾斜の剥離で調整を加えたのち、基部部分の左側辺から稜上調整を施すとともに、左辺先端部付近及び同中間部分を除く縁辺部分を細かい急傾斜剥離調整で全体の形状を整えている。

9は不純物を含む漆黒色の黒曜石製で、上半部を大きく欠損することから石器の全体形状は不明である。腹面側からの急傾斜剥離により二次調整が施されていること、断面形状の厚みが厚くかつ概略三角形形状を呈することから三稜尖頭器に分類したが、厚みのあるナイフ形石器の一部である可能性もある。

10は不純物を含む漆黒色の黒曜石製で、横長のやや厚みのある剥片を素材とし、素材剥片の腹面側から部分的に荒い急傾斜剥離を施す。また、背面稜上に稜上剥離を加えるほか、図、右側辺部分から腹面側にも平坦剥離が施されている。下半部を大きく欠損するため全体の形状は不明であるが三稜尖頭器として図示した。先端部分の左側辺及び稜上には細かい剥離痕がみられる。

### スクレイパー

11は背面に自然面を有する不純物を含む漆黒色の黒曜石製のスクレイパーである。素材剥片の剥出時に同時に左側辺部に割れ面が生じたものとみられ、この結果生じた割れ面には二次調整は施されない。剥片の右側辺には腹面側から連続して調整剥離を加えられ、素材剥片の鋭利な末端辺に微細な剥離がみられることからナイフ形石器である可能性も検討したが、側辺の剥離調整角度がやや浅く、歯潰し加工とみなしえないことからスクレイパーとして図示した。

12は風化面が灰色を呈し白色の縞が入る緻密な安山岩製である。表裏面に周縁部分から求心状に剥離したネガティブな剥離痕がみられることから、剥離の進行によって扁平化した残核を転用したとみられる。図、左側辺部分に連続した剥離調整が施されていることからスクレイパーとして図示した。

### 石錐（彫器）

13は石錐として図示したが、同時に彫器を兼ねたものである。風化面が灰褐色を呈する緻密な黒色安山岩製で、石核の稜部から剥出されたとみられる背面に稜を有する縦長剥片の先端部分に稜上及び側辺部分に調整を加え、断面三角形の錐部を作り出す。稜上及び側辺から先端部にかけてみられる微細な剥離痕は使用によって生じたものである可能性が高いが磨耗は観察されない。また、上端部分には、図、左側面から調整を加え形状を整えたのち、端部稜上から槌状剥離を加え彫刻刀面が作り出されており、彫器として図示した3と機能部の形状及び形態に類縁性が認められる。

### 二次加工のある剥片

14は不純物を含む漆黒色の黒曜石製で、横長不定形で剥片末端辺に底面をもつ剥片を素材とする。図、上辺の打面部分及び底面右隅部分に急傾斜の調整剥離が施されており、唯一鋭利な縁辺部となっている図、右側辺を機能部とする台形石器である可能性もあるが、この場合、調整部位および形態的に非定型的なものであるため二次加工のある剥片として図示した。

15は青灰色不透明で白色の不純物を含む黒曜石製で、上半部を大きく欠損する。左側面及び打面上から背面側に向けて平坦剥離調整により形状を調整する。残存部分に急傾斜剥離調整はみられないが、ナイフ形石器の一部である可能性がある。

#### 石核

16は不純物を含む漆黒色の黒曜石で、裏面上方からの剥離はポジティブな剥離面であることから、厚みのある剥片を素材とする石核である。作業面側からの剥離で打面を形成し、打面端部に調整を加え、打点を左右に移動しながら連続してやや縦長の剥片を剥離する。

17は青灰色不透明で白色の不純物を含む黒曜石製の石核で、背面には自然面が残置されている。剥離面を打面に打面調整を行わずに不定形な剥片を剥離したものとみられ、両側面、及び上面の剥離痕から、90°単位で打面及び作業面の移動が行われたものとみられる。

18は白色の不純物を多く含む黒色半透明の黒曜石で、部分的に濁白色透明の部分がある。図、上面では周縁から求心状に剥片を剥離するが、基本的には順次打面を移動しながら不定形な剥片を剥離したものとみられる。上面右側縁部分には縁辺に細かい剥離が連続して施されており、剥片剥離後、スクレイパーに転用されたものとみられる。

19は青灰色不透明で白色の不純物を含む黒曜石製の石核で、非調整の剥離面を打面に、打面を移動しながら不定形な剥片を剥離したものとみられる。15・30・40は外観的には同一原産地の黒曜石とみられ、一般的に西北九州産に比定されるものである。

20・21はいずれも不純物を含む漆黒色の黒曜石で、36は左辺上部を欠損する。上面及び正面では打面と作業面を交換して不定形剥片の剥離がおこなわれている。いずれも基本的には順次打面を移動しながら不定形な剥片を剥離したものとみられる。

22も不純物を含む漆黒色の黒曜石であるが、他の同種の黒曜石の風化面が赤褐色を帯びた黒色を呈するのに比して、相当程度の風化を示すものの赤みを帯びない。不定形状の石核で各所に自然面が残置され、自然面・剥離面を打面に不規則に剥片を剥離する。

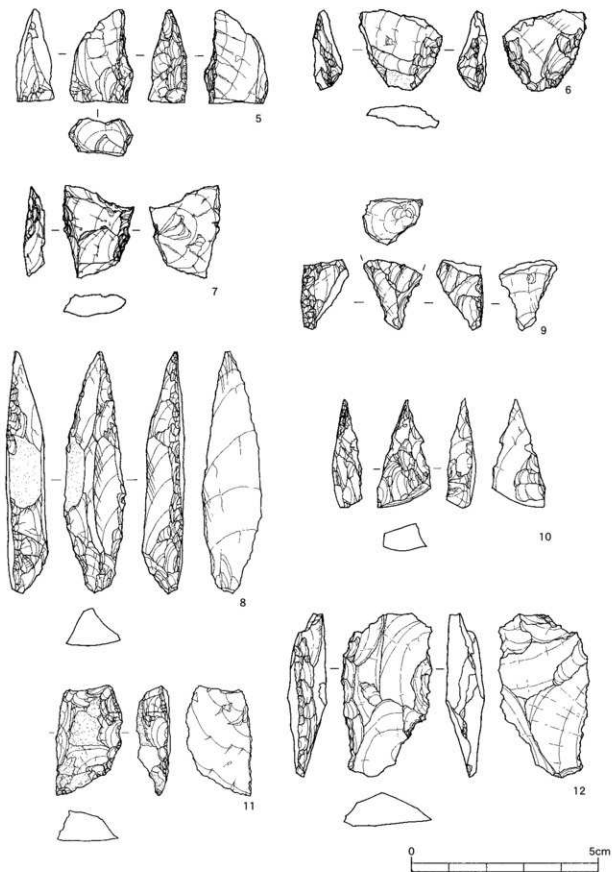
23は灰白色の風化面を呈する緻密な黒色安山岩で、図、上面を作業面に周縁部分から求心的に剥離が行われたのち、上面を打面にして周縁部分で剥離を行う。

24は不純物を含む漆黒色の黒曜石であるが、他の同一原産地と考えられる資料に比して、明らかに風化の程度が低いことから、出土層位はⅧ層であるが、縄文時代以降の遺物が何らかの原因で落ち込んだものである可能性が高い。

25も不純物を含む漆黒色の黒曜石で風化面は赤褐色を帯びた黒色を呈している。残核からみる限り打面調整は行わず、先行する剥離面を打面に不規則に打面及び作業面の位置を移動しながら剥片を剥離している。

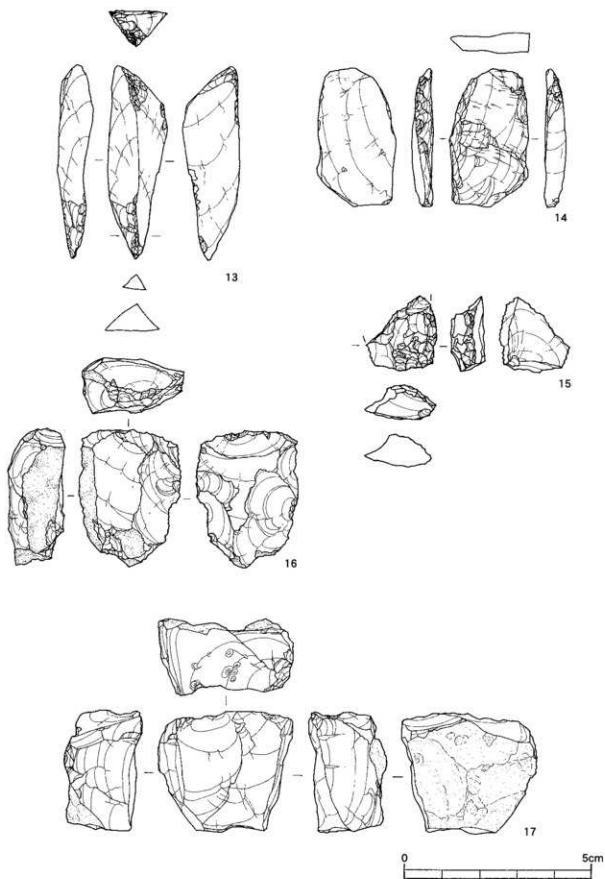
26は白色の不純物を多く含む、濁白色透明の部分がある黒色半透明の黒曜石である。先行する剥離面を打面にして、頻繁に打面移動を行いながら剥片を剥離する。

27は不純物を含む漆黒色の黒曜石で風化面は赤褐色を帯びた黒色を呈する。90°・180°前後左右に打面・作業面を移動しながら剥片を剥離する。基本的に打面調整は行わず、先行する剥離面を打面として剥片剥離を行う。

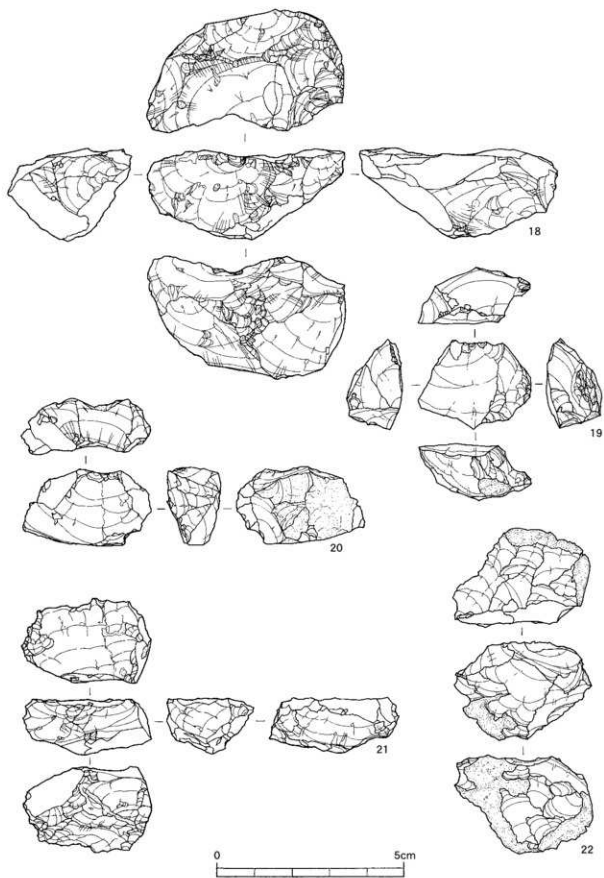


第14図 旧石器2 (ナイフ・台形石器・三稜尖頭器・スクレイパー)

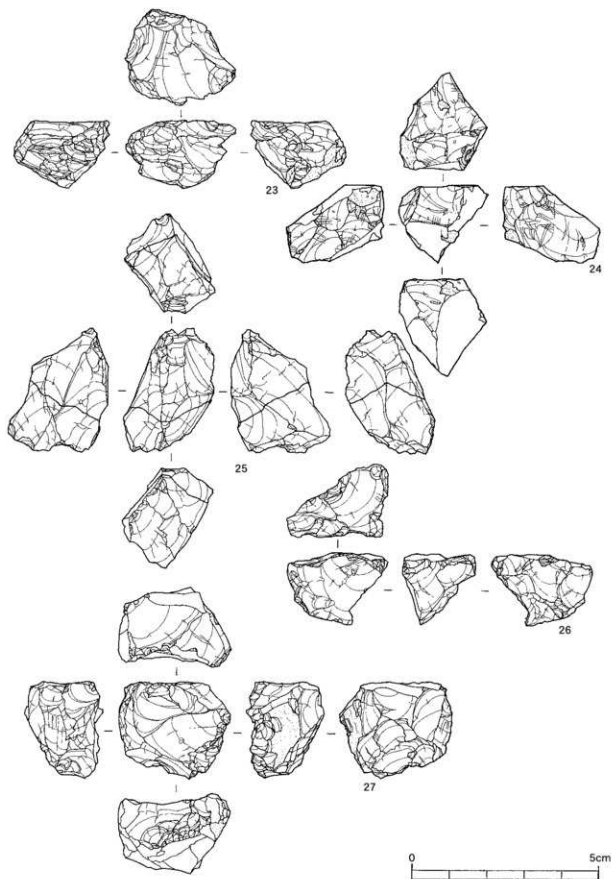




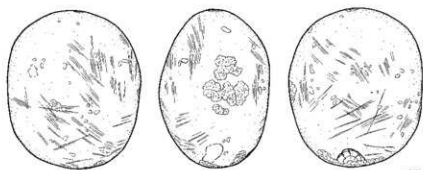
第15図 旧石器3 (石錐・剥片・石核)



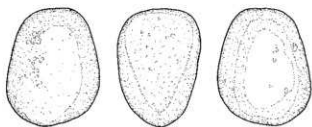
第16图 旧石器4 (石核)



第17图 旧石器5 (石核)



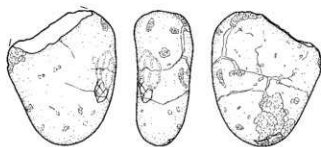
28



29



30



31



第18図 旧石器6 (磨・敲石)

## 磨石・敲石類

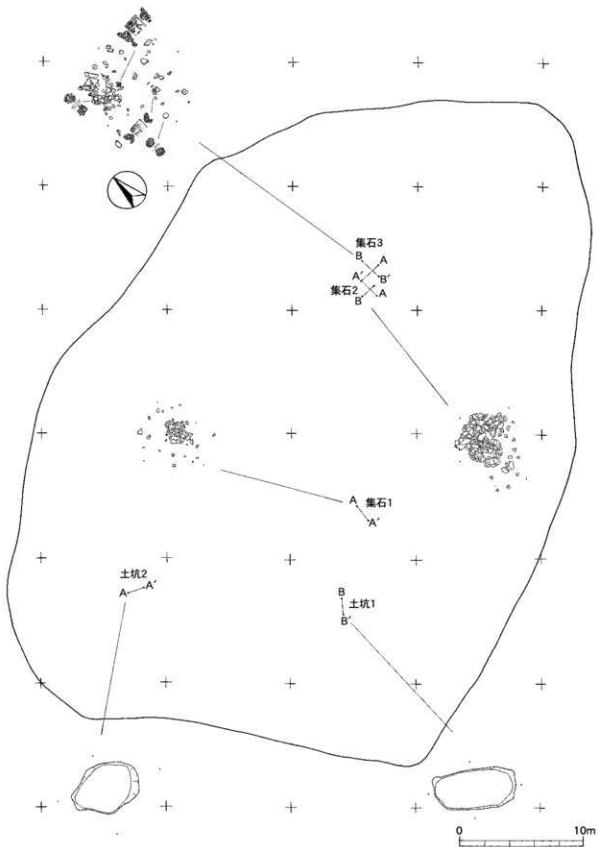
28は輝石・角閃石を含む多孔質の安山岩円礫で、表裏にやや平坦な摩擦面をもち、下部にアバタ状の敲打痕及び敲打に伴う剝離が生じている。右側面の敲打は整形を目的としたものとみられ、左右側面とも礫面が平滑化しているのは手ずれである可能性がある。

29も前記28と同一の多孔質の安山岩並円礫で、各平面形が隅丸の三角形状を呈するやや不定形の円礫であるが、礫面は平滑で部分的には摩擦を認める。礫端部には敲打による「つぶれ」がわずかに生じている。31は表面が赤褐色を呈する風化の激しい多孔質安山岩の円礫で下部を欠損する。被熱したものとみられ、礫面にはひび割れが生じている。礫端部に敲打痕及び敲打による「つぶれ」とみられるか所が部分的に集中してみられ敲石として使用された可能性があるが、被熱のため明確に認定することはできない。

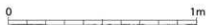
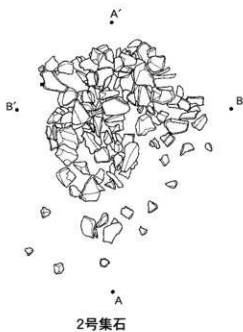
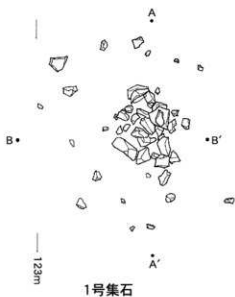
30は砂岩製の棒状の角礫で、下半を折れにより欠損する。側辺稜部には部分的に弱い敲打痕、「つぶれ」、磨耗がみられるほか、稜部に沿った礫面上に弱い摩擦減や線条痕が、礫面上に弱い敲打痕が観察される。

第3表 出土石器観察表(旧石器)

種別No	図No	注記No	器種	石材	出土区	出土層	出土レベル(m)	重量(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	備考
13	1	434	剥片	安山岩	G-7	VIIa	121.2	2.2	1.3	1.5	2.3	接合資料1-①
	2	235	彫器	安山岩	G-8	VIIb	121.2	4.3	2	1	3.1	接合資料1-②
	3	391	彫器	安山岩	G-7	VIIa	121.2	16.9	4.5	2.6	1.7	接合資料2-①
	4	199	剥片	安山岩	G-8	VIIa	121.4	14	4.1	2.6	1.4	接合資料2-②
	4	406	剥片	安山岩	G-7	VIIb	121.1	1.4	1.9	1.9	0.4	接合資料2-③
	4	391	剥片	安山岩	G-7	VIIb	121.2	1.8	2.3	1.6	0.4	接合資料2-④
	4	430	剥片	安山岩	G-7	VIII	121.3	1.1	1.9	1	0.9	接合資料2-⑤
14	4	198	剥片	安山岩	G-8	VIIa	121.5	1.3	2.2	1.5	0.5	接合資料2-⑥
	5	155	ナイフ	黒曜石	G-6	VIIb	119.8	3.8	2.6	1.7	1.1	
	6	831	台形石器	黒曜石	F-7	VIII	122.2	2.6	2.4	1.9	0.8	
	7	808	台形石器	黒曜石	F-7	VII	122.4	2.7	2.5	1.9	0.6	
	8	233	三稜尖頭器	ホルンフェルス	G-8	VIIa	121.2	10.5	6.5	2.6	1.1	
	9	220	三稜尖頭器	黒曜石	G-8	VIIb	121.7	2.8	2	1.6	1.3	基部のみ
	10	1776	三稜尖頭器	黒曜石	E-8	VII	123.9	2.3	3	1.4	0.8	先端部のみ
15	11	886	スクレイパー	黒曜石	F-7	VIII	122.0	4.6	3.1	1.7	0.9	
	12	400	スクレイパー	安山岩	G-7	VIIa	121.1	8.8	4	2.5	1	
	13	919	石核	安山岩	F-8	VIII	122.8	5.8	5.2	1.5	0.9	
	14	914	剥片	黒曜石	F-8	VII	121.9	5.7	3.8	2.2	0.6	二次加工
	15	409	剥片	黒曜石	G-7	VIIb	121.4	2.6	2	1.8	0.9	二次加工
	16	869	石核	黒曜石	F-6	VIII	122.1	17.3	3.7	2.7	3.6	
	17	211	石核	黒曜石	G-8	VIIa	121.5	24.7	3.5	3.4	3.3	
16	18	940	石核	黒曜石	F-8	VIII	121.5	33.9	3.9	2.8	2.5	
	19	419	石核	黒曜石	G-7	VIIa	121.3	8.2	2.7	2.5	2.4	
	20	825	石核	黒曜石	F-7	VIII	122.2	10.4	3.3	2.2	2.1	
	21	810	石核	黒曜石	F-7	VII	122.8	11.9	3.5	2.3	1.5	
	22	823	石核	黒曜石	F-7	VIII	122.3	22.7	3.5	2.6	2.6	
17	23	474	石核	安山岩	G-7	VIIa	121.0	12.9	3.1	2.5	1.8	
	24	867	石核	黒曜石	F-7	VIII	121.9	9	3	2.4	2.1	
	25	214	石核	黒曜石	F-8	VIIa	121.6	15	2.6	2	3.3	
	26	967	石核	黒曜石	F-8	VIII	121.6	6.7	3.1	2	1.9	
	27	811	石核	黒曜石	F-7	VIII	122.7	16.9	2.5	3	2.6	
18	28	152	磨・敲石	安山岩	G-6	VIIb	119.9	1028	10.5	9	7.3	敲打痕あり
	29	428	磨・敲石	安山岩		VIIa	121.3	360	7.7	5.9	5.5	
	30	421	磨・敲石	砂岩	G-7	VIIa	121.2	212	8.5	4.7	3.2	
	31	245	磨・敲石	安山岩	G-8	VIIb	121.3	231	8.9	7	3.9	



第19図 縄文時代早期遺構配置図



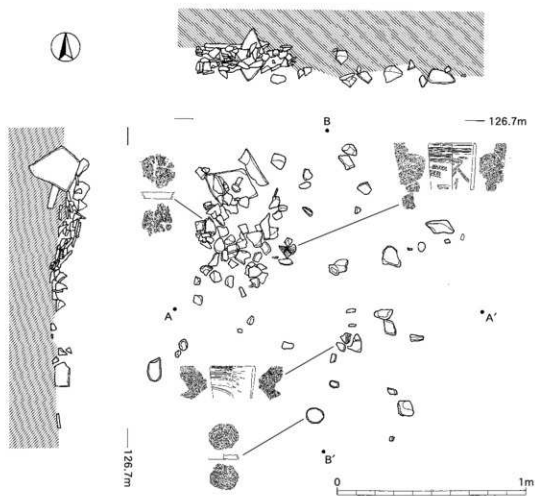
第20图 1・2号集石

## 第4節 縄文時代（早期）の調査

### 1 遺構

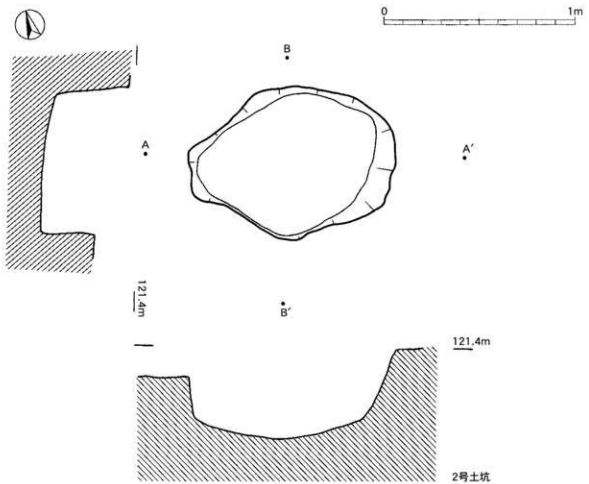
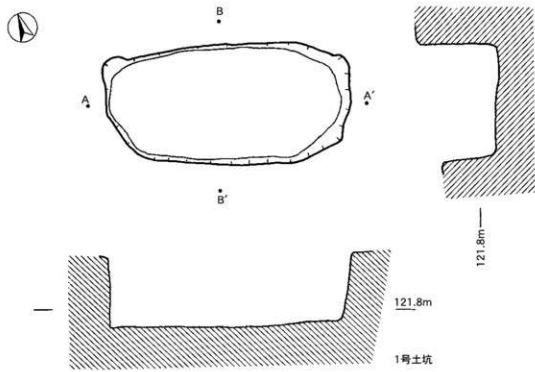
縄文時代早期の遺物包含層は、IV層である。遺構は、このIV層を掘り下げた段階で検出され、埋土中にもIV層が堆積していたことから縄文時代早期の遺構と考えている。この時期の遺構としては、集石3基と土坑2基が確認された。

3号集石はD-8区で検出された。167.5cm×157cmの範囲に、高低差32cmで確認された。掘り込みは持たない。周辺では縄文時代早期の土器片7点（p112・p113・p122・p169）が出土。1号集石は、F-8区で検出された。103cm×87cmの範囲に、高低差20cmで確認された。掘り込みは持たない。2号集石は、D-8区で検出された。125cm×100cmの範囲に、高低差28cmで確認された。掘り込みは持たない。1号土坑は、長径130cm、短径64.5cm、深さ43cmで、楕円形を呈している。樹痕が北側の長径左右に2か所、南側の長径右側に1か所確認されただけで、遺物の出土はなかった。2号土坑は、長径110cm、短径80cm、深さ47.5cmで、不整形を呈している。これも樹痕が北側の長径左側に1か所、南側の短径に1か所確認されただけで、遺物の出土はなかった。



第21図 3号集石





第22图 1·2号土坑

## 2 遺物

本遺跡の縄文時代早期の遺物包含層（IV層）を中心に出土した遺物は、出土状態から原位置を限りなく近い状態で保っていると判断した土器2,225点、石器440点をトータルステーションで取り上げた。急斜面で層が不安定だったり原位置を保っていなかったりしたものについては、区一括取り上げを行った。ここでは、IV層の出土遺物を取り上げるが、分類や接合状況によっては便宜的に他の層からの出土遺物も取り上げた。

### (1) 土器

土器の種類は、貝殻文円筒形土器で、底部は平底を成しているのが中心である。分類基準として、本遺跡で特徴が表れている口縁部形状・文様・口唇部形状を基準に分類を行った結果、第25図のように5つに分類（Ⅰa類、Ⅰb類、Ⅱa類、Ⅱb類、Ⅱc類）できた。凡例でも述べているが、本報告書ではⅠ類を岩板式土器、Ⅱ類を前平式土器と呼称して使用する。

また、土器片総出土数2,225点のうち口縁部を残す分類可能な個体数は、155点であった。分類別には、Ⅱc類が約28%と最も多く、Ⅰb類が約21%、Ⅰa類が約20%、Ⅱa類が19%、Ⅱb類が12%となる。出土した口縁部は残存状態や接合状況にもよるが、殆ど図化を行った。岩板式土器に比定すると考えられるⅠ類と前平式土器に比定すると考えられるⅡ類の出土比率は、41:59で前平式土器が多い。

始めにⅠ類を岩板式土器として分類した根拠について述べる。まず、口唇部内面に段を有することが基本となり、口唇端部が小波状を呈し丁寧な器面調整を施しているという点である。口縁部上端には貝殻もしくはヘラ・櫛状と思われる工具で斜位の刺突文、横位の刺突線文、爪形状の刺突文を連続して施すものなどが観察できたので、以下のような細分を設けた。

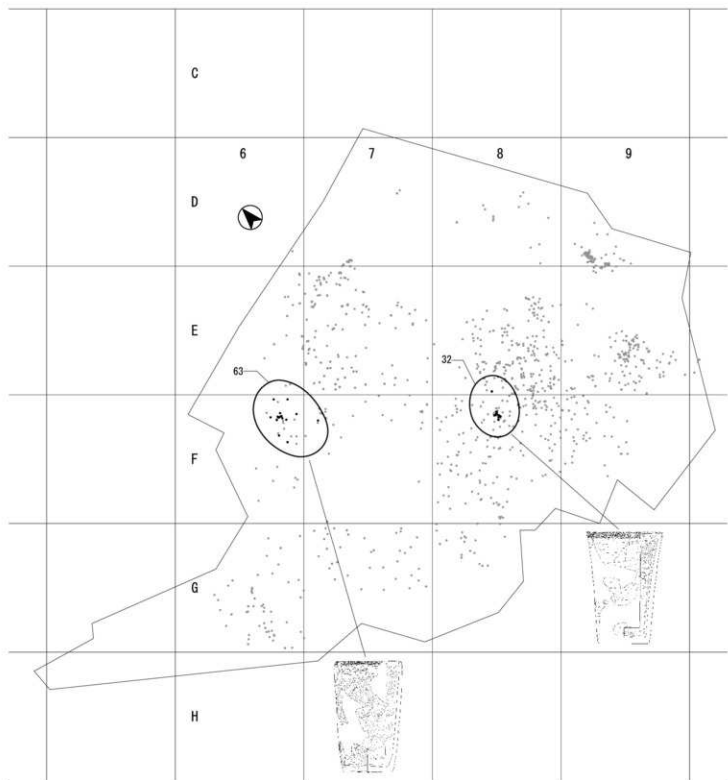
①Ⅰa類土器の口縁部上端は、貝殻もしくはヘラ・櫛等による縦・斜位の連続する刺突文を施し、口唇端部は小波状を呈する。器面は、ナデ調整のものや浅い糸痕調整のものがあり、極めて丁寧に仕上げられている。口縁部内面は、段を有する。

②Ⅰb類土器の口縁部上端は、貝殻もしくはヘラ・櫛等による縦・斜位の連続する刺突文を施し、口唇端部は小波状を呈している。器面は、木口状もしくは繊維状の工具によると思われる調整や貝殻糸痕調整が施されているが丁寧である。口縁部内面は、浅い段を有する。

つまり、岩板式土器として位置付けたⅠa類土器・Ⅰb類土器の細分類の根拠は、口唇部内面に明瞭な段を有するか、浅い段を有するかである。器面調整が丁寧であるという特徴が共通して認められるが、Ⅰb類土器がⅠa類土器よりも工具による調整もしくは貝殻糸痕調整と思われる痕跡が強く残るという特徴もある。

次にⅡ類を前平式土器として分類した根拠について述べることにする。Ⅰ類の岩板式土器と比べて口唇部内面に段を有しないこと、口唇端部が平坦な面を呈していることが基本となる。口縁部上端には貝殻もしくはヘラ・櫛状と思われる工具で縦・斜位の連続する刺突文を施す。器面には横・斜位の若干粗い貝殻糸痕調整が施されているのが観察できたので、Ⅱ類も以下のような細分を設けた。

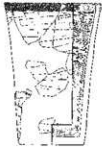




①Ⅱa類土器は口唇端部と口縁部上端にそれぞれ一回ずつ、貝殻もしくはヘラ・櫛による縦・斜位の連続する刺突文を施し、口唇端部は平坦な面を呈する。口縁部内面は、段の痕跡をもっている。



第23図 縄文土器出土分布図



第24図 縄文土器類別出土分布図

		口縁部外面	口縁部内面	胴部外面	胴部内面	模式図
岩 本 式 土 器	I a 類	・口縁部上端に貝殻、ヘラ等による縦、斜位の連続刺突・口唇端部は小波状・丁寧なナデ調整	・口唇部内面に段を有する	・丁寧なナデ調整・木口状もしくは繊維状の工具による調整・極細の貝殻条痕調整	・浅い横、斜位の貝殻条痕調整	
	I b 類	・口縁部上端に貝殻、ヘラ等による縦、斜位の連続刺突・口唇端部は小波状・浅い貝殻条痕調整	・口唇部内面に浅い段を有する	・木口状もしくは繊維状の工具による調整・横、斜位の貝殻条痕調整	・浅い横、斜位の貝殻条痕調整	
前 平 式 土 器	II a 類	・口唇端部は平坦で、口唇端部と口縁部上端にそれぞれ貝殻、ヘラ等による斜位の連続刺突	・口唇部内面に段の痕跡をもっている	・横、斜位の貝殻条痕調整	・横、斜位の貝殻条痕調整	
	II b 類	・口唇端部は平坦で、口唇端部と口縁部上端にそれぞれ貝殻、ヘラ等による斜位の連続刺突	・口唇部内面は段を有しない	・横、斜位の貝殻条痕調整	・横、斜位の貝殻条痕調整	
	II c 類	・口唇端部は平坦で、口縁部上端に貝殻、ヘラ等による1列の縦、斜位の連続刺突	・口唇部内面は段を有しない	・横、斜位の若干太い貝殻条痕調整	・横、斜位の貝殻条痕調整	

第25図 縄文時代早期土器分類模式図



第26図 縄文器1 (I a類)

② II b 類土器は口唇端部と口縁部上端にそれぞれ一回ずつ、貝殻もしくはヘラ・櫛による縦・斜位の連続する刺突文を施し、口唇端部は平坦な面を呈する。口縁部内面は、段を有しない。

③ II c 類土器は口縁部上端に貝殻もしくはヘラ・櫛による一列の縦・斜位の連続する刺突文を施し、口唇端部は平坦な面を呈する。口縁部内面は、段を有しない。

要するに、前平式土器として位置付けた II a 類土器・II b 類土器・II c 類土器の細分類の根拠は、口唇部内面に若干の段の痕跡をもつものが存在する II a 類土器と段を有しない II b 類土器・II c 類土器に分けられ、さらに口唇部に貝殻腹縁部の押圧もしくはヘラ状刺突具による刻みを上からと横からの2回施すものが II a 類土器と II b 類土器となり、横からの1回だけ施すものが II c 類土器となる。

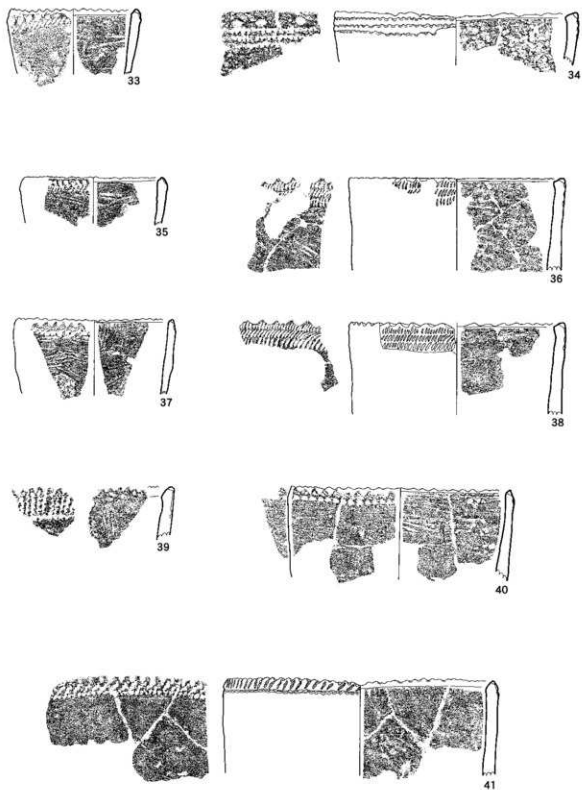
#### I a 類土器（第26図～第28図）

32は、完形復元された岩本式土器で、口径19.2cm、器高28.2cm、底部径13cm（内径10.4cm）である。口唇部の断面形状は内面に0.5cm幅の斜段を有し、鈍角な三角形を呈している。口唇端部は棒状工具による刻みを施し、7mm程度間隔に連続する小波状を呈している。口縁部はやや外反し、上端には貝殻腹縁部による縦幅1cm程度の範囲に斜位（左さがり）の連続する刺突文を施している。その下位にはススが付着しているのが観察される。胴部から底部にかけての外面は、非常に目路の細かい条痕調整及び指による横方向のナデ調整が施され、極めて丁寧に整形されている。一部、浅い貝殻条痕文の調整も観察される。内面は口唇部に明瞭な稜線を残し、ナデ調整が施されている。口縁部から横・斜位の浅い貝殻条痕調整が施されている。所々、指頭圧痕も観察される。底部の接地面は、円形状で工具によるナデ整形を行い、平坦である。底部内面には、放射線状の凹線が中央部から外側へ向かって施されている。器壁部との接合のために生じた線と推測する。

34は口唇部内面に緩やかな段を有し、口唇端部は貝殻腹縁部もしくは棒状工具による押圧で波状を呈する。口縁部上端には横位の連続する貝殻刺突線文が3列に施されている。口縁部の形状が、やや内湾している。38は胎土内に1mm程度の金色の雲母を多量に含んでいる。本遺跡の他の土器の胎土内には認められない。口唇部内面に緩やかな段を有し、口唇端部は貝殻腹縁部もしくは棒状工具による押圧で波状を呈している。口縁部上端には、ヘラ・櫛状刺突具によると思われる斜位の連続する爪を押しした形に似た刺突文が3列に施されている。形状や胎土から36と同一個体の可能性がある。41は口唇端部が波状を呈し、口縁部上端は貝殻腹縁部による斜位の連続する刺突文が施されている。その下位には貝殻腹縁部による横位の連続する貝殻刺突線文が一列に施され、器面は丁寧に調整が成されている。口唇部内面は段を有する。

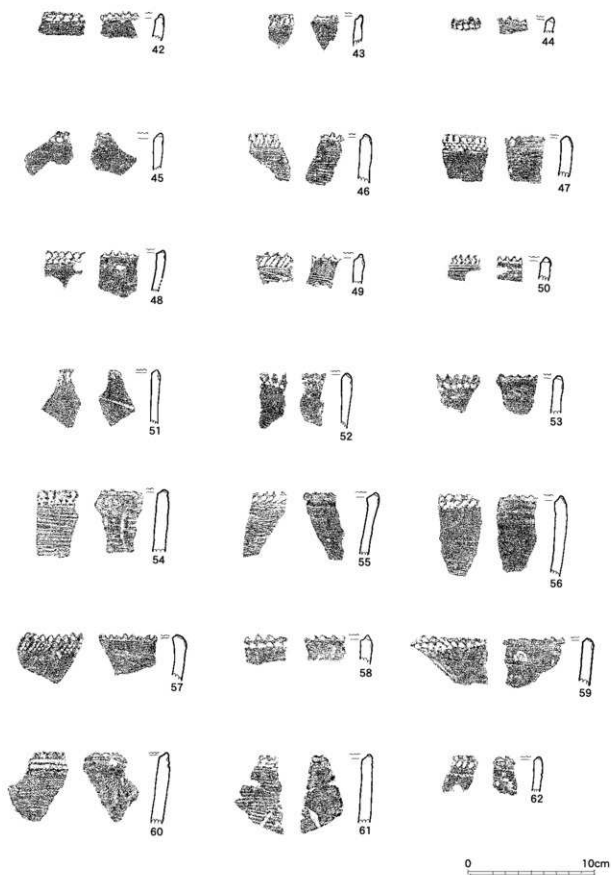
#### I b 類土器（第29図～第35図）

63も完形復元された岩本式土器である。口径17.7cm、器高31.1cm、底部径13.2cm（内径12.0cm）である。口唇部の断面形状は内面に0.3cm幅の斜段を有し、三角形を呈している。口唇端部は貝殻による刻みを施し、3mm程度間隔に連続する小波状を呈している。口縁部はやや内湾し、上端には縦幅1cm程度の範囲に直径2mm程度で貝殻による点状の細かい刺突が無数に施され、その下位には縦幅4cm程度の範囲に横方向の貝殻条痕調整（条痕幅3mm程度）が施されている。胴部から底部にかけての外面には、縦・斜位の条痕調整（条痕幅3mm程度）が施されている。底部の接地面から上へ縦幅4cm程度の範囲にも口縁部で観察された横方向の貝殻条痕調整（条痕幅3mm程度）が施され

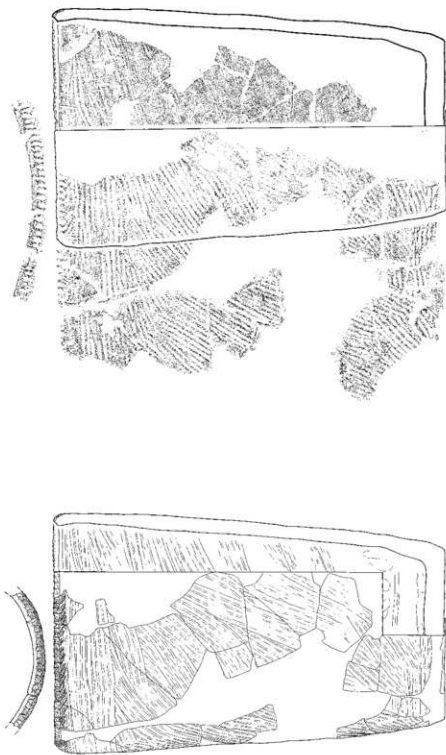


第27図 縄文土器2 (I a類口縁部)

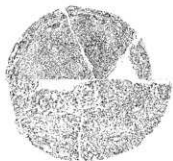




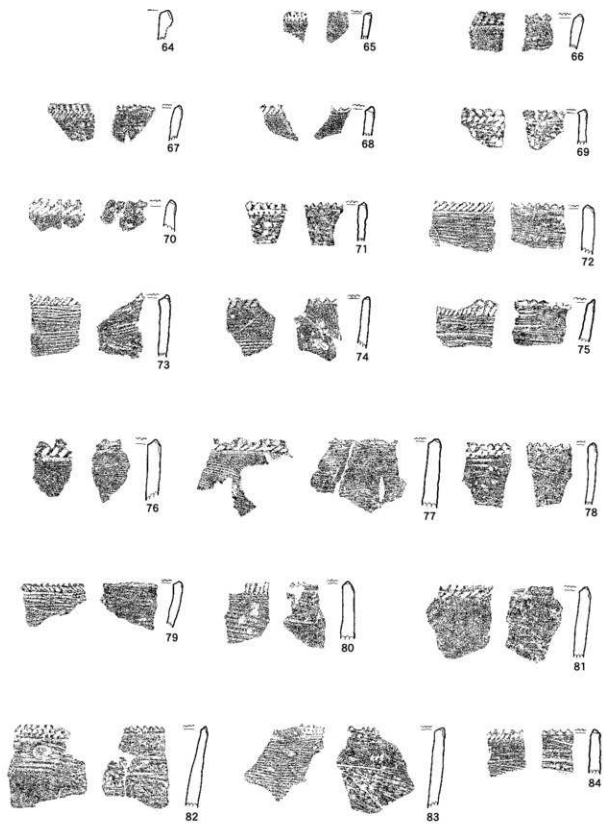
第28図 縄文土器3 (I a類口縁部)



63

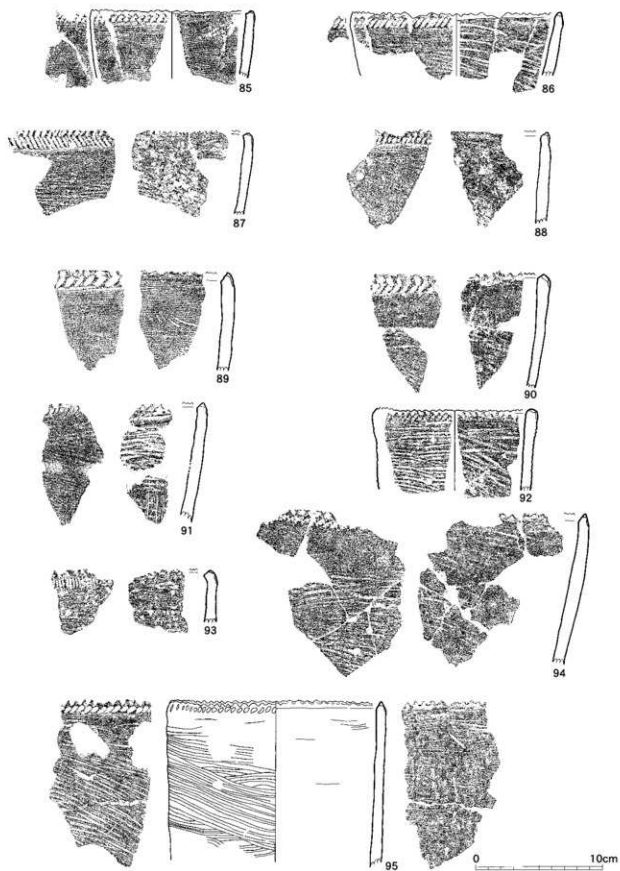


第29図 縄文器4 (I b類)



0 10cm

第30図 縄文土器5 (I b類口縁部)



第31図 縄文土器6 (I b類口縁部)

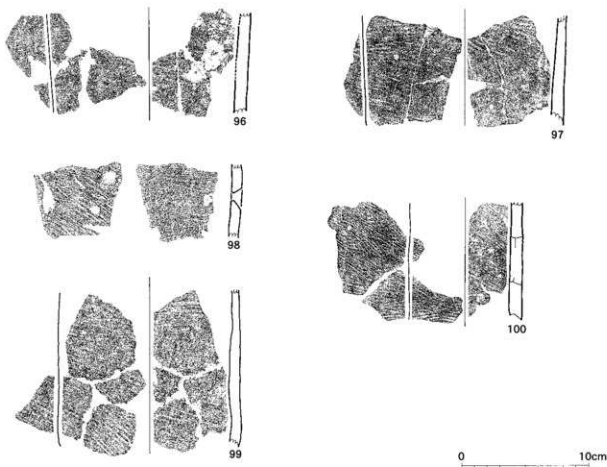
ている。内面は口唇部に稜線が残り、ナデ調整が施されている。口縁部から横・斜位の貝殻条痕調整が施されているが、底部内面から上へ7.5cm程の高さに達すると横方向の貝殻条痕調整が施され、その下はナデや指頭圧痕で整形されている。胴部と底部の内面接着部分は、ヨコナデ整形である。底部の接地面は、円形状にナデ整形を行い、ほぼ平坦である。底部内面にもナデ調整が施されている。95は口唇部内面に浅い段を有し、貝殻腹縁部による押圧で波状を呈する。口縁部上端には斜位の連続する貝殻刺突文が施されている。全体に横・斜位の若干、彫りが深い貝殻条痕文による調整が施されているが、器面の調整は粗くはない。

### I類胴部（第32図）

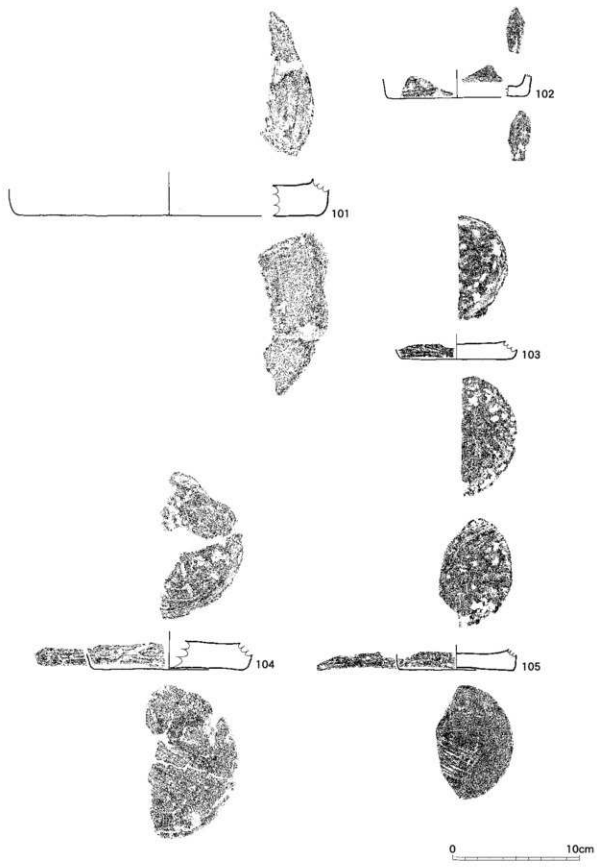
胴部は、接合により判明したものや土器片そのものが胴部として判断できたI類・II類併せた178点のうち、一部ではあるがI類の特徴が表れ、実測や拓本に耐えうる残存状態が良好な5点を図化した。全て円筒形を成している。外面が横方向を主体とするナデ仕上げや浅い貝殻条痕等による丁寧な調整のものを分類の根拠とし、掲載した。

### I類底部（第33図～第35図）

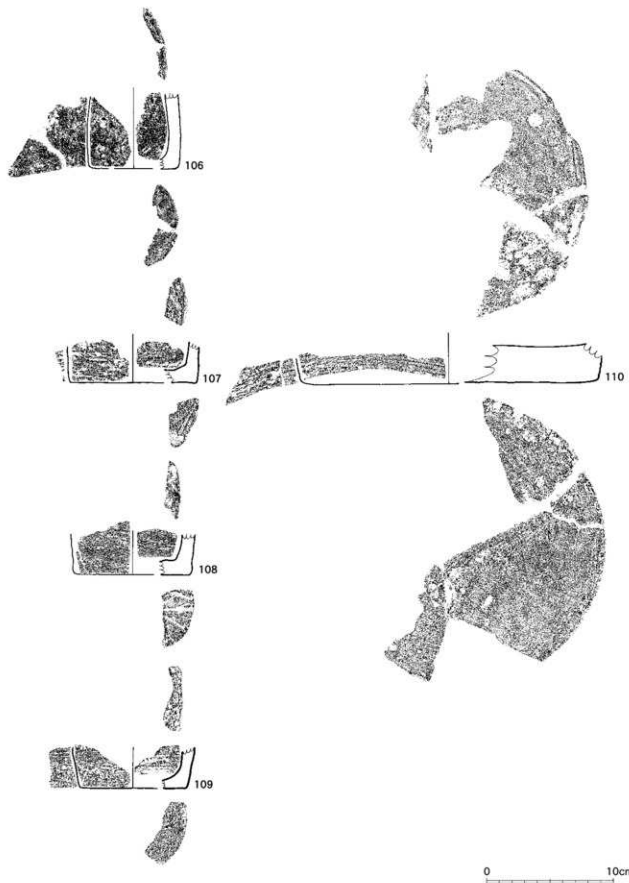
底部も胴部と同様、接合により判明したものや土器片そのものが底部として判断できたI類・II類併せた63点のうち、一部ではあるがI類の特徴が表れ、実測や拓本に耐えうる残存状態が良好な15点を図化した。分類の根拠としては、ナデ仕上げやへら状の工具と思われるもので、丁寧な調整が施されているからである。形状は全て円形を成している。



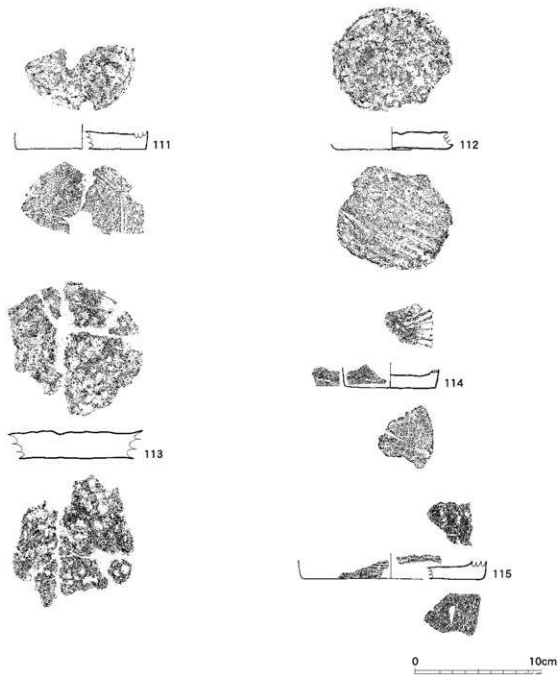
第32図 縄文土器7（I類）



第33図 縄文土器 8 (I類底部)



第34図 縄文土器9 (I類底部)



第35図 縄文土器10 (I類底部)



## II a 類土器 (第36図, 第37図)

122は3号集石周辺で出土した。口唇端部と口縁部上端には貝殻腹縁部の押圧による刻みが上からと横からの2回施されている。その下位には横方向を主体とする横・斜位の浅い貝殻条痕調整が施されている。内面にも横・斜位の貝殻条痕調整が施されている。口縁部の内面には僅かだが段の痕跡が観察される。143も口唇端部と口縁部上端には貝殻腹縁部の押圧による刻みが上からと横からの2回施されている。その下位には横方向の浅い貝殻条痕調整が施されている。内面にも横方向の浅い貝殻条痕調整が施されている。口縁部の内面には122と同様に僅かだが段の痕跡が観察される。131は刻みの向きが他の口縁部は右方向なのにに対し左方向である。口唇端部と口縁部上端に貝殻腹縁部もしくはへら状工具の押圧による刻みが上からと横からの2回施されている。

## II b 類土器 (第38図)

147は残存状態が良好とは言えないが、口唇端部と口縁部上端には貝殻腹縁部もしくはへら状工具の押圧による連続する刻みが上からと横からの2回施されている。その下位には横位の貝殻条痕調整が施され、補修孔も観察される。150も口唇端部と口縁部上端に貝殻腹縁部の押圧による連続する刻みが上からと横からの2回施されている。その下位には横位の貝殻条痕調整が施されている。内面は斜位の浅い条痕が観察されるが、荒々しい仕上げとはなっていない。153も口唇端部と口縁部上端に貝殻腹縁部の押圧による連続する刻みが上からと横からの2回施されている。その下位には横方向の細かく、浅いハケ目状の調整が施され、丁寧に仕上げられている。内面も同様である。

## II c 類土器 (第39図～第45図)

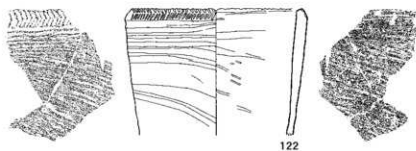
166は口唇端部が平坦な面を呈し、口縁部上端は貝殻蝶番部の押圧による横位の連続する刺突文が一行に施されている。その下位には幅2mm・深さ1mm程度で斜位の貝殻条痕調整が鮮明に施されている。内面は横方向のナデ仕上げである。口縁部は、やや内湾している。168は口唇部がやや尖り、口唇端部は平坦な面を呈する。口縁部上端には貝殻腹縁部による斜位の連続する刺突文が一行に施されている。その下位には横・斜位の貝殻条痕調整が施されている。内面は横方向を主体とする貝殻条痕調整が施されており、全体的に器の厚みが薄い感じがする。170は口唇端部が平坦な面を呈している。口縁部上端は貝殻腹縁部による縦位の連続する刺突文が一行に施されている。その下位には横位の貝殻条痕調整が施されている。内面は横方向を主体とする条痕調整が施されている。173は口唇端部が平坦な面を呈し、口縁部上端には貝殻腹縁部による斜位の連続する刺突文が一行に施されている。その下位には幅3mm・深さ1mm程度で斜位の貝殻条痕調整が鮮明に施されている。若干太めとも捉えられる貝殻条痕文である。内面はナデ仕上げを主体にしているが、細く浅い条痕文が四方八方に施されているのが観察できる。

## II 類胴部 (第43図)

胴部は、接合により判明したものや土器片そのものが胴部として判断できたI類・II類併せた178点のうち、一部ではあるがII類の特徴が表れ、実測や拓本に耐えうる残存状態が良好な4点を図化した。全て円筒形を成している。外面の器面調整が、横・斜位の粗い貝殻条痕調整のものを分類の根拠とし、掲載した。

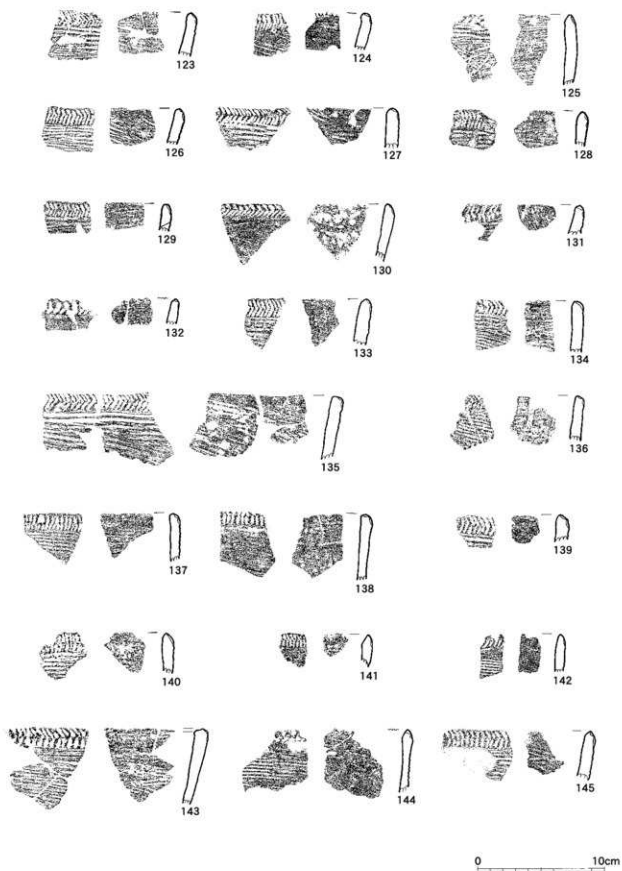
## II 類底部 (第44図, 第45図)

底部も胴部と同様、接合により判明したものや土器片そのものが底部として判断できたI類・II

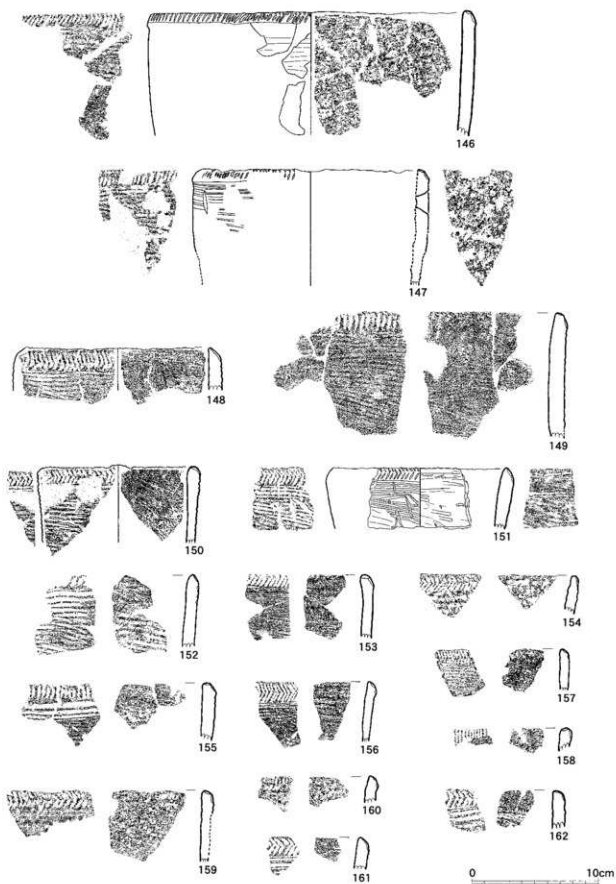


0 10cm

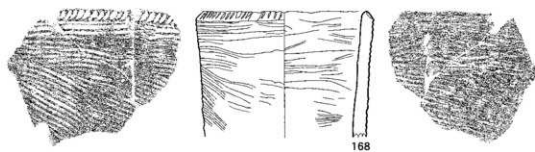
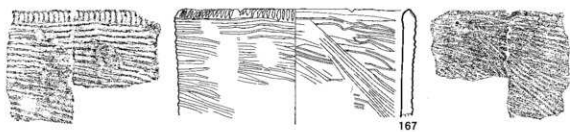
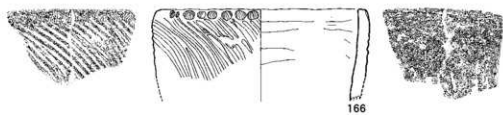
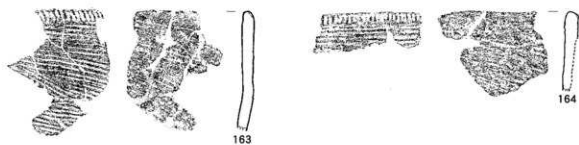
第36図 縄文土器11 (II a類口縁部)



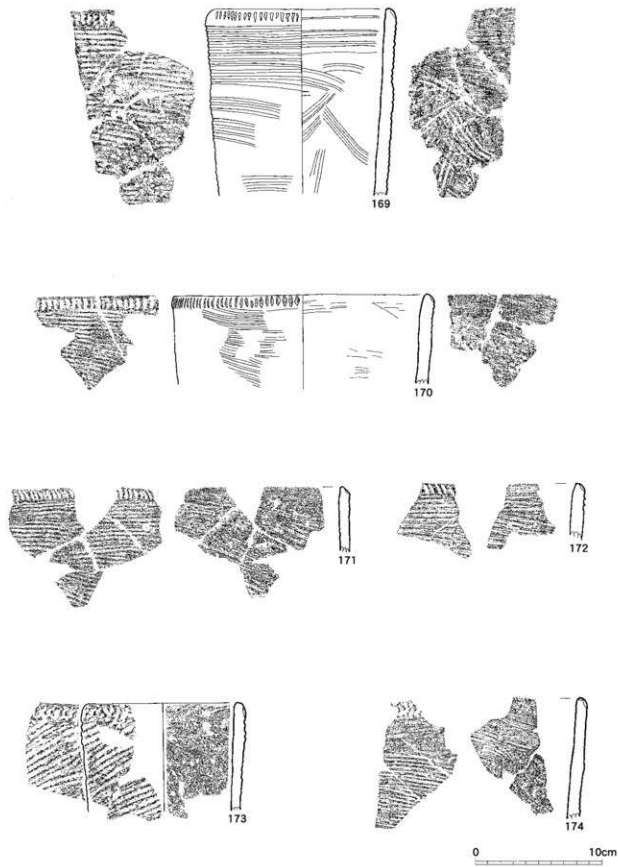
第37図 縄文土器12 (Ⅱ a類口縁部)



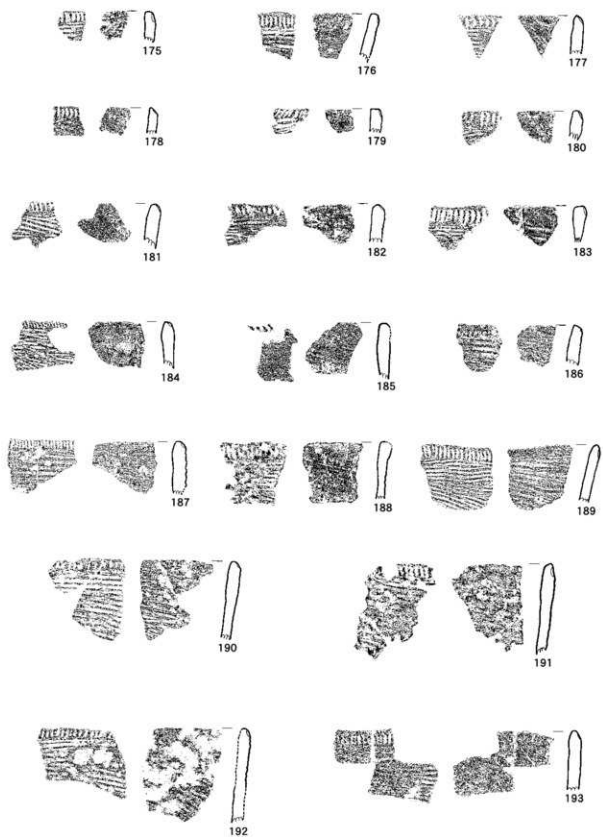
第38図 縄文土器13 (II b類口縁部)



第39図 縄文土器14 (II c 類口縁部)



第40図 縄文土器15 (II c 類口縁部)



第41図 縄文土器16 (II c類口縁部)

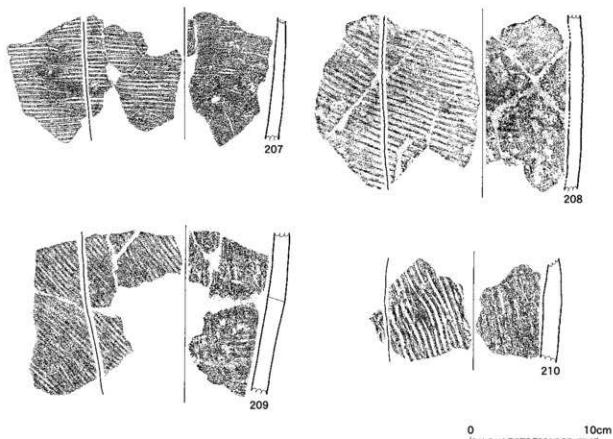


第42図 縄文土器17 (II c 類口縁部)



類併せた63点のうち、一部ではあるがⅡ類の特徴が表れ、実測や拓本に耐えうる残存状態が良好な11点を図化した。底部外面に横・斜位の貝殻条痕文が観察され、調整を施していることを分類の根拠とした。形状は円形を成し、底部内面は、ナデ仕上げのものや放射線状の凹線があるものなどがある。接地面は、ナデ成形ものや貝殻条痕文があるものがあり平坦である。

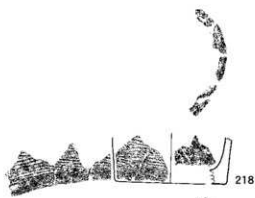
216は内面・外面・接地面に貝殻条痕調整が施されている。内面は中央部から外側へ、外面は横位、接地面は無作為とも思われる方向に貝殻条痕文が観察される。220は胴部から底部にかけて外面・内面共に横・斜位の貝殻条痕調整が施されている。底部内面はナデ調整で貝殻腹縁部による長さ1cm程度の刺突が網状に大きく4か所に分かれて施されている。



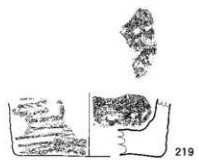
第43図 縄文土器18 (Ⅱ類)



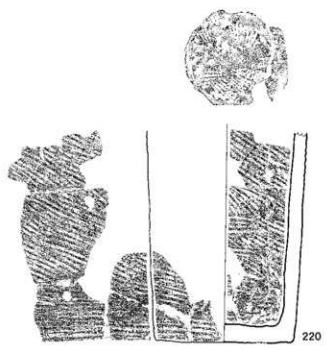
第44図 縄文土器19 (Ⅱ類底部)



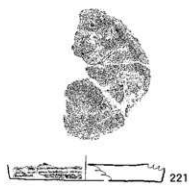
218



219



220



221

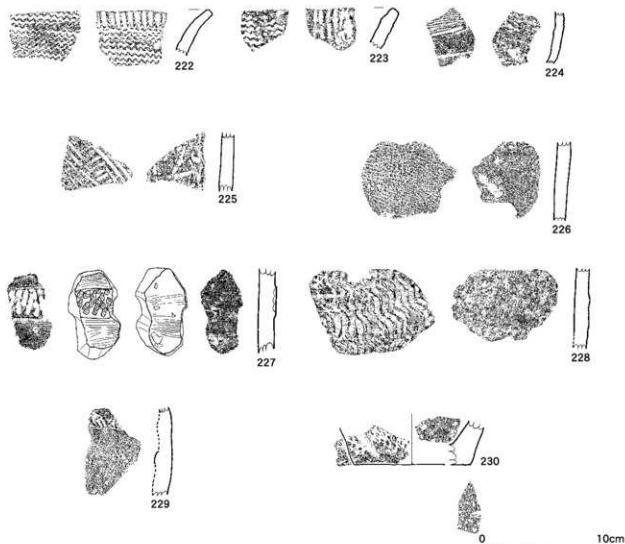


第45図 縄文土器20 (Ⅱ類底部)

② その他の縄文土器

その他の縄文土器として9点が出土し、全て図化した。

222は山形押型文土器の口縁部の一部である。口縁部は平口縁を呈し、大きく外反している。内面は稜を形成せず、上段に縦方向の長さ1cm程度、幅4mm程度の原体条痕を残し、下段は山形の押型文を施している。角閃石が多く含まれている。230は、楕円押型文土器の底部の一部である。平底を呈し、内面はナデ調整を施し、外面には一部であるが0.4cm×0.4cm程度の楕円文が施されているのが観察される。228は山形押型文土器の胴部の一部と思われるもので、斜め方向に山形間幅3mm程度の間延びした山形の押型文を施している。本県横川町の中尾田遺跡でも類似したものが出土している。222・223の形態とは異なると見られる。227は部位不明だが外面に縦幅2.3cm程度の範囲に斜位の貝殻刺突を施し、刺突部分の断面形がやや膨らみをもつ。刺突部分以外の外面・内面には横位の細かく浅いハケ目が観察される。岩本式土器に類似した器面調整を施しているのが特徴的である。226は外面に微細な気泡のように無数の罅が生じており、断面は焼けて胎土が鱗状になっている。



第46図 縄文土器21（その他）

第4表 出土土器観察表

群別	図No	注記No	出土区	出土層	出高(±4) (m)	類	部位	胎土	調整		遺存状態	色調		文様	備考	
									外面	内面		外面	内面			
26	32	706	F-6	IVb	123.506	1a	胴部	石英・長石・角閃石・輝石	染痕(2mm)	染痕(4mm)	完形復元	黒	黒	条痕	—	
		708	F-6	I	124.002	1a	胴部	石英・長石・角閃石・輝石	染痕(2mm)	染痕(4mm)		黒	黒	条痕	—	
		716	F-6	IVb	123.858	1a	口縁部	石英・長石・角閃石・輝石	染痕(2mm)	染痕(4mm)		黒	黒	条痕	刷文・白割刷み	内面の段有
		715	F-6	IVb	123.849	1a	胴部	石英・長石・角閃石・輝石	染痕(2mm)	染痕(4mm)		黒	黒	条痕	—	
		714	F-6	IVb	123.826	1a	胴部	石英・長石・角閃石・輝石	染痕(2mm)	染痕(4mm)		黒	黒	条痕	—	
		一括	D-8	—	1a	胴部	石英・長石・角閃石・輝石	染痕(2mm)	染痕(4mm)	黒		黒	条痕	—		
		718	F-6	IVb	123.844	1a	口縁部	石英・長石・角閃石・輝石	染痕(2mm)	染痕(4mm)		黒	黒	条痕	刷文・白割刷み	内面の段有
		717	F-6	IVb	123.852	1a	口縁部	石英・長石・角閃石・輝石	染痕(2mm)	染痕(4mm)		黒	黒	条痕	刷文・白割刷み	内面の段有
		720	F-6	IVb	123.846	1a	口縁部	石英・長石・角閃石・輝石	染痕(2mm)	染痕(4mm)		黒	黒	条痕	刷文・白割刷み	内面の段有
		700	F-6	IVb	123.443	1a	胴部	石英・長石・角閃石・輝石	染痕(2mm)	染痕(4mm)		黒	黒	条痕	—	
		一括	F-6-7	表土	—	1a	胴部	石英・長石・角閃石・輝石	染痕(2mm)	染痕(4mm)		灰黄	灰黄	条痕	—	
		767	F-6	—	123.889	1a	底部	石英・長石・角閃石・輝石	ナデ	染痕(4mm)		黒	黒	条痕	—	
		768	F-6	IIIa	123.830	1a	口縁部	石英・長石・角閃石・輝石	染痕(2mm)	染痕(4mm)		黒	黒	条痕	刷文・白割刷み	内面の段有
		一括	D・E	—	1a	胴部	石英・長石・角閃石・輝石	染痕(2mm)	染痕(4mm)	黒		黒	条痕	—		
		713	F-6	IVa	123.808	1a	口縁部	石英・長石・角閃石・輝石	染痕(2mm)	染痕(4mm)		黒	黒	条痕	刷文・白割刷み	内面の段有
		714	F-6	IVa	123.835	1a	胴部	石英・長石・角閃石・輝石	染痕(2mm)	染痕(4mm)		黒	黒	条痕	—	
		719	F-6	IVb	123.706	1a	胴部	石英・長石・角閃石・輝石	染痕(2mm)	染痕(4mm)		黒	黒	条痕	—	
		776	F-6	—	123.478	1a	底部	石英・長石・角閃石・輝石	ナデ	染痕(4mm)		黒	黒	条痕	—	
727	F-6	IVa	123.574	1a	胴部	石英・長石・角閃石・輝石	染痕(2mm)	染痕(4mm)	黒	黒	条痕	—				
727	F-6	IVb	123.374	1a	胴部	石英・長石・角閃石・輝石	染痕(2mm)	染痕(4mm)	黒	黒	条痕	—				
一括	F-6-7	表土	—	1a	胴部	石英・長石・角閃石・輝石	染痕(2mm)	染痕(4mm)	黒	黒	条痕	—				
773	F-6	IVb	123.626	1a	胴部	石英・長石・角閃石・輝石	染痕(2mm)	染痕(4mm)	黒	黒	条痕	—				
27	33	1633	E-7	IV	125.529	1a	口縁部	角閃石・石英・長石・輝石	ナデ	ナデ	1/8	黒褐	黄褐	刷文・白割刷み	内面の段有	
		16	G-6	IV	120.536	1a	口縁部	長石・輝石・石英・角閃石	ナデ	ナデ	1/8	黄褐	黄褐	刷文・白割刷み	内面の段有	
		17	G-6	IV	120.614	1a	口縁部	長石・輝石・石英・角閃石	ナデ	ナデ	—	褐	黄褐	刷文・白割刷み	内面の段有	
		736	F-7	IVa	123.513	1a	口縁部	石英・輝石・長石・角閃石	ナデ	ナデ	—	褐	黄褐	刷文・白割刷み	内面の段有	
		一括	F-7	—	1a	口縁部	石英・金雲母・石英・輝石	ナデ	ナデ	1/4	灰黄	黄褐	刷文・白割刷み	内面の段有		
		一括	D-7	—	1a	口縁部	石英・輝石・角閃石・長石	染痕(1mm)	ナデ	1/8	灰黄	黄褐	刷文・白割刷み	内面の段有		
		769	F-7	IVa	123.786	1a	口縁部	石英・金雲母・角閃石	ナデ	ナデ	—	灰黄	黄褐	刷文・白割刷み	内面の段有	
		一括	F-7	IVa	—	1a	口縁部	長石・金雲母・角閃石	ナデ	ナデ	1/4	灰黄	黄褐	刷文・白割刷み	内面の段有	
		765	F-7	IVb	123.446	1a	口縁部	長石・金雲母・角閃石	ナデ	ナデ	—	灰黄	黄褐	刷文・白割刷み	内面の段有	
		一括	F-8	—	1a	口縁部	角閃石・長石・輝石・石英	ナデ	ナデ	—	灰黄	黄褐	刷文	—		
		1122	E-8	IV	124.032	1a	口縁部	角閃石・石英・長石・輝石	ナデ	ナデ	1/4	灰黄	黄褐	刷文・白割刷み	内面の段有	
		671	F-9	IVb	123.967	1a	口縁部	角閃石・石英・長石・輝石	ナデ	ナデ	—	灰黄	黄褐	刷文・白割刷み	内面の段有	
		一括	F-7	—	1a	口縁部	長石・輝石・石英・角閃石	ナデ	ナデ	1/4	黒	暗灰黄	刷文・白割刷み	内面の段有		
		42	E-7	V	—	1a	口縁部	角閃石・長石・石英・輝石	ナデ	ナデ	—	灰黄	黄褐	刷文	—	
		1605	E-7	IV	124.220	1a	口縁部	石英・長石	ナデ	ナデ	—	黒褐	黄褐	刷文・白割刷み	内面の段有	
		一括	F-7	IVa	—	1a	口縁部	石英・輝石・角閃石	—	染痕(1mm)	—	灰黄	黄褐	刷文・白割刷み	内面の段有	
		1749	E-7	IV	125.205	1a	口縁部	角閃石・輝石・長石・石英	ナデ	ナデ	—	明赤褐	明赤褐	刷文・白割刷み	内面の段有	
		827	F-8	IVa	123.75	1a	口縁部	角閃石・長石・石英・輝石	ナデ	ナデ	—	灰黄	黄褐	刷文・白割刷み	内面の段有	
1709	E-7	IV	124.058	1a	口縁部	角閃石・長石・石英	ナデ	ナデ	—	灰黄	黄褐	刷文・白割刷み	内面の段有			
一括	G-6	表土	—	1a	口縁部	石英・角閃石・長石・輝石	染痕(1mm)	ナデ	—	灰黄	黄褐	刷文・白割刷み	内面の段有			
49	1408	F-8	IV	124.029	1a	口縁部	石英・長石・角閃石・輝石	ナデ	ナデ	—	灰黄	黄褐	刷文・白割刷み	内面の段有		
一括	F-7	IVa	—	1a	口縁部	長石・角閃石・石英・輝石	染痕(1mm)	ナデ	—	灰黄	黄褐	刷文・白割刷み	内面の段有			
51	1694	E-7	IV	124.223	1a	口縁部	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	—	灰黄	黄褐	刷文	—		
一括	D・E	—	1a	口縁部	長石・石英・角閃石・輝石	ナデ	ナデ	—	明赤褐	明赤褐	刷文・白割刷み	—				
641	F-8	IVa	122.857	1a	口縁部	長石・輝石・石英・角閃石	ナデ	ナデ	—	灰黄	黄褐	刷文・白割刷み	内面の段有			
52	G-6	IV	124.818	1a	口縁部	石英・長石・角閃石・輝石	染痕(1mm)	ナデ	—	灰黄	黄褐	刷文・白割刷み	内面の段有			
一括	E-6	IV	—	1a	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	染痕(1mm)	ナデ	—	灰黄	黄褐	刷文・白割刷み	内面の段有			
1724	D-7	IV	125.740	1a	口縁部	石英・輝石・長石・角閃石	ナデ	ナデ	—	灰黄	黄褐	刷文・白割刷み	内面の段有			

第5表 出土土器観察表

神田No	図No	注記No	出土区	出土層	出ロ→シ (m)	類	部位	胎土	調整		遺存状態	色調		文様	備考	
									外面	内面		外面	内面			
28	57	—	E-7	V	—	1a	口縁部	石英・角閃石・輝石	ナデ	ナデ	1/8	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	刺突文・白粉划み	内面の段有	
	58	531	F-8	IVa	123.806	1a	口縁部	石英・角閃石・石英・輝石	ナデ	ナデ	1/4	にぶい黄褐色	浅黄褐色	刺突文・白粉划み	内面の段有	
	50	540	F-8	IVa	123.863	1a	口縁部	石英・角閃石・石英・輝石	ナデ	ナデ	1/4	にぶい黄褐色	浅黄褐色	刺突文・白粉划み	内面の段有	
	60	300	F-8	IVa	123.429	1a	口縁部	角閃石・長石・石英・輝石	粗粒・い・細	ナデ	—	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	刺突文・白粉划み・条痕	内面の段有	
	61	11	IT	IV	120.69	—	1a	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	条痕(1mm)	ナデ	—	浅黄褐色	にぶい黄褐色	刺突文・白粉划み・条痕	内面の段有
	62	一括	D-8	—	—	—	1a	口縁部	石英・輝石・角閃石	ナデ	ナデ	—	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	刺突文・白粉划み	内面の段有
29	63	1271	E-8	IV	123.804	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	条痕(2mm)	条痕(1mm)	—	黒褐色	明赤褐色	刺突文・条痕	内面の段有	
		1271	E-8	IV	123.804	1b	胴部	長石・輝石・角閃石・石英	条痕(2mm)	条痕(1mm)	—	にぶい黄褐色	明赤褐色	条痕	—	
		614-①	F-8	IVb	123.529	1b	胴部	長石・輝石・角閃石・石英	条痕(2mm)	条痕(1mm)	—	にぶい黄褐色	明赤褐色	条痕	—	
		610	—	IVb	123.537	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	条痕(2mm)	条痕(1mm)	—	黒褐色	明赤褐色	刺突文・条痕	内面の段有	
		611	F-8	—	123.5	1b	胴部	長石・輝石・角閃石・石英	条痕(2mm)	条痕(1mm)	—	にぶい黄褐色	明赤褐色	条痕	—	
		554	F-8	IVa	123.614	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	条痕(2mm)	条痕(1mm)	—	にぶい黄褐色	明赤褐色	刺突文・条痕	内面の段有	
		554	F-8	IVa	123.614	1b	胴部	長石・輝石・角閃石・石英	条痕(2mm)	条痕(1mm)	—	にぶい黄褐色	明赤褐色	条痕	—	
		909	F-8	IVb	123.481	1b	胴部	長石・輝石・角閃石・石英	条痕(2mm)	条痕(1mm)	—	にぶい黄褐色	明赤褐色	条痕	—	
		906	F-8	IVb	123.568	1b	胴部	長石・輝石・角閃石・石英	条痕(2mm)	条痕(1mm)	—	にぶい黄褐色	明赤褐色	条痕	—	
		668	—	IVb	123.405	1b	胴部	長石・輝石・角閃石・石英	条痕(2mm)	条痕(1mm)	—	にぶい黄褐色	明赤褐色	条痕	—	
		667	—	IVb	123.404	1b	胴部	長石・輝石・角閃石・石英	条痕(2mm)	条痕(1mm)	—	にぶい黄褐色	明赤褐色	条痕	—	
		615	—	IVb	123.397	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	条痕(2mm)	条痕(1mm)	—	黒褐色	明赤褐色	刺突文・条痕	内面の段有	
		613	F-8	IVb	123.551	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	条痕(2mm)	条痕(1mm)	—	黒褐色	明赤褐色	刺突文・条痕	内面の段有	
		1573	—	V	123.847	1b	胴部	長石・輝石・角閃石・石英	条痕(2mm)	条痕(1mm)	—	にぶい黄褐色	明赤褐色	条痕	—	
		—	F-8	表	—	1b	胴部	長石・輝石・角閃石・石英	条痕(2mm)	条痕(1mm)	—	にぶい黄褐色	明赤褐色	条痕	—	
—	E-8	IV	—	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	条痕(2mm)	条痕(1mm)	—	にぶい黄褐色	明赤褐色	刺突文・条痕	内面の段有			
610	F-8	IVb	123.507	1b	口縁部	輝石・長石	—	—	—	—	—	—	—			
1271	E-8	IV	123.804	1b	胴部	長石・輝石・角閃石・石英	ナデ	ナデ	—	にぶい黄褐色	明赤褐色	—	—			
30	64	625	F-8	IVa	123.727	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	細粒不可能	ナデ	—	灰黄褐色	にぶい黄褐色	刺突文	内面の段有	
	65	一括	G-6	IVa	—	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	ナデ	ナデ	—	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	刺突文・白粉划み	内面の段有	
	66	289	G-1	IVa	121.138	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	ナデ	ナデ	—	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	刺突文・白粉划み	内面の段有	
	67	—	F-6-7	表土	—	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	ナデ	ナデ	—	黒褐色	にぶい黄褐色	刺突文・白粉划み	内面の段有	
	68	1782	E-7	IV	124.812	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	ナデ	ナデ	—	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	刺突文・白粉划み	内面の段有	
	69	—	G-7	横板	—	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	条痕(1mm)	ナデ	—	にぶい黄褐色	橙	刺突文・条痕・白粉划み	内面の段有	
	70	1698	E-7	IV	124.253	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	ナデ	ナデ	—	黒褐色	にぶい黄褐色	刺突文・白粉划み	内面の段有	
	71	6	G-6	IVa	120.391	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	ナデ	ナデ	—	黄褐色	にぶい黄褐色	刺突文・白粉划み	内面の段有	
	72	681	F-8	IV	122.908	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	条痕(1.5mm)	ナデ(い・細)	—	灰褐色	にぶい黄褐色	刺突文・条痕・白粉划み	内面の段有	
	73	一括①	E-6	IV	—	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	条痕(1mm)	ナデ	—	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	刺突文・条痕・白粉划み	内面の段有	
	74	一括	E-7	V	—	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	条痕(1.5mm)	ナデ	—	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	刺突文・白粉划み	内面の段有	
	75	一括	E-6	—	—	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	条痕(1mm)	条痕(1mm)	—	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	刺突文・白粉划み	内面の段有	
	76	1808	E-7	IV	125.041	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	ナデ (浅い穴あり)	ナデ (浅い穴あり)	—	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	刺突文・白粉划み	内面の段有	
	1653	E-7	IV	124.353	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	ナデ(い・細)	ナデ(い・細)	—	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	刺突文・白粉划み	内面の段有		
	1654	E-7	IV	124.386	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	ナデ(い・細)	ナデ(い・細)	—	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	刺突文・白粉划み	内面の段有		
78	39	G-7	IVa	122.213	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	条痕(2mm)	ナデ	—	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	刺突文・白粉划み	内面の段有		
79	87	G-6	IVb	120.715	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	条痕(1mm)	ナデ	—	にぶい黄褐色	橙	刺突文・白粉划み	内面の段有		
80	732	F-6	IVa	122.791	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	条痕(2mm)	ナデ(い・細)	—	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	刺突文・条痕・白粉划み	内面の段有		
81	一括	F-7	—	—	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	ナデ	ナデ	—	にぶい黄褐色	暗灰黄	刺突文・白粉划み	内面の段有		
82	1151	E-8	IV	124.718	1b	口縁部	長石・角閃石・石英	条痕(2mm)	条痕(2mm)	—	灰	灰オリーブ	刺突文・条痕・白粉划み	内面の段有		
83	1685	D-6	—	—	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	粗粒(い・細)	粗粒(い・細)	—	黄灰	灰黄	刺突文・条痕・白粉划み	内面の段有		
84	1810	E-7	IV	125.087	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	条痕(1mm)	条痕(1.5mm)	—	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	刺突文・条痕・白粉划み	内面の段有		
31	1783	E-7	IV	125.008	1b	口縁部	石英・長石・輝石・角閃石	粗粒(い・細)	粗粒(い・細)	—	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	刺突文・白粉划み・条痕	内面の段有		
	1741	E-7	IV	125.077	1b	口縁部	石英・長石・輝石・角閃石	粗粒(い・細)	粗粒(い・細)	—	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	刺突文・白粉划み・条痕	内面の段有		
	1784	E-7	IV	125.083	1b	口縁部	石英・長石・輝石・角閃石	粗粒(い・細)	粗粒(い・細)	—	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	刺突文・白粉划み・条痕	内面の段有		

第6表 出土土器観察表

神田No	図No	注記No	出土区	出土層	出ロ寸法 (m)	層	部位	胎土	調整			色調		文様	備考	
									外面	内面	遺存状態	外面	内面			
36	1700-1	E-7	IV	124.882	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	灰(0.8)赤(0)	茶灰(1.5)赤	1/2	橙	橙	刺突文・条痕・口唇粗み	内面の段有		
		E-7	IV	124.673	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	灰(0.8)赤(0)	茶灰(1.5)赤		橙	橙	刺突文・条痕・口唇粗み	内面の段有		
		E-7	IV	124.719	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	灰(0.8)赤(0)	茶灰(1.5)赤		橙	橙	刺突文・条痕・口唇粗み	内面の段有		
		E-7	IV	124.007	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	灰(0.8)赤(0)	茶灰(1.5)赤		橙	橙	刺突文・条痕・口唇粗み	内面の段有		
	87	1135	E-8	IV	124.282	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	ナデ(0)	ナデ	1/8	にぶい橙	にぶい橙	刺突文・条痕・口唇粗み	内面の段有	
		一括	F-8	IVa	-	1b	口縁部	輝石	-	-	-	-	-	-	No.55に接合	
	31	88	一括	D-7	-	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	ナデ	ナデ	-	にぶい橙	にぶい黄	刺突文・口唇粗み	内面の段有	
		89	1401	E-8	IV	124.74	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	ナデ(0)	ナデ(0)	-	浅黄橙	明黄褐	刺突文・口唇粗み	内面の段有
		90	1751	E-7	IV	124.719	1b	口縁部	角閃石・輝石・石英・長石	ナデ	ナデ	-	にぶい橙	にぶい黄橙	刺突文・口唇粗み	内面の段有
		91	1784	E-7	IV	125.003	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	茶灰(1.5)赤	茶灰(1.5)赤	-	にぶい黄橙	にぶい黄橙	刺突文・条痕・口唇粗み	内面の段有
92		1306	F-8	IV	123.900	1b	口縁部	石英・輝石・角閃石・長石	茶灰(1.5)赤	茶灰(2)赤	1/8	灰黄	にぶい黄橙	刺突文	内面の段有	
93		648	F-8	IVa	123.101	1b	口縁部	輝石・角閃石・長石	ナデ(0)	ナデ	-	橙	にぶい黄橙	刺突文	内面の段有	
94		一括	D・E	-	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	茶灰(2)赤	ナデ	1/5	橙	にぶい黄橙	刺突文・条痕・口唇粗み	内面の段有		
95		1644	E-6	IV	124.234	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	茶灰(1.5)赤	ナデ	1/8	にぶい橙	にぶい橙	刺突文・条痕・口唇粗み	内面の段有	
		一括	E-7	表土	-	1b	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	茶灰(1.5)赤	ナデ		にぶい橙	にぶい橙	刺突文・条痕・口唇粗み	内面の段有	
32		96	一括	F-7	IV	-	胴部	長石・輝石・石英・角閃石	ナデ	ナデ	-	にぶい黄橙	灰黄	-	-	
	87		1821	F-7	IV	123.715	-	胴部	長石・輝石・石英・角閃石	ナデ	ナデ	-	にぶい黄橙	灰黄	-	-
	98	1671-1	E-7	IV	125.676	-	胴部	石英・輝石・角閃石・長石	ナデ(0)	ナデ	-	にぶい黄	にぶい黄	-	補修孔有	
		1687	E-7	IV	125.003	-	胴部	石英・輝石・角閃石・長石	ナデ(0)	ナデ	-	にぶい黄	にぶい黄	-	補修孔有	
	99	736-1	F-7	IVa	123.513	-	胴部	石英・輝石・長石・角閃石	ナデ(0)	ナデ	-	灰黄褐	橙	-	-	
		736	F-7	IVa	123.513	-	胴部	石英・輝石・長石・角閃石	ナデ(0)	ナデ	-	灰黄褐	橙	-	-	
		736-2	F-7	IVa	123.513	-	胴部	石英・輝石・長石・角閃石	ナデ(0)	ナデ	-	灰黄褐	橙	-	-	
		736-3	F-7	IVa	123.513	-	胴部	石英・輝石・長石・角閃石	ナデ(0)	ナデ	-	灰黄褐	橙	-	-	
	100	1620	E-7	IV	125.571	-	胴部	石英・輝石・長石・角閃石	ナデ(0)	ナデ(0)	-	浅黄橙	浅黄	-	-	
		1622	E-7	IV	125.496	-	胴部	石英・輝石・長石・角閃石	ナデ(0)	ナデ(0)	-	浅黄橙	浅黄	-	-	
33	101	1226	E-9	IV	125.300	-	底部	長石・輝石・角閃石・石英	ナデ	ナデ	1/5	橙	橙	-	-	
	102	1323	E-8	IV	124.431	-	底部	輝石・長石・角閃石	ナデ	ナデ	1/8	にぶい黄	灰白	-	-	
	103	1641-②	E-6	IV	125.963	-	底部	石英・長石・輝石	ナデ	ナデ	1/2	明赤褐	橙	-	-	
	104	1451-1	E-9	IV	125.164	-	底部	石英・長石・輝石・角閃石	ナデ	ナデ	1/2	橙	にぶい赤褐	-	-	
	105	1748	E-7	IV	-	底部	石英・角閃石・長石・輝石	ナデ	ナデ	1/2	にぶい橙	橙	-	-		
34	106	1676	E-7	IV	125.744	-	底部	長石・輝石・角閃石・石英	ナデ	ナデ	1/4	浅黄橙	にぶい黄橙	-	-	
		1676-1	E-7	IV	125.744	-	底部	長石・輝石・角閃石・石英	ナデ	ナデ		浅黄橙	にぶい黄橙	-	-	
	107	1030-⑤	E-7	IV	124.206	-	底部	長石・輝石・石英・角閃石	ナデ	ナデ	1/4	橙	にぶい橙	-	-	
	108	一括	F-6	-	-	底部	角閃石・長石・輝石・石英	ナデ	ナデ	1/4	橙	にぶい黄橙	-	-		
	109	一括	F-7	-	-	底部	石英・角閃石・輝石・長石	ナデ	ナデ	1/4	にぶい黄褐	にぶい黄橙	-	-		
		1263	E-9	IVb	125.494	-	底部	角閃石・長石・輝石・石英	ナデ		ナデ	にぶい橙	にぶい橙	-	-	
		1531	E-9	IV	125.200	-	底部	角閃石・長石・輝石・石英	ナデ		ナデ	1/2	にぶい橙	にぶい橙	-	-
		1540	E-9	IV	125.139	-	底部	角閃石・長石・輝石・石英	ナデ		ナデ		にぶい橙	にぶい橙	-	-
	110	1577	E-9	IV	124.578	-	底部	角閃石・長石・輝石・石英	ナデ	ナデ	1/2	にぶい橙	にぶい橙	-	-	
		1634-⑥	E-6	IV	125.742	-	底部	角閃石・長石・輝石・石英	ナデ	ナデ		灰黄褐	にぶい黄橙	-	-	
111	1640	E-6	IV	125.855	-	底部	角閃石・長石・輝石・石英	ナデ	ナデ	1/2	灰黄褐	にぶい黄橙	-	-		
	112	3-⑨	-	集石	120.424	-	底部	石英・長石・輝石・角閃石	ナデ		ナデ	1	明赤褐	にぶい赤褐	-	-
	113	3-②	-	集石	120.424	-	底部	長石・石英・角閃石	ナデ		ナデ	-	浅黄	にぶい黄橙	-	-
		3-②	-	-	120.424	-	底部	長石・石英・角閃石	ナデ		ナデ	-	浅黄	にぶい黄橙	-	-
	114	一括	F-6	-	-	底部	長石・輝石・角閃石	ナデ(0)	凹隠		1/4	灰白	灰白	刺突文	-	
	115	一括	F-7	-	-	底部	長石・角閃石	ナデ	ナデ		1/4	にぶい赤褐	にぶい黄	-	-	
36	116	1463-1	E-9	IV	124.817	IIa	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	茶灰(2)赤	茶灰(0)赤	1/8	にぶい黄	にぶい橙	刺突文・条痕	口唇平粗	
	117	1130	E-8	IV	124.257	IIa	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	茶灰(2)赤	ナデ	-	暗灰黄	にぶい橙	刺突文・条痕	口唇平粗	

第7表 出土土器観察表

研究区	図No	注記No	出土区	出土層	出土寸法(m)	形状	部位	胎土	調整		遺存状態	色調		文様	備考	
									外面	内面		外面	内面			
36	118	1506-①	E-8	IV	125.072	Ⅱa	口縁部	褐色・輝石・角閃石・石英・金銅	茶色(2mm)	ナデ	—	灰褐色	にぶい濁	刺突文・条痕	口唇半周	
		1503-①	E-8	IV	125.042	Ⅱa	口縁部	褐色・輝石・角閃石・石英・金銅	茶色(2mm)	ナデ	—	灰褐色	にぶい濁	刺突文・条痕	口唇半周・地帯部直立	
		1563	E-8	IV	125.042	Ⅱa	口縁部	褐色・輝石・角閃石・石英・金銅	茶色(2mm)	ナデ	—	灰褐色	にぶい濁	刺突文・条痕	口唇半周	
	119	1415	E-9	—	—	Ⅱa	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	茶色(2mm)	茶色(1.5mm)	—	暗灰黄	にぶい橙	刺突文・条痕	内面の段有	
		1419	E-8	IV	125.226	Ⅱa	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	ナデ(0.5mm)	ナデ	—	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	刺突文	口唇内面段有	
		1704	E-7	IV	124.704	Ⅱa	口縁部	石英・輝石・長石	茶色(1mm)	ナデ(0.5mm)	—	にぶい濁	橙	刺突文	口唇内面段有	
	37	122	306, 309	—	集石	120.424	Ⅱa	口縁部	石英・輝石・角閃石・長石	茶色(1.5mm)	ナデ(0.5mm)	1/6	にぶい濁	にぶい黄褐色	刺突文・条痕	内面の段有
			一括	F-9	—	Ⅱa	口縁部	石英・輝石・長石	茶色(1.5mm)	ナデ(0.5mm)	—	にぶい濁	にぶい橙	条痕	口唇半周	
			382	F-9	IVa	124.126	Ⅱa	口縁部	石英・輝石・角閃石・長石	ナデ(0.5mm)	ナデ	—	にぶい橙	にぶい赤褐色	刺突文	口唇内面段有
		125	526	F-8	IVa	123.818	Ⅱa	口縁部	石英・輝石・角閃石・長石	茶色(1.5mm)	ナデ(0.5mm)	—	橙	にぶい橙	刺突文・条痕	口唇半周・背面直立
			72	G-8	IVa	122.400	Ⅱa	口縁部	輝石・角閃石・長石	茶色(1mm)	—	濁灰	灰濁	刺突文・条痕	口唇半周	
			一括	E-8	—	Ⅱa	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	茶色(2mm)	ナデ(0.5mm)	—	濁灰	にぶい橙	刺突文・条痕	口唇半周	
128		1302	E-8	IV	123.992	Ⅱa	口縁部	石英・輝石・長石	茶色(1.5mm)	ナデ	—	にぶい濁	浅黄褐色	刺突文・条痕	口唇半周	
		1400	E-9	IV	125.284	Ⅱa	口縁部	石英・長石	茶色(1.5mm)	ナデ(0.5mm)	—	濁灰	にぶい灰	刺突文・条痕	口唇半周	
		1055	D-8	IV	126.361	Ⅱa	口縁部	輝石・角閃石・長石	ナデ(0.5mm)	ナデ	—	明黄褐色	明黄褐色	刺突文・条痕	口唇半周	
131		52	G-8	IVa	122.32	Ⅱa	口縁部	石英・輝石・角閃石	ナデ	ナデ	—	黒濁	にぶい濁	刺突文	口唇半周	
		1267	E-7	IV	124.856	Ⅱa	口縁部	輝石・角閃石・長石	条痕	ナデ	—	にぶい濁	にぶい黄褐色	刺突文	口唇内面段有	
		504	F-9	IVa	124.072	Ⅱa	口縁部	石英・輝石・角閃石・長石	茶色(2mm)	ナデ	—	暗灰黄	にぶい黄褐色	刺突文・条痕	口唇内面段有	
37		134	—	F-8	IVa	—	Ⅱa	口縁部	石英・輝石・角閃石・長石	茶色(1.5mm)	条痕(1mm)	—	灰濁	にぶい赤濁	刺突文・条痕	口唇段有
			1404	E-8	IV	124.737	Ⅱa	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	茶色(2.5mm)	茶色(1.5mm)	—	にぶい赤濁	にぶい赤濁	刺突文・条痕	口唇半周
			1413	E-8	IV	124.883	Ⅱa	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	茶色(2.5mm)	茶色(1.5mm)	1/6	にぶい赤濁	にぶい赤濁	刺突文・条痕	口唇半周
		136	1453-②	E-9	IV	124.527	Ⅱa	口縁部	輝石・角閃石・長石	条痕(1mm)	ナデ	—	にぶい橙	にぶい橙	刺突文・条痕	口唇半周
			1458	E-9	IV	124.006	Ⅱa	口縁部	石英・濁母・長石	条痕(1mm)	ナデ	—	にぶい濁	にぶい橙	刺突文・条痕	口唇半周
			1140	E-8	IV	124.333	Ⅱa	口縁部	石英・輝石・角閃石・石英	茶色(1.5mm)	ナデ	—	にぶい橙	にぶい黄褐色	刺突文・条痕	口唇半周
	37	139	一括	F-8	Ⅲ下	—	Ⅱa	口縁部	長石・角閃石・輝石	条痕(2mm)	ナデ	—	にぶい橙	灰黄濁	刺突文・条痕	口唇半周
			1502	E-8	IV	124.458	Ⅱa	口縁部	石英・輝石・角閃石・長石	茶色(2mm)	ナデ	—	にぶい濁	明黄濁	刺突文・条痕	口唇半周
			573	F-8	IVa	123.63	Ⅱa	口縁部	輝石・角閃石	ナデ	ナデ	—	灰黄濁	にぶい黄濁	刺突文	口唇半周
142		—	F-6-7	表土	—	Ⅱa	口縁部	輝石・長石	ナデ(0.5mm)	ナデ(0.5mm)	—	にぶい濁	にぶい橙	条痕・口唇刻み	内面の段有	
1252		E-9	IV	125.413	Ⅱa	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	茶色(1.5mm)	茶色(1.5mm)	—	にぶい濁	にぶい濁	刺突文・条痕	口唇半周		
1735		E-7	IV	124.967	Ⅱa	口縁部	石英・輝石・角閃石・石英	茶色(1.5mm)	ナデ	—	灰黄濁	にぶい黄濁	刺突文・条痕(口唇部)	内面の段有		
146	145	1509	E-8	IV	124.693	Ⅱa	口縁部	角閃石・長石・石英	条痕(1mm)	ナデ	—	濁灰	にぶい黄濁	刺突文・条痕	口唇半周	
		1183	D-9	126.029	Ⅱb	口縁部	輝石・角閃石・長石	茶色(1.5mm)	ナデ	1/4	にぶい黄濁	赤濁	刺突文・条痕	口唇半周		
		1210	D-9	126.006	Ⅱb	口縁部	輝石・角閃石・長石	茶色(1.5mm)	ナデ	1/4	にぶい黄濁	赤濁	刺突文・条痕	口唇半周		
	147	1100	D-9	126.174	Ⅱb	口縁部	輝石・角閃石・長石	茶色(2mm)	ナデ	1/4	にぶい黄濁	にぶい濁	刺突文・条痕	口唇半周		
		1197	D-9	126.147	Ⅱb	口縁部	輝石・角閃石・長石	茶色(2mm)	ナデ	1/4	にぶい黄濁	にぶい濁	刺突文・条痕	口唇半周		
		503	F-8	IVa	122.997	Ⅱb	口縁部	石英・角閃石・長石・輝石	茶色(2mm)	ナデ	—	橙	明黄濁	刺突文・条痕	口唇半周	
	148	626	F-8	IVa	123.846	Ⅱb	口縁部	石英・角閃石・長石・輝石	茶色(2mm)	ナデ	—	橙	明黄濁	刺突文・条痕	口唇半周	
		1257	E-9	IV	125.403	Ⅱb	口縁部	石英・角閃石・長石	茶色(2.5mm)	ナデ(0.5mm)	1/8	橙	橙	刺突文・条痕	口唇内面半周	
	38	150	579	F-9	IVa	124.221	Ⅱb	口縁部	石英・輝石・角閃石・長石	茶色(1.5mm)	ナデ	1/4	にぶい黄濁	にぶい黄濁	刺突文・条痕	口唇内面段有
1305			E-8	IV	123.989	Ⅱb	口縁部	石英・輝石・角閃石・長石	条痕(1mm)	ナデ(0.5mm)	—	にぶい橙	にぶい橙	刺突文・条痕	口唇半周	
一括			G-8	—	Ⅱb	口縁部	石英・輝石・長石	条痕(2mm)	ナデ	—	にぶい濁	にぶい濁	刺突文・条痕	口唇半周		
153		636	F-9	IVa	123.833	Ⅱb	口縁部	石英・輝石・角閃石	ナデ(0.5mm)	ナデ	—	橙	にぶい濁	刺突文・条痕	口唇半周	
		1447	E-9	IV	125.305	Ⅱb	口縁部	石英・輝石・長石	ナデ	ナデ	—	橙	にぶい濁	刺突文	口唇半周	
		553	F-8	IVb	123.671	Ⅱb	口縁部	石英・輝石・角閃石・長石	茶色(2.5mm)	ナデ	—	にぶい濁	にぶい濁	刺突文・条痕	口唇半周	
156		153	4T	IV	119.841	Ⅱb	口縁部	輝石・角閃石・長石	ナデ	ナデ	—	にぶい橙	橙	刺突文	口唇半周	
		357	F-8	IVa	124.119	Ⅱb	口縁部	角閃石・長石	ナデ(0.5mm)	ナデ	—	にぶい濁	橙	刺突文・条痕	口唇半周	
		110	4T	IV	122.195	Ⅱb	口縁部	角閃石・長石	ナデ	ナデ	—	浅黄濁	にぶい橙	刺突文	—	
38		1186	D-9	IV	126.127	Ⅱb	口縁部	石英・輝石・角閃石・長石	茶色(1.5mm)	ナデ	1/8	橙	にぶい黄濁	刺突文・条痕	口唇半周	
		507	D-9	IV	126.016	Ⅱb	口縁部	輝石・角閃石・長石	ナデ	ナデ	—	にぶい濁	にぶい黄濁	刺突文	口唇半周	
		1045	F-8	IVa	123.819	Ⅱb	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	条痕(2mm)	ナデ(0.5mm)	—	暗赤濁	暗赤濁	刺突文・条痕	口唇半周	
	1570	E-8	V	125.127	Ⅱb	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	条痕(2mm)	ナデ(0.5mm)	—	暗赤濁	暗赤濁	刺突文・条痕	口唇半周		

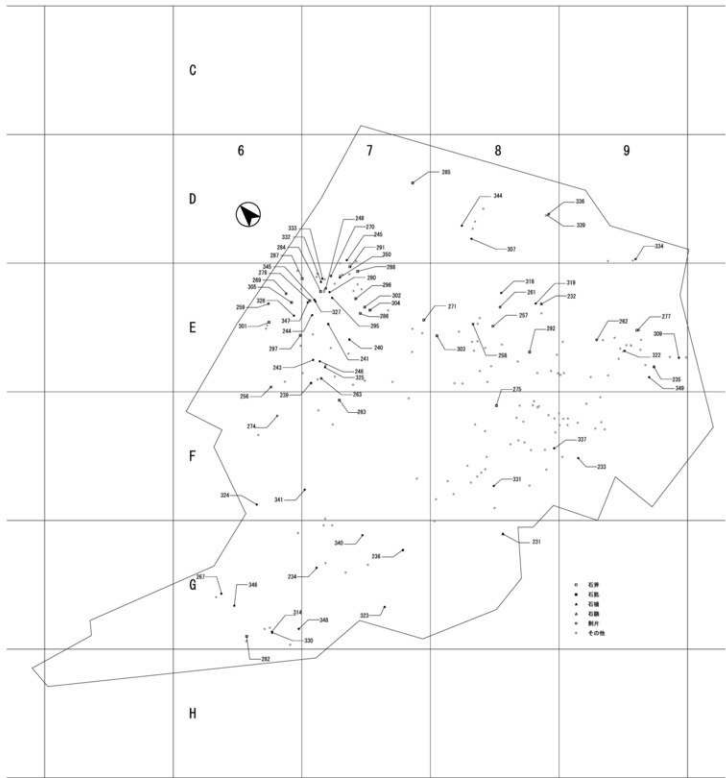


第8表 出土土器観察表

群別No	図No	注記No	出土区	出土層	出寸(寸法)	型	部位	胎土	調整			色調		文様	備考
									調整		遺存状態	色調			
									外面	内面		外面	内面		
30	163	701	F-8	IV	123.077	IIc	口縁部	石英・角閃石	縞(100)縞	ナデ	1/8	灰褐	橙	新突文・条痕	—
	164	1067	D-9	IV	126.320	IIc	口縁部	石英・長石	縞(100)縞	ナデ	1/8	にぶい橙	にぶい青褐	新突文・条痕	—
	165	1068-①	E-7	IV	124.223	—	—	長石・輝石・角閃石	条痕(1.5mm)	ナデ	—	にぶい黄橙	にぶい褐	条痕	口唇平坦
	166	一括	E-7	IV	—	IIc	口縁部	石英・長石	条痕(2mm)	ナデ	1/5	黒褐	にぶい褐	口縁部	貝目文(貝目並み)
	167	538	F-8	IVa	123.987	IIc	口縁部	石英・輝石	条痕(2mm)	浅い条痕	—	にぶい黄橙	にぶい橙	新突文・条痕	—
	167	1300	E-8	IV	124.000	IIc	口縁部	長石・輝石	条痕(2mm)	浅い条痕	1/4	にぶい黄橙	にぶい橙	新突文・条痕	—
	168	095	F-8	IVb	122.918	IIc	口縁部	角閃石・長石・燧石	条痕(2mm)	ナデ	1/4	黒	にぶい黄橙	新突文・条痕	—
	169	3-①	—	集石	120.424	IIc	口縁部	長石・輝石	条痕(2mm)	条痕(2mm)	1/5	明赤褐	橙	新突文・条痕	口唇平坦
	170	—	E-8	横板	—	IIc	口縁部	長石・石英・角閃石・輝石	条痕(2mm)	ナデ	1/4	橙	橙	新突文・条痕	口唇平坦
	170	—	D-3	横板	—	IIc	口縁部	長石・石英・角閃石・輝石	条痕(2mm)	ナデ	1/4	橙	橙	新突文・条痕	口唇平坦
40	171	1721-①	E-7	IV	125.008	IIc	口縁部	長石・石英・輝石・角閃石	条痕(2mm)	条痕(2mm)	1/4	淡黄	浅黄橙	新突文・条痕	口唇平坦
	171	一括	DE	—	IIc	口縁部	長石・石英・輝石・角閃石	条痕(2mm)	条痕(2mm)	1/4	淡黄	浅黄橙	新突文・条痕	口唇平坦	
	172	273	4T	IV	122.247	IIc	口縁部	角閃石・長石	条痕(2mm)	ナデ	—	橙	明赤褐	新突文・条痕	口唇平坦
	173	1084	D-8	IV	126.328	IIc	口縁部	石英・輝石・角閃石・長石	条痕(2.5mm)	ナデ	1/4	橙	明赤褐	新突文・条痕	口唇平坦
	173	1136	E-8	IV	124.151	IIc	口縁部	石英・輝石・角閃石・長石	条痕(2.5mm)	ナデ	—	橙	明赤褐	新突文・条痕	口唇平坦
	174	700	F-6	IVa	124.07	IIc	口縁部	長石	条痕(1mm)	ナデ	—	にぶい黄橙	にぶい青褐	新突文・条痕	—
	174	760	F-7	IVa	123.760	IIc	口縁部	長石	条痕(1mm)	ナデ	—	にぶい黄橙	にぶい褐	新突文・条痕	—
	175	—	F-8	IVa	—	IIc	口縁部	角閃石・長石・石英・輝石	条痕	ナデ	—	にぶい褐	にぶい黄橙	新突文・条痕	口唇平坦
	176	—	F-8-9	横板	—	IIc	口縁部	石英・輝石・長石	条痕(2mm)	ナデ	—	にぶい黄橙	にぶい青褐	条痕	口唇平坦
	177	一括	E-8	—	IIc	口縁部	長石・輝石・石英	ナデ	ナデ	—	にぶい橙	褐灰	新突文	口唇平坦	
41	178	643	F-8	IVa	122.914	IIc	口縁部	角閃石・長石・輝石	ナデ	ナデ	—	にぶい橙	灰褐	新突文	口唇平坦
	179	一括	F-8	IVa	—	IIc	口縁部	角閃石・長石・輝石	条痕(2mm)	ナデ	—	にぶい黄橙	明赤褐	新突文・条痕	口唇平坦
	180	1171	E-9	IV	126.000	IIc	口縁部	長石・輝石・石英	条痕(2mm)	ナデ	—	にぶい橙	にぶい橙	新突文・条痕	口唇平坦
	181	一括	F-7	IVa	—	IIc	口縁部	長石・輝石・角閃石	条痕(1mm)	ナデ	—	にぶい橙	にぶい橙	新突文・条痕	口唇平坦
	182	1438	E-8	IV	125.268	IIc	口縁部	長石・輝石・角閃石・石英	条痕(1mm)	ナデ	—	橙	橙	新突文・条痕	口唇平坦
	183	1113	E-9	IV	126.2	IIc	口縁部	輝石・長石・石英	条痕(2mm)	ナデ	1/8	にぶい橙	にぶい黄褐	新突文・条痕	口唇平坦
	184	652	F-8	IVb	123.53	IIc	口縁部	石英・角閃石・石英・輝石	縞(100)縞	ナデ	1/8	にぶい橙	にぶい橙	新突文・条痕	口唇平坦
	185	一括	E-7	IV	—	IIc	口縁部	角閃石・長石・輝石	ナデ	ナデ	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	新突文	口唇平坦
	186	一括	D-8	—	IIc	口縁部	石英・角閃石・長石・輝石	条痕(2mm)	ナデ	—	橙	にぶい褐	新突文・条痕	口唇平坦	
	187	1428	E-8	IV	125.22	IIc	口縁部	石英・輝石・長石	条痕(2mm)	ナデ	1/8	にぶい黄橙	灰褐	新突文・条痕	口唇平坦
42	187	一括	E-8	III	—	IIc	口縁部	石英・輝石・長石	条痕(2mm)	ナデ	1/8	にぶい黄橙	灰褐	新突文・条痕	口唇平坦
	188	1448	E-9	IV	124.642	IIc	口縁部	石英・長石・輝石・角閃石	条痕(1mm)	ナデ	—	浅黄橙	黒褐	新突文・条痕	口唇平坦
	189	228	4T	IV	121.25	IIc	口縁部	石英・輝石・長石	条痕(1mm)	条痕(3mm)	1/8	浅黄橙	にぶい黄橙	新突文・条痕	口唇平坦
	190	1330	E-8	IV	124.483	IIc	口縁部	長石・石英・輝石	条痕(2mm)	条痕(1.5mm)	1/8	灰黄褐	にぶい黄橙	新突文・条痕	口唇平坦
	190	1372	E-8	IV	124.457	IIc	口縁部	長石・石英・輝石	条痕(2mm)	条痕(1.5mm)	1/8	灰黄褐	にぶい黄橙	新突文・条痕	口唇平坦
	191	1115	E-9	IV	126.424	IIc	口縁部	石英・長石・輝石	条痕(2mm)	ナデ	1/8	浅黄橙	浅黄橙	新突文・条痕	口唇平坦
	192	1088	D-9	IV	126.252	IIc	口縁部	石英・長石・輝石	条痕(2mm)	ナデ	1/8	黒褐	浅黄橙	新突文・条痕	口唇平坦
	193	1053	D-8	IV	125.55	IIc	口縁部	石英・長石・輝石	条痕(2mm)	ナデ	1/8	にぶい橙	にぶい褐	新突文・条痕	口唇平坦
	194	9	G-6	IVa	120.702	IIc	口縁部	長石・輝石・角閃石	条痕(2mm)	ナデ	1/8	にぶい褐	にぶい橙	新突文・条痕	口唇平坦
	194	一括	G-6	IVa	—	IIc	口縁部	長石・輝石・角閃石	条痕(2mm)	ナデ	1/8	にぶい橙	にぶい橙	新突文・条痕	口唇平坦
42	195	743	F-8	IVa	123.108	IIc	口縁部	角閃石・長石・輝石・石英	条痕(2mm)	ナデ	—	橙	橙	新突文・条痕	口唇平坦
	196	1318	E-8	IV	124.222	IIc	口縁部	角閃石・輝石・長石・石英	条痕(3mm)	ナデ	—	橙	明赤褐	新突文・条痕	口唇平坦
	197	一括	D-8	—	IIc	口縁部	石英・輝石・長石	条痕(2mm)	ナデ	ナデ	—	にぶい橙	褐灰	新突文・条痕	口唇平坦
	198	1062	D-8	IV	126.436	IIc	口縁部	石英・輝石・長石	条痕(2mm)	条痕(2mm)	1/8	にぶい黄橙	にぶい橙	新突文・条痕	口唇平坦
	199	777	F-7	IVa	123.384	IIc	口縁部	角閃石・長石・輝石	条痕(2mm)	ナデ	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	新突文・条痕	—
	200	一括	E-8	V	—	IIc	口縁部	角閃石・輝石・長石	条痕(2mm)	ナデ	—	にぶい褐	にぶい赤褐	新突文・条痕	口唇平坦
	201	502	F-8	IVa	122.975	IIc	口縁部	石英・輝石・角閃石・長石	条痕(2.5mm)	ナデ	—	黄灰	明赤褐	新突文・条痕	口唇平坦
	202	—	F-8	IVa	—	IIc	口縁部	石英・輝石・角閃石・長石	条痕(2mm)	ナデ	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	新突文・条痕	口唇平坦
	203	一括	F-8	—	IIc	口縁部	石英・輝石・角閃石・長石	ナデ	ナデ	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	新突文	口唇平坦	
	204	一括	F-9	—	IIc	口縁部	石英・輝石・角閃石・長石	縞(1.5mm)	ナデ	—	にぶい褐	橙	新突文・条痕	口唇平坦	
205	1284	E-8	IV	124.545	IIc	口縁部	長石・石英・角閃石・輝石	ナデ	ナデ	—	にぶい橙	浅黄橙	新突文	口唇平坦	
206	56	G-8	IVa	122.44	IIc	口縁部	長石・輝石・石英	条痕(2mm)	ナデ	—	にぶい褐	にぶい褐	条痕	口唇平坦	

第9表 出土土器観察表

群別No	図No	注記No	出土区	出土層	出寸→寸 (m)	類	部位	胎土	調整		遺存状態	色調		文様	備考
									外面	内面		外面	内面		
43	207	一括	F-7	IVa	—	—	胴部	石英・輝石・長石・角閃石	条痕(2mm)	ナデ(浅い・粗)	—	にぶい橙	にぶい橙	—	—
		763	F-7	IVa	123.675	—	胴部	長石・輝石・長石・角閃石	条痕(2mm)	ナデ(浅い・粗)	—	にぶい橙	にぶい橙	—	—
	208	1419	E-8	IV	125.226	—	胴部	石英・長石・角閃石・輝石	条痕(3mm)	ナデ	—	橙	にぶい黄橙	—	—
		1409-①	E-8	IV	125.226	—	胴部	石英・長石・角閃石・輝石	条痕(3mm)	ナデ	—	橙	にぶい黄橙	—	—
	209	371	F-9	IVa	124.308	—	胴部	石英・長石・輝石	条痕(2mm)	ナデ	—	にぶい橙	にぶい橙	条痕	—
		406	F-9	IVa	124.29	—	胴部	石英・長石・輝石	条痕(2mm)	ナデ	—	にぶい橙	にぶい橙	条痕	—
—	—	F-9	IVa	—	—	胴部	石英・長石・輝石	条痕(2mm)	ナデ	—	にぶい橙	にぶい橙	条痕	—	
44	210	1739	E-7	IV	124.789	—	胴部	石英・長石・輝石	条痕(2.5mm)	ナデ(浅い・粗)	—	にぶい橙	にぶい橙	条痕	—
	211	1132	E-8	IV	124.082	—	底部	長石・石英・角閃石	条痕(2mm)	ナデ	1/4	にぶい黄	にぶい黄	条痕	—
	212	1743	E-7	IV	124.900	—	底部	輝石・長石・石英・角閃石	条痕	ナデ	1/4	橙	にぶい黄	条痕	—
	213	1755	E-7	IV	124.194	—	底部	長石・輝石・石英	条痕	ナデ	1/4	黄浅橙	にぶい黄	条痕	—
	214	1277	E-8	IV	124.022	—	底部	輝石・石英・長石	条痕(2mm)	ナデ	—	にぶい橙	にぶい橙	条痕	—
	214	1300	E-8	IV	123.980	—	底部	輝石・石英・長石	条痕(2mm)	ナデ	1/4	にぶい橙	にぶい黄橙	条痕	—
	215	一括	F-8	—	—	—	底部	角閃石・長石・石英・輝石	条痕(1.5mm)	ナデ	1/8	黄	橙	条痕	—
	216	一括	E-6	—	—	—	底部	長石・輝石・石英・角閃石	条痕(2mm)	凹線	1/2	浅黄	浅黄	刺突文・条痕	—
	216	1756	E-7	IV	124.297	—	底部	長石・輝石・石英・角閃石	条痕(2mm)	凹線	—	浅黄	浅黄	刺突文・条痕	—
	217	1717-②	E-7	IV	124.303	—	底部	輝石・石英・長石	条痕	ナデ	1/4	淡黄	淡黄	条痕	—
45	218	1065-①	E-7	IV	124.259	—	底部	石英・輝石・長石	条痕(1mm)	ナデ	—	にぶい黄	にぶい黄	条痕	—
		1065	E-7	IV	124.259	—	底部	石英・輝石・長石	条痕(1mm)	ナデ	1/2	にぶい黄	にぶい黄	条痕	—
	219	一括	E-9	IV	—	—	底部	石英・輝石・長石	条痕(1mm)	ナデ	—	にぶい黄	にぶい黄	条痕	—
	219	—	C-7	—	—	底部	長石・輝石・石英・角閃石	条痕(4mm)	ナデ	1/4	にぶい橙	明赤黄	条痕	—	
	220	739	F-8	IVb	122.757	—	胴部	長石・輝石・石英・角閃石	条痕(2mm)	条痕(2mm)程度	—	にぶい赤黄	にぶい赤黄	刺突文・条痕	—
		173	G-7	IVa	121.93	—	底部	長石・輝石・石英・角閃石	条痕(2mm)	条痕(2mm)程度	—	にぶい赤黄	にぶい赤黄	刺突文・条痕	—
		740	F-8	IVb	122.76	—	底部	長石・輝石・石英・角閃石	条痕(2mm)	条痕(2mm)程度	—	にぶい赤黄	にぶい赤黄	刺突文・条痕	—
		087	F-8	IVb	122.921	—	底部	長石・輝石・石英・角閃石	条痕(2mm)	条痕(2mm)程度	—	にぶい赤黄	にぶい赤黄	刺突文・条痕	—
		089	F	IVb	122.678	—	胴部	長石・輝石・石英・角閃石	条痕(2mm)	条痕(2mm)程度	—	にぶい赤黄	にぶい赤黄	刺突文・条痕	—
		033	F-8	IVb	122.808	—	胴部	長石・輝石・石英・角閃石	条痕(2mm)	条痕(2mm)程度	—	にぶい赤黄	にぶい赤黄	刺突文・条痕	—
094		F-8	IVb	122.916	—	底部	長石・輝石・石英・角閃石	条痕(2mm)	条痕(2mm)程度	—	にぶい赤黄	にぶい赤黄	刺突文・条痕	—	
221	一括	D・E	—	—	—	底部	角閃石・長石・輝石・石英	条痕(1.5mm)	ナデ	1/2	にぶい黄	にぶい黄	条痕	—	
222	368	F-9	III	124.271	—	口縁部	長石・輝石・石英・角閃石	—	—	—	淡黄	にぶい黄橙	山形押型文	—	
223	1294	E-8	IV	124.708	—	口縁部	石英・輝石・長石	—	—	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	山形押型文	—	
224	575	F-8	IVa	123.501	—	胴部	石英・輝石・長石	ナデ(浅い・粗)	ナデ	—	明赤黄	にぶい黄	—	—	
225	—	E-8	IV	—	—	胴部	石英・輝石・長石	条痕(2mm)	ナデ	—	にぶい黄	にぶい黄	—	—	
46	226	一括	E-7	V	—	—	胴部	石英・輝石・長石	条痕(2mm)	ナデ	—	橙	にぶい黄	—	—
	227	一括	F-7	—	—	—	—	石英・長石・角閃石	ナデ(浅い・粗)	ナデ	—	浅黄橙	濁灰	刺突文	—
	228	505	F-7	IVa	124.008	—	胴部	角閃石・長石・輝石・石英	—	ナデ	—	橙	にぶい黄橙	押型文	古墳
	229	1?7	E-7	IV	—	—	胴部	長石・輝石・角閃石・石英	ナデ	—	—	にぶい黄	黄灰	—	—
230	1410	E-8	IV	124.877	—	底部	石英・輝石・長石・角閃石	ナデ	ナデ	1/5	橙	明赤黄	山形押型文	—	



第47図 縄文石器器種別出土分布図



第48図 縄文石器石材別出土分布図

### ③ 石器

本遺跡では、V層、IV層、III層から440点の石器及びその製作・使用に関連した遺物が出土した。そのうち土器の出土状況や土器型式に対応する帰属時期との対比から縄文時代早期に相当すると考えられるIV層を中心に石鏃、石匙、石槍（未製品を含む）、スクレイパー、剥片類、石核、石斧（未製品を含む）、礫器、磨石・敲石類、石皿、台石を120点図示した。内訳は、石鏃5点（III層2点、IV層2点、IVb層1点）、石匙1点（IVa層）、石槍・石槍未製品6点（IV層4点、区一括2点）、スクレイパー5点（IV層4点、区一括1点）、剥片類26点（IV層13点、IVa層1点、IVb層1点、区一括9点、横転1点、表層1点）、石核1点（IV層）、石斧・石斧未製品31点（IV層18点、IVa層2点、IVb層1点、V層2点、表層1点、区一括7点）、礫器3点（IV層1点、IVb層1点、区一括1点）、磨石・敲石類37点（IV層18点、IVb層3点、V層1点、区一括15点）、石皿2点（IV層）・台石3点（III層1点、IV層2点）である。石材には、黒曜石、チャート、砂岩、頁岩、ホルンフェルス、安山岩を使用している。

#### 石鏃（第49図231～235）

231・232は、基部に浅い凹みをもち側辺がやや内弯している二等辺三角形を呈する石鏃で、石材は231が砂岩、232が灰白色のチャートである。233～235は、一部欠損しているが凹基の側辺が鋸歯状や直線的な二等辺三角形を呈する。233・235は三船産、234は針尾産の黒曜石である。

#### 石匙（第49図236）

236は、輝石安山岩製の横型の石匙で、素材剥片に両面から調整加工を施している。刃部から茎部にかけては厚みが増し、茎部はやや丸みを帯び、つまみの上部・左右に抉りをもつ。タール・漆などの付着物は認められない。刃部はやや外弯し、両面調整を施している。

#### 石槍・石槍未製品（第49図237、238～第51図）

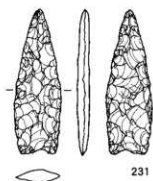
237は、先端部の側辺部分に細かな剥離調整が施され、断面は凸レンズ状を呈している。裏面の一部には研磨痕が認められる。完成した石槍の欠損品、あるいは製作の最終段階で破損したものと二つの可能性が考えられる。石材はホルンフェルスである。238は、側辺及び表裏面に剥離調整が施され、断面は凸レンズ状を呈している。剥離調整の段階から見て製作途中の未製品と考えられる。石材はホルンフェルスである。239～242は、扁平な剥片素材を利用し、側辺部分には細かな剥離調整が施されている。241の基部表面や両側辺の一部には使用時のものと思われる右斜め方向の擦痕が認められる。4点とも石材はホルンフェルスである。

#### スクレイパー（第52図243～247）

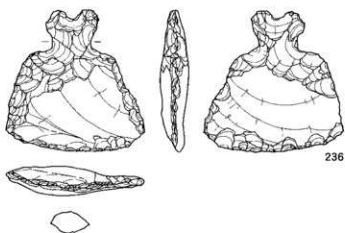
243はホルンフェルス製の縦長の剥片を素材とし、背面の右側辺部分から先端部にかけて平坦気味の細かい剥離調整が施されている。244もホルンフェルス製で先端部が欠損し、背面・腹面に弱い節理面が見られる。基部及び側辺部分から先端部にかけて平坦気味の細かい剥離調整が施されている。245～247はホルンフェルス製で側辺部分及び先端部分に細かな剥離調整が施されている。

#### 加工痕のある剥片（第52図248、249～第53図250、251、252）

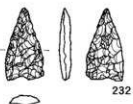
248～252は、二次的な調整加工が行われたと見られる石器で、非定形的な石器もしくは定形的な石器への位置付けが不明確なものである。5点とも石材はホルンフェルス製である。250は基部・先端部分及び側辺部分に細かな剥離調整が施されている。



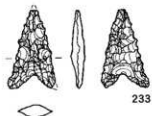
231



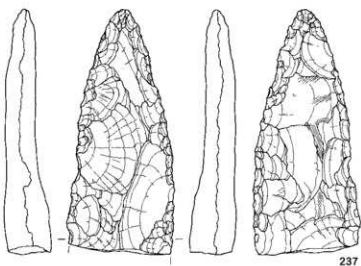
236



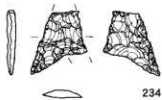
232



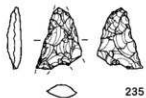
233



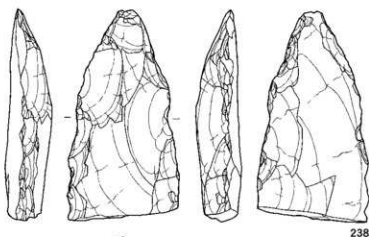
237



234



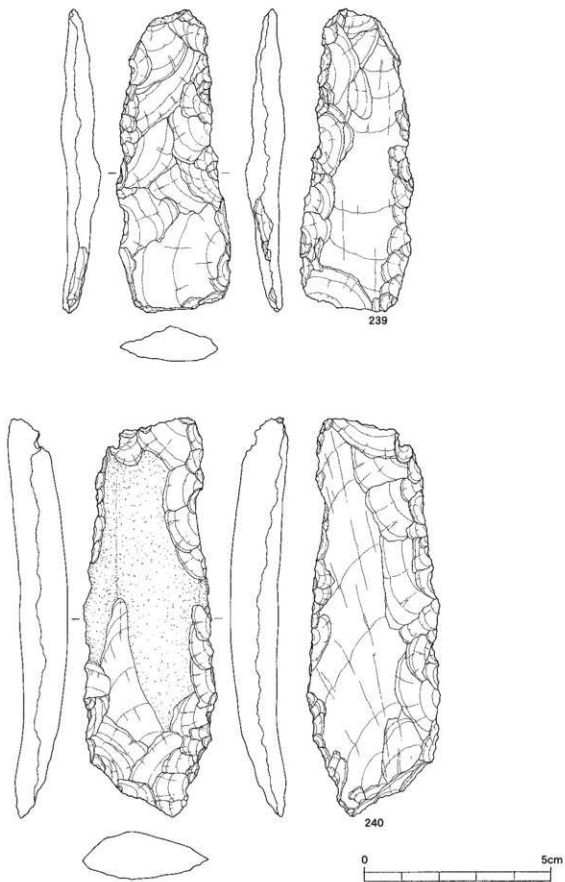
235



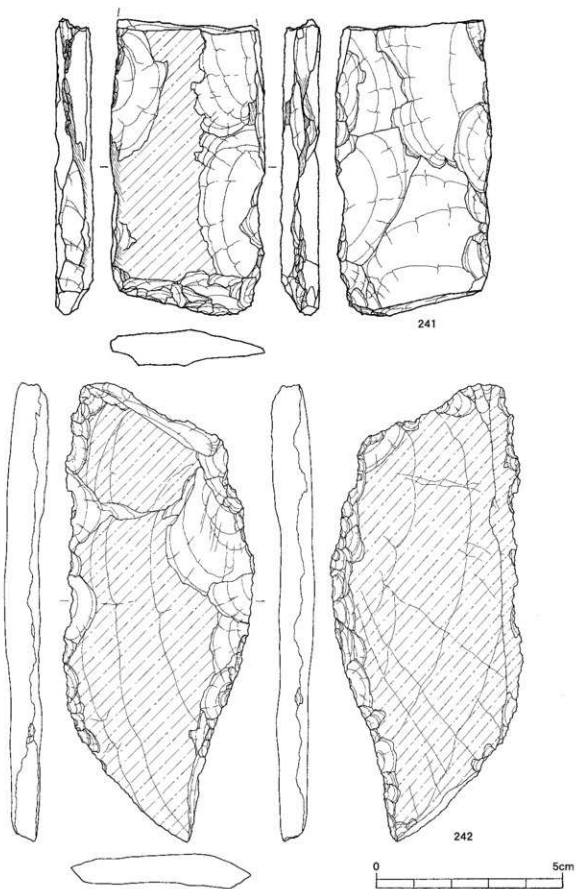
238



第49図 縄文石器1 (石鏃・石匙・石槍)

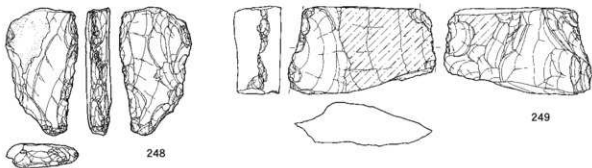
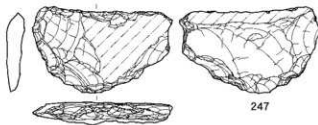
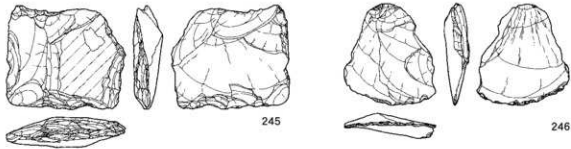
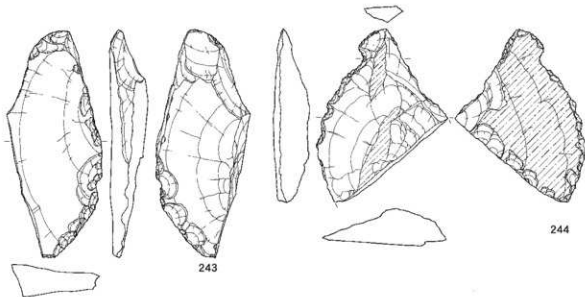


第50図 縄文石器 2 (石槍)

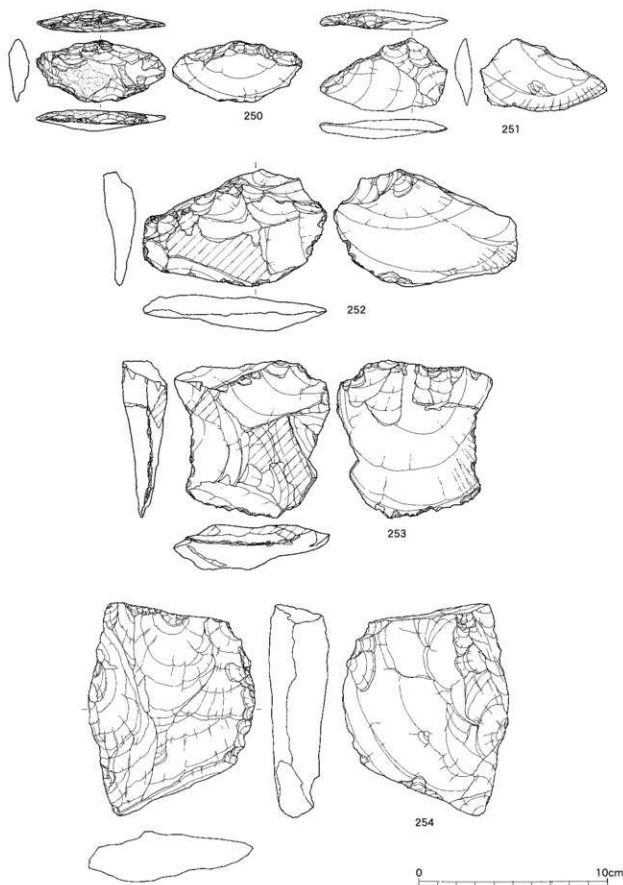


第51図 縄文石器 3 (石槍)

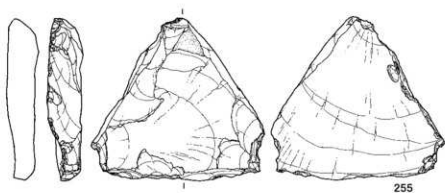




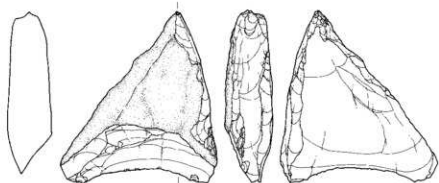
第52図 縄文石器4 (スクレイパー・加工痕剥片)



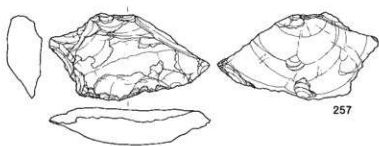
第53図 縄文石器 5 (加工痕剥片・使用痕剥片)



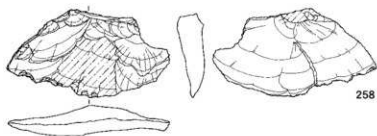
255



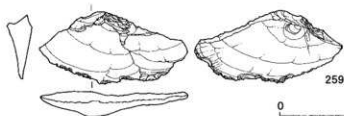
256



257



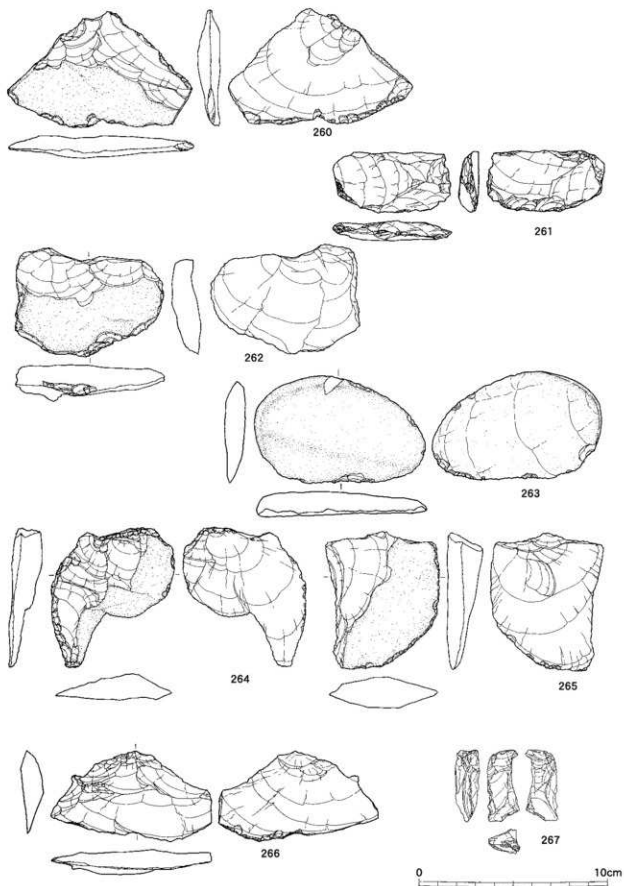
258



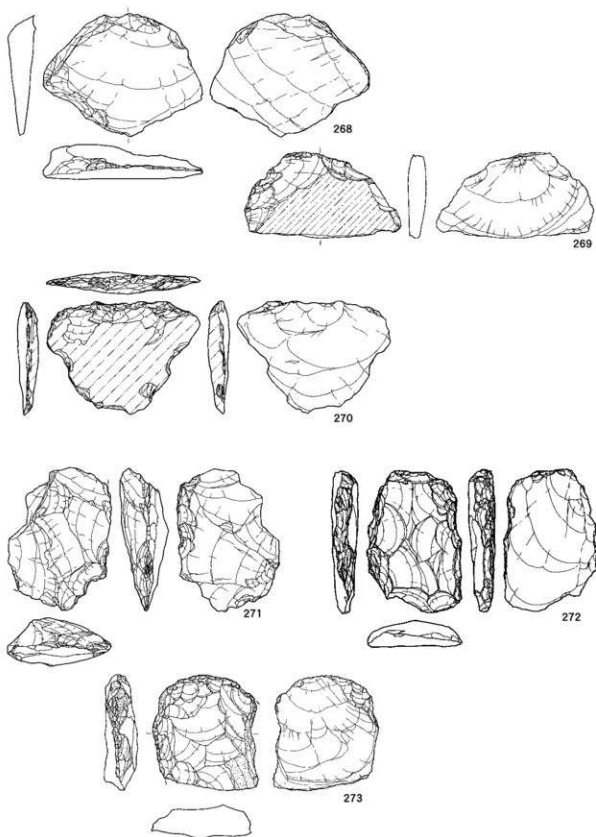
259



第54図 縄文石器6 (剥片)



第55図 縄文石器7 (剥片)



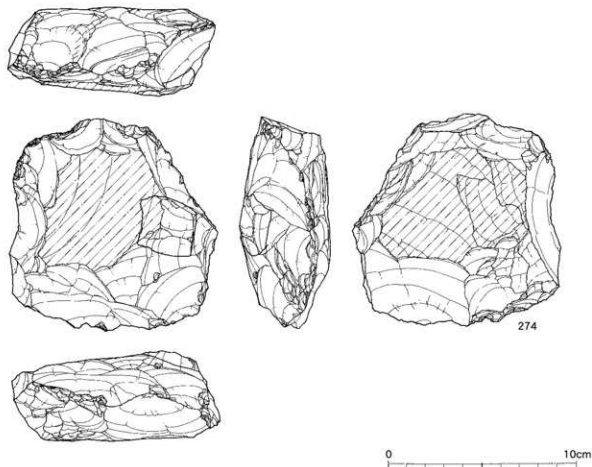
第56図 縄文石器 8 (剥片)

#### 剥片 (第53図253～第56図)

263は安山岩製, 265は砂岩製でそれ以外は全てホルンフェルス製の剥片である。基部・先端部及び側辺部分に細かい剥離調整が施されている。264は背面に自然面があり, 側辺部分から先端部にかけて使用によると見られる細かい剥離が生じている。265・266も基部から側辺, 先端部にかけて丁寧な調整剥離が観察される。267は基部, 側辺, 先端部分の一部に剥離調整が施され使用痕をもつ剥片である。何らかの理由により剥落した一部と思われる。268～273は剥片であるが, 273のような明確な剥離調整や敲打痕が観察されることから石斧製作に生じた剥片と考える。

#### 石核 (第57図)

274は, ホルンフェルス製の石核である。上下・左右側面を打面とし, 片側一方のみからの剥片剥離が観察されることから作業面は下部にある。



第57図 縄文石器9 (石核)

## 石斧・石斧未製品（第59図～第62図）

ほとんどが製作時に伴う未製品である。剥片等が多量に出土していたため、石斧製作の段階を想定し、第58図のような段階毎に区分して掲載した。

製作の段階は3段階に区分でき、区分した根拠については最終調整段階となる第3段階から粗割整形段階となる第1段階の順に述べることにする。まず、第3段階は剥離面側に敲打による微調整の痕が顕著に残り、刃部や基部の一部を磨いた素材が多く認められる点である。第2段階は側面に敲打による調整を施している素材も含め、主に剥離面側に剥離調整を施している素材が多く認められる点である。第1段階は剥片を剥出後、粗い剥離を側面に施し整形している素材が多く含まれている点である。

区分された石斧には重量平均500g以上・厚さ約4cm以上の重厚感があるもの、扁平のもの、棒状（ノミ状）のもの、長さが10cm未満の小型のものが存在する。

### 第3段階（第59図275～283）

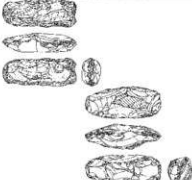
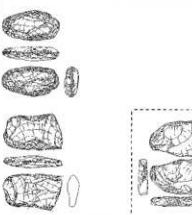






275～283は敲打調整及び研磨による最終調整段階と思われる石斧である。重厚感があるもの、扁平のもの、小型のものがある。欠損品を含む。277は重厚感があり、灰色の良質な頁岩製刃部磨製石斧である。粗割整形後、表裏及び側面に敲打調整を行い、刃部から芯部にかけて縦方向が強い斜位の研磨が施されている。平面形態は短冊形を呈し、刃縁は外弯気味の直刃である。刃部断面は膨らみを持つ片刃と推測する。使用時の欠損により再加工したと思われる剥離調整が施されている。樹木の伐採具としての要素を備えている。280はホルンフェルス製で刃部幅が狭い先細り状になっており、刃部から基部にかけ研磨が施されている。刃部断面は膨らみを持つ片刃と推測する。石槍の可能性も考えられる。283は扁平で基部の一部が欠損している。ホルンフェルス製である。刃部は円刃で、厚みのない蛤刃を呈する。研磨は刃部を中心に表裏に施されているほか、一部側面にまで及んでいる。

### 第2段階（第60図284～291・第61図292～299）

284～299は側縁部の剥離整形及び敲打調整による段階と思われる石斧である。小型のもの、棒状のもの、重厚感があるもの、扁平のものがある。欠損品を含む。284はホルンフェルス製で小型の一群の中では最小である。長さが7.2cmで扁平のものである。刃縁は直刃に近く、刃縁から左側面には僅かに敲打痕が観察される。287はホルンフェルス製で棒状を呈し、表裏及び側面部分を剥離により整形し、その後側面部分に細かな剥離調整を施している。表面の基端及び右側面部分には、敲打による調整が施されている。

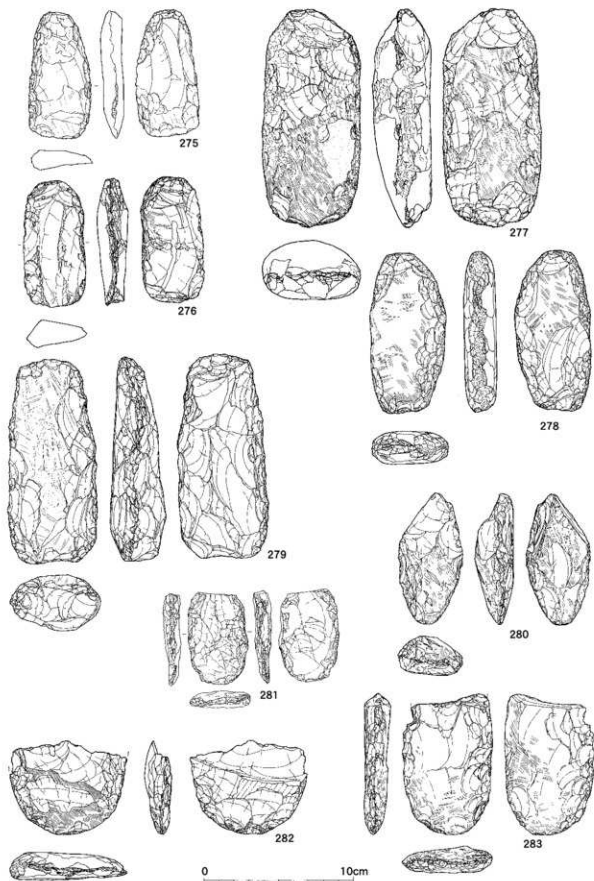
### 第1段階（第62図300～305）

300～305は粗割整形段階と思われる石斧である。扁平のもの、棒状のものがある。欠損品を含む。304はホルンフェルス製で扁平のものである。出土した石斧の中では重量・長さ共に最大を誇る。重量1,000g、長さ26.6cm。剥片を素材とし、基端から右側面を中心に剥離により整形を施している。

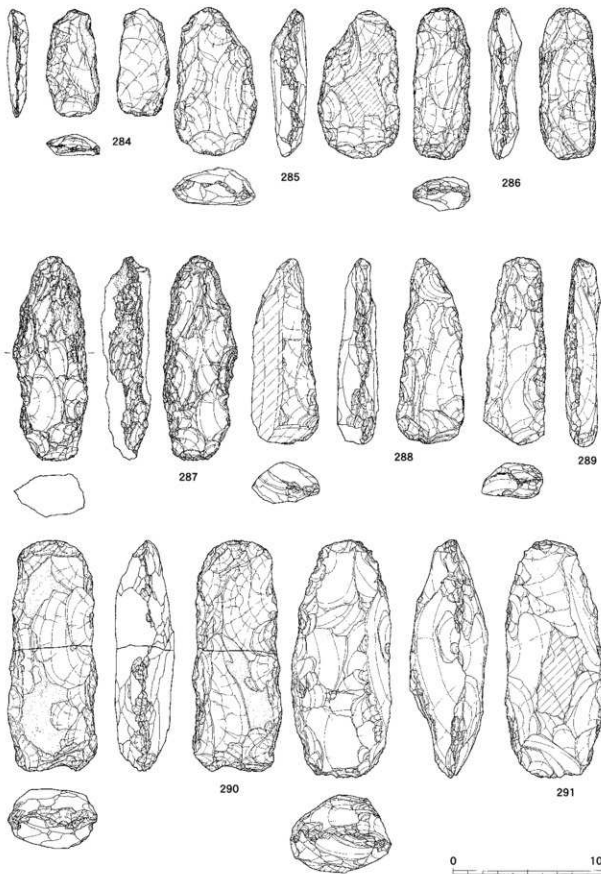
	重厚感があるもの	扁平のもの	小型のもの	棒(ノミ)状のもの
破打調整及び 研磨調整段階 (再加工)				
粗割整形段階				

第58図 石斧製作段階模式図

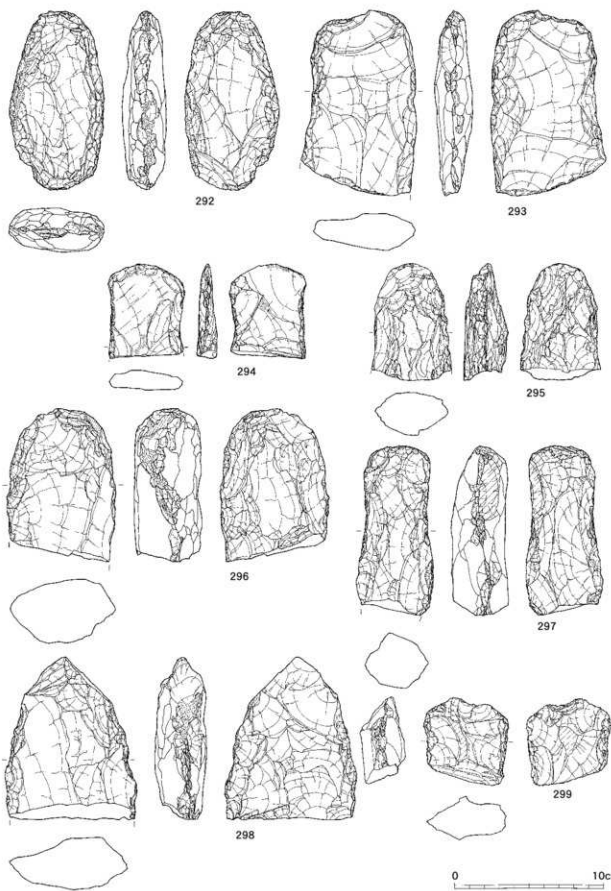




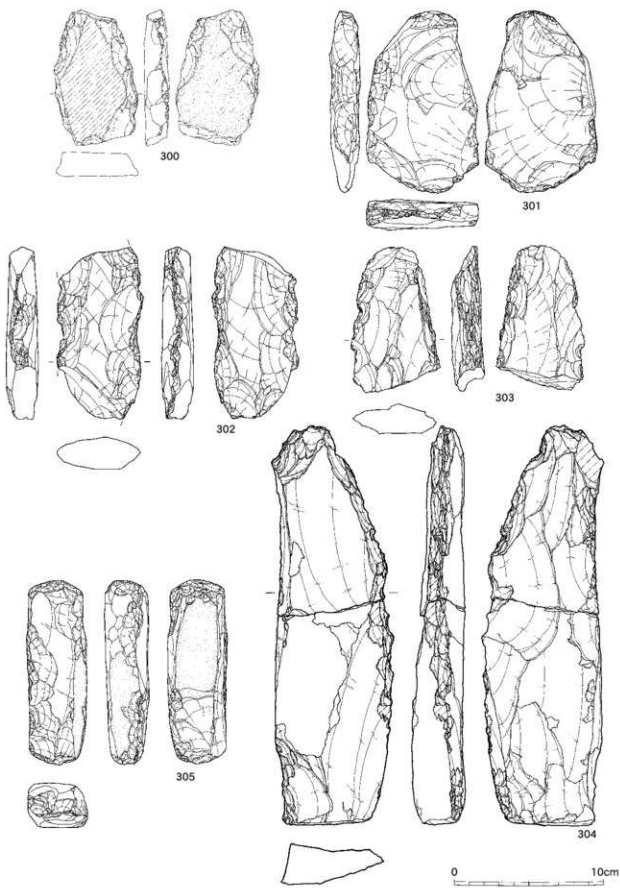
第59圖 縄文石器10 (石斧未製品)



第60圖 縄文石器11 (石斧未製品)



第61図 縄文石器12 (石斧未製品)



第62図 縄文石器13 (石斧未製品)

#### 礫器 (第63図306～308)

306は、砂岩製の厚みのある剥片を使用し、側辺部分から端部にかけて調整剥離が認められる。縦刃形の礫器である。307は、風化が進んでいる砂岩製の礫器である。側辺部分の縦、横には調整剥離が認められる。308は、厚みのあるホルンフェルス製の剥片を使用している。風化の進んでいる剥離面が見られ、側辺部や端部には細かな調整剥離が認められる。

#### 磨石・敲石類 (第64図～第68図)

磨石、敲石、凹石は同一個体に磨面・敲打痕・窪みといった使用(加工)痕を重複して有する場合が見られる。このため本報告書では磨石・敲石類として一括し、形状や使用痕に基づき以下の細分を設けた。

##### ①磨面のみを有するもの (第64図309～第65図325)

309は安山岩製で平面形が楕円形を呈し、表裏及び周縁部に磨面をもつ。球状・扁平な礫を素材にして剥離が生じているものもある。

##### ②両面に磨面があり、側縁及び部分的に敲打痕が見られるもの (第66図326～328)

326は安山岩製で平面形が楕円形、断面形が餅状を呈し、表裏及び周縁部に磨面をもち、長軸の一端もしくは側縁部に敲打痕が見られる。

##### ③片面に磨面があり、側縁及び部分的に敲打痕が見られるもの (第66図329～第68図338～342)

336は砂岩製、337は安山岩製で平坦面に磨面があり、側縁に著しい敲打痕が見られる。341は安山岩製で卵状を呈し、長軸の一端もしくは両端に敲打痕が見られる。

##### ④敲打痕のみを有するもの (第68図343～345)

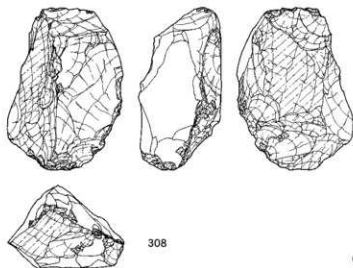
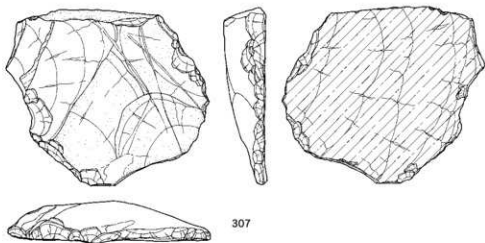
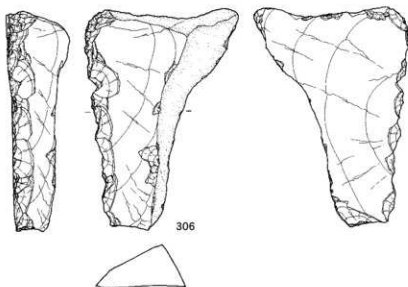
345は片側平坦面の中央に敲打による窪みが見られる。

#### 石皿 (第69図347, 第70図350)

347は、扁平で板状の石皿である。表裏面はほぼ平坦な面をもち、表面には顕著な磨痕が認められる。また、表面中央から左側にかけて弱い敲打痕も認められる。石材は砂岩である。350は、表面がほぼ平坦な面をもち面尖部には弱い磨痕が認められる。石材は砂岩である。

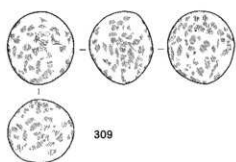
#### 台石 (第69図346, 第70図348, 349)

348は、砂岩製の礫を使用し、側縁部は顕著な敲打痕が認められる。風化が著しく、一部欠損している。349は、砂岩製でやや平坦な面をもち、表裏面や側縁部には弱い敲打痕が認められる。346は、扁平で板状の砂岩を用いている。表裏面は、風化が進んでいるため磨痕や敲打痕が認められない。

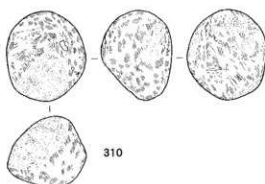


0 10cm

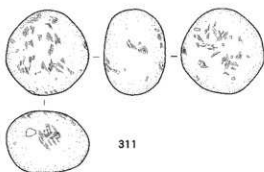
第63図 縄文石器14 (礫器)



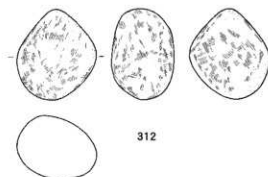
309



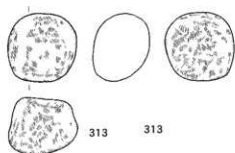
310



311

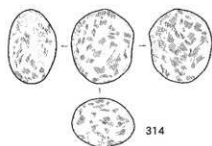


312

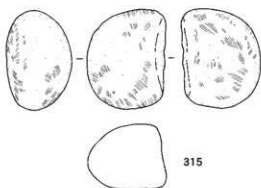


313

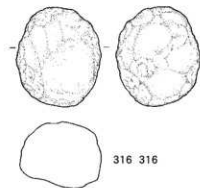
313



314



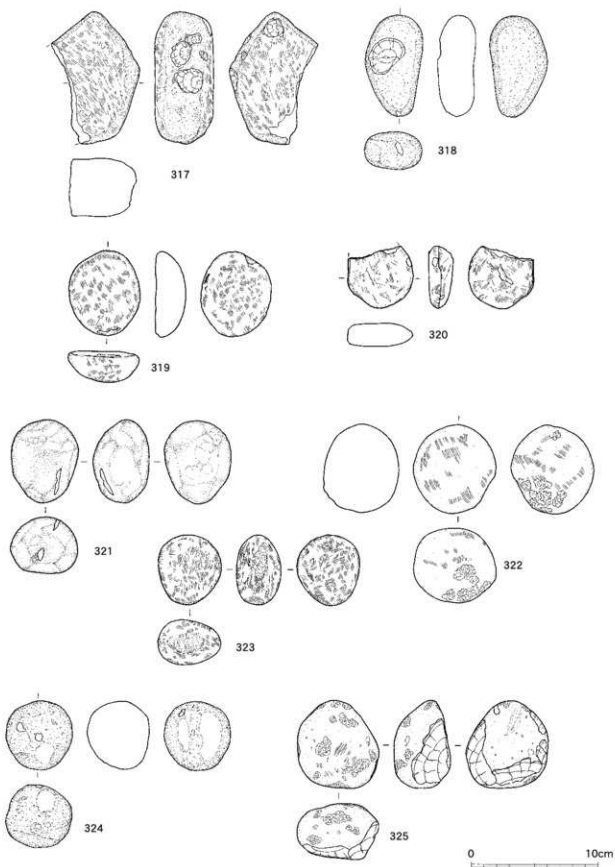
315



316 316

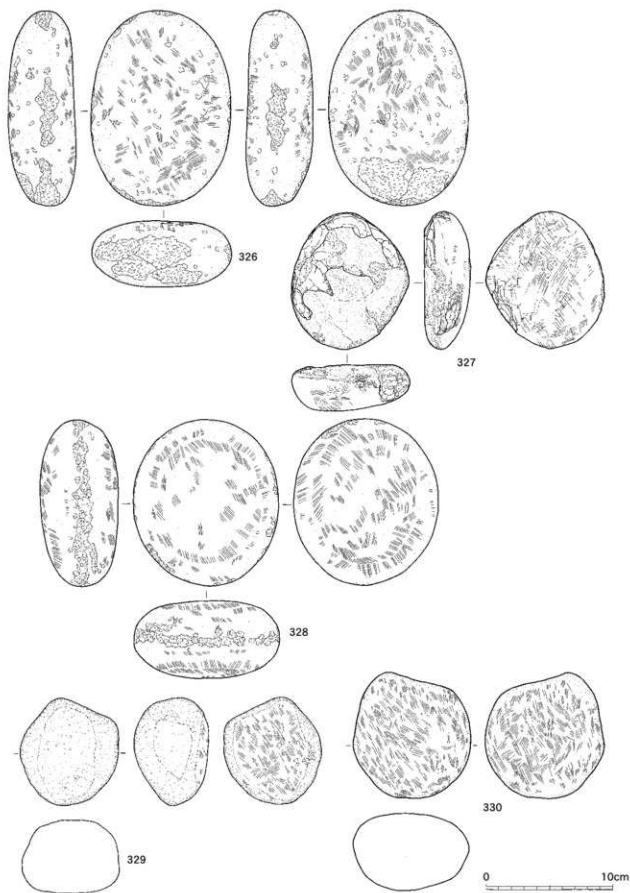
0 10cm

第64図 縄文石器15（磨石）

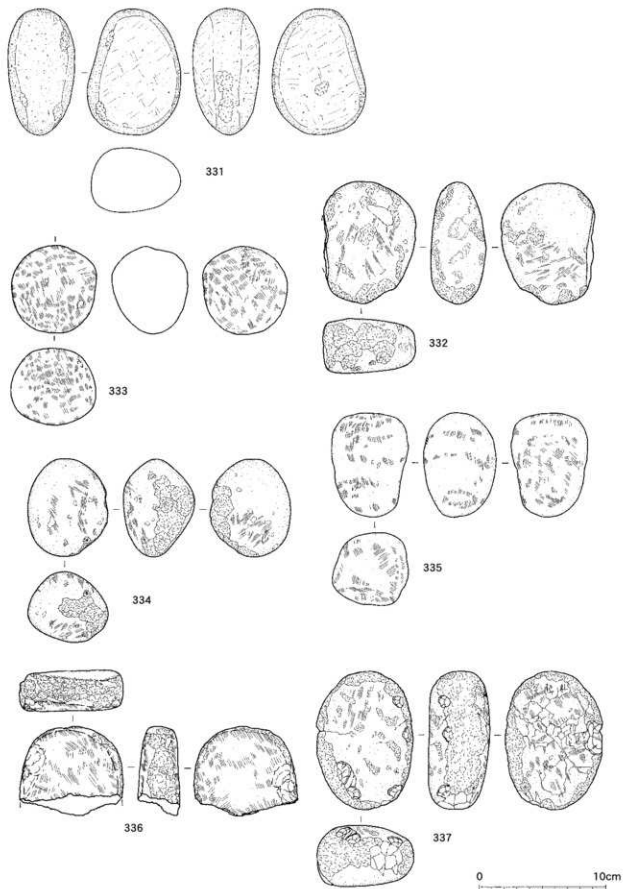


第65図 縄文石器16 (磨石・敲石)

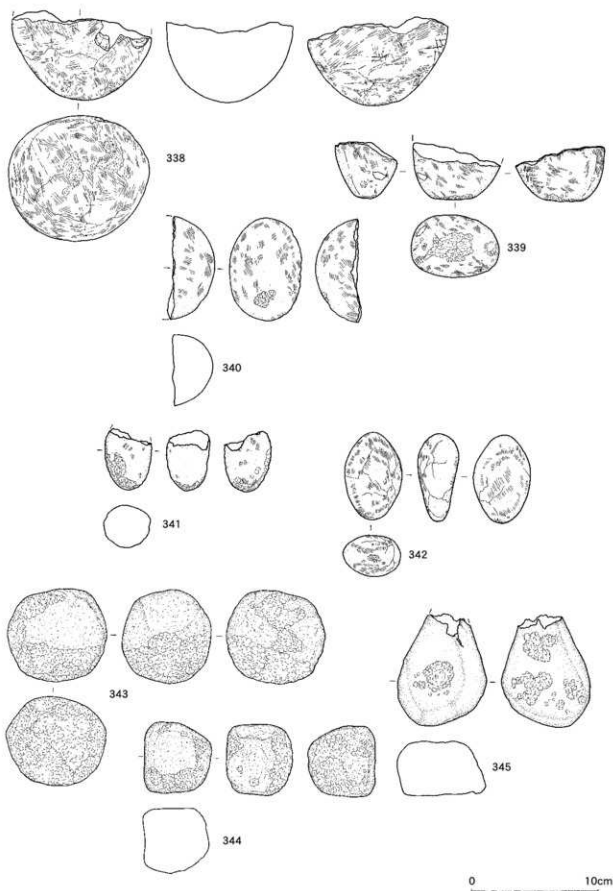




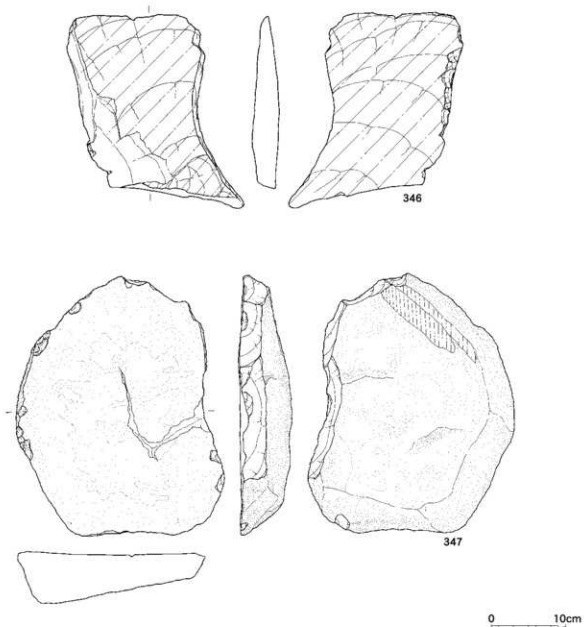
第66図 縄文石器17 (磨・敲石)



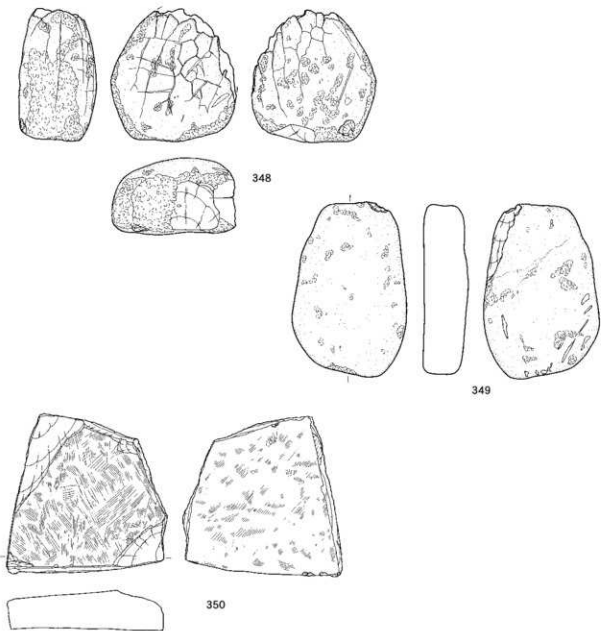
第67図 縄文石器18 (磨・敲石)



第68図 縄文石器19 (磨・敲石)



第69図 縄文石器20 (台石・石皿)



第70圖 縄文石器21（台石・石皿）

第10表 出土石器観察表(縄文1)

標記No.	図No.	注記No.	器種	石材	出土区	出土層	出土レベル(m)	重量(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	備考
49	231	70	石鏃	砂岩	G-8	IVb	122.7	1.7	3.9	1.2	0.3	
	232	1440	石鏃	チャート	E-8	IV	125.2	0.6	1.9	1.0	0.3	
	233	364	石鏃	黒曜石	F-9	III	124.1	0.6	2.1	1.3	0.4	鋸歯状
	234	43	石鏃	黒曜石	G-7	III	121.8	0.4	1.7	1.6	0.2	
	235	1470	石鏃	黒曜石	E-9	IV	125.0	0.6	1.7	1.2	0.4	
	236	110	石匙	安山岩	G-7	IVa	122.2	8.4	3.8	3.7	0.8	
	237	一括	石槍	ホルンフェルス	F-7	-	-	20.2	6.6	2.8	1.2	研磨痕あり
238	一括	石槍	ホルンフェルス	F-7	-	-	20.6	5.7	2.9	1.2		
50	239	1774	石槍	ホルンフェルス	E-7	IV	124.0	20.6	8.2	3.0	1.0	
	240	1691	石槍	ホルンフェルス	E-7	IV	124.6	52.3	10.7	3.4	1.6	
51	241	1736	石槍	ホルンフェルス	E-7	IV	124.9	53.9	7.9	4.1	1.1	擦痕あり
	242	一括	石槍	ホルンフェルス	E-7	IV	-	76.4	12.1	5.3	1.2	
52	243	1701	スクレイパー	ホルンフェルス	E-7	IV	124.3	93.7	11.8	4.7	2.1	
	244	1627	スクレイパー	ホルンフェルス	E-7	IV	125.2	81.3	8.0	6.2	2.0	
	245	1680	スクレイパー	ホルンフェルス	E-7	IV	125.8	64.1	6.4	5.5	1.6	
	246	1699	スクレイパー	ホルンフェルス	E-7	IV	124.2	25.5	5.5	4.8	1.3	
	247	一括	スクレイパー	ホルンフェルス	E-7	-	-	44.6	7.4	4.7	1.2	
	248	1666	加工痕剥片	ホルンフェルス	E-7	IV	125.6	46.3	6.8	3.8	1.3	
	249	一括	加工痕剥片	ホルンフェルス	F-6	-	-	108.4	7.7	4.6	2.5	
53	250	一括	加工痕剥片	ホルンフェルス	E-7	IV	-	23.0	3.3	6.9	1.1	整形剥片
	251	一括	加工痕剥片	ホルンフェルス	F-7	IVa	-	21.2	6.8	3.7	1.0	
	252	一括	加工痕剥片	ホルンフェルス	F-6	-	-	84.5	9.9	5.8	1.9	
	253	一括	剥片	ホルンフェルス	E-7	表	-	128.1	8.3	8.1	2.4	加工痕あり
	254	一括	剥片	ホルンフェルス	E-7	-	-	320.0	11.3	8.7	3.2	加工痕あり
54	255	一括	剥片	ホルンフェルス	F-6	-	-	151.3	8.6	9.1	1.9	加工痕あり
	256	1645	剥片	ホルンフェルス	E-6	IV	124.2	168.4	10.2	8.0	2.5	加工痕あり
	257	1154	剥片	ホルンフェルス	E-8	IV	124.7	70.5	5.8	7.2	2.0	加工痕あり
	258	1446	剥片	ホルンフェルス	E-8	IV	124.5	50.5	8.7	4.6	1.6	加工痕あり
	259	1686	剥片	ホルンフェルス	E-6	IV	125.3	22.4	5.4	6.1	1.3	加工痕あり
55	260	一括	剥片	ホルンフェルス	E-7	IV	-	56.9	8.0	7.0	1.2	加工痕あり
	261	1159	剥片	ホルンフェルス	E-8	IV	124.9	24.9	6.3	3.4	1.1	加工痕あり
	262	1249	剥片	ホルンフェルス	E-9	IV	125.2	74.5	7.8	5.6	2.0	二次加工痕あり
	263	1806	剥片	安山岩	E-7	IV	123.9	75.0	9.2	5.8	1.3	加工痕あり
	264	-	剥片	ホルンフェルス	D-9	横転	-	52.0	8.4	5.4	1.8	微細潤滑痕あり
	265	一括	剥片	砂岩	D-9	-	-	71.1	7.4	6.1	1.9	使用痕有り
	266	一括	剥片	ホルンフェルス	E-7	-	-	38.2	8.4	4.8	1.4	微細潤滑痕あり
	267	102	剥片	ホルンフェルス	G-6	IVb	120.9	6.8	3.7	1.7	1.3	
56	268	一括	剥片	ホルンフェルス	F-9	-	-	85.6	7.5	6.5	1.9	
	269	1639	剥片	ホルンフェルス	E-6	IV	125.7	37.5	4.6	7.3	0.9	
	270	1604	剥片	ホルンフェルス	E-7	IV	125.7	46.8	6.1	8.0	1.2	

第11表 出土石器観察表(縄文2)

標本No.	図No.	注記No.	器種	石材	出土区	出土層	出土レベル (m)	重量(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	備考	
56	271	1761	剥片	ホルンフェルス	E-7	IV	124.7	87.7	7.6	5.4	2.6	製作中欠損	
	272	一括	剥片	ホルンフェルス	E-7	-	-	64.6	7.4	5.2	1.4		
	273	一括	剥片	ホルンフェルス	F-6	-	-	76.2	6.0	5.7	1.8	基部のみ	
57	274	770	石核	ホルンフェルス	F-6	IV	123.8	742.0	11.1	11.1	11.3		
50	275	605	石斧	ホルンフェルス	F-8	IVb	123.6	69.7	8.5	4.3	1.5	刃部磨製	
	276	-	石斧	ホルンフェルス	-	表	-	90.2	8.6	4.2	2.1	基部のみ	
	277	1223	石斧	頁岩	E-9	IV	125.5	566.0	14.6	6.5	4.0	刃部磨製	
	278	1624	石斧	ホルンフェルス	E-7	IV	125.6	186.4	10.7	5.1	2.2	刃部磨製	
	279	一括	石斧	ホルンフェルス	E-7	IV	-	385.0	13.7	5.8	3.7	未製品	
	280	1781	石斧	ホルンフェルス	E-7	V	125.2	99.9	8.8	4.3	2.6	基部のみ (研磨痕あり)	
	281	一括	石斧	ホルンフェルス	F-7	-	-	36.9	6.2	4.0	1.2		
	282	13	石斧	ホルンフェルス	Iトシ	IV	120.6	89.6	7.7	6.2	1.8	刃部磨製	
	283	752	石斧	ホルンフェルス	F-7	IVa	123.6	135.7	9.3	6.0	1.8	刃部磨製	
	60	284	1616	石斧	ホルンフェルス	E-7	IV	125.7	38.8	7.2	3.5	1.4	小型
		285	1502	石斧	ホルンフェルス	D-7	IV	126.6	182.7	9.9	5.5	2.5	刃部のみ
286		1785	石斧	ホルンフェルス	E-7	IV	124.9	92.9	10.1	3.8	2.3	未製品	
287		1633	石斧	ホルンフェルス	E-7	IV	125.86	275.0	12.2	4.7	0.3	未製品	
288		1725	石斧	ホルンフェルス	E-7	IV	125.4	157.6	12.4	4.6	2.8	未製品	
289		一括	石斧	ホルンフェルス	F-6	-	-	159.1	12.4	4.0	2.3	未製品	
290		一括	石斧	ホルンフェルス	D-7	-	-	400.0	15.4	6.0	4.0		
291		1597	石斧	ホルンフェルス	E-7	IV	125.9	610.0	15.8	6.7	5.2		
61		292	1381	石斧	ホルンフェルス	E-8	IV	124.5	275.0	12.0	6.2	3.0	未製品
		293	-	石斧	ホルンフェルス	E-8	-	-	272.0	12.3	7.7	2.6	基部のみ
	294	-	石斧	ホルンフェルス	F-9	IVa	-	54.2	6.3	5.1	1.3	刃部磨製	
	295	1804	石斧	ホルンフェルス	E-7	V	125.1	124.6	7.8	5.4	3.0	基部のみ	
	296	1745	石斧	ホルンフェルス	E-7	IV	125.1	450.0	9.8	6.9	4.6	基部のみ	
	297	1708	石斧	ホルンフェルス	E-7	IV	124.9	288.0	11.2	5.1	3.8	基部のみ	
	298	一括	石斧	ホルンフェルス	E-6	-	-	358.0	10.9	8.7	3.5	基部のみ	
	299	一括	石斧	ホルンフェルス	E-6	-	-	94.9	5.6	5.8	3.0	基部のみ	
	62	300	一括	石斧	ホルンフェルス	F-6	-	-	111.0	8.9	5.4	1.7	
301		1650	石斧	ホルンフェルス	E-6	IV	125.4	258.0	12.1	7.5	2.1	未製品	
302		1786	石斧	ホルンフェルス	E-7	IV	125.0	187.6	11.3	6.3	2.2	基部のみ	
303		1301	石斧	ホルンフェルス	E-8	IV	124.2	131.7	9.3	5.9	2.2	基部のみ	
304		1766	石斧	ホルンフェルス	E-7	IV	125.0	1000.0	26.6	7.9	3.0		
305		1636	石斧	ホルンフェルス	E-6	IV	125.6	250.0	12.3	4.0	3.0	未製品	
63	306	-	礫器	砂岩	トシ内	IVb	-	721.0	18.0	11.8	5.0		
	307	1061	礫器	砂岩	D-8	IV	125.8	739.0	16.7	14.5	3.3		
	308	一括	礫器	ホルンフェルス	F-6	-	-	780.0	13.1	7.7	6.6		
64	309	1484	磨石	安山岩	E-9	IV	125.3	199.5	5.8	5.3	5.0		
	310	一括	磨石	安山岩	F-8-9	-	-	305.0	6.8	5.7	5.6		

第12表 出土石器観察表(縄文3)

標本No.	図No.	注記No.	器種	石材	出土区	出土層	出土レベル (m)	重量(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	備考
64	311	一括	磨石	安山岩	F-6	-	-	315.0	6.8	6.5	4.9	
	312	-	磨石	安山岩	C-7	-	-	286.0	7.1	6.1	5.0	
	313	一括	磨石	安山岩	F-9	-	-	201.5	5.9	5.5	4.6	
	314	8	磨石	安山岩	集石3	-	120.6	148.0	5.9	5.0	3.9	
	315	一括	磨石	安山岩	D-8	-	-	372.0	7.9	6.2	5.2	
	316	一括	磨石	安山岩	E-8	III	-	380.0	7.8	6.5	5.2	
65	317	一括	磨石	安山岩	F-8-9	-	-	458.0	8.9	7.8	4.7	
	318	1160	磨石	砂岩	E-8	IV	125.2	155.4	7.6	4.5	3.0	
	319	1564	磨石	安山岩	E-8	IV	125.1	126.5	6.8	5.6	2.4	
	320	一括	磨石	安山岩	F-6	-	-	64.3	5.3	4.4	2.0	
	321	一括	磨石	安山岩	F-9	-	-	203.8	6.5	5.2	4.4	
	322	1543	磨・敲石	安山岩	E-9	IV	125.2	370.0	6.6	5.8	5.9	
	323	282	磨・敲石	砂岩	G-7	V	121.3	128.6	5.6	4.8	3.5	
	324	780	磨・敲石	安山岩	F-6	IVb	122.2	198.7	5.5	5.3	5.0	
	325	1719	磨・敲石	安山岩	E-7	IV	124.2	252.0	6.8	6.2	4.5	
	326	1635	磨・敲石	安山岩	E-6	IV	125.3	1410.0	15.4	11.0	5.3	
66	327	1618	磨・敲石	砂岩	E-7	IV	125.4	485.0	10.8	9.2	3.7	
	328	-	磨・敲石	花崗岩	4トレンチ	IV	-	1350.0	13.0	11.3	6.2	
	329	一括	磨・敲石	安山岩	F-7	-	-	560.0	8.5	7.7	6.0	
	330	7	磨・敲石	安山岩	1トレンチ	IV	120.5	860.0	10.3	9.4	6.2	
67	331	645	磨・敲石	安山岩	F-8	IVb	122.9	580.0	10.1	7.4	5.3	
	332	1606	磨・敲石	安山岩	E-7	IV	125.7	450.0	9.7	7.1	4.3	
	333	790	磨・敲石	安山岩	F-8	IV	123.6	308.0	6.8	6.6	6.1	
	334	1605	磨・敲石	安山岩	E-7	IV	125.7	345.0	7.4	6.2	5.6	
	335	1085	磨・敲石	安山岩	D-9	IV	126.4	410.0	8.2	5.8	5.8	
	336	一括	磨・敲石	砂岩	D-7	-	-	249.0	8.1	7.0	3.3	
	337	1070	磨・敲石	安山岩	D-8	IV	126.6	502.0	11.0	7.7	4.9	
68	338	一括	磨・敲石	安山岩	G-6	-	-	812.0	11.2	9.9	10.0	
	339	一括	磨・敲石	安山岩	D-8	-	-	145.1	7.0	5.0	5.0	
	340	138	磨・敲石	安山岩	4トレンチ	IV	122.0	185.3	8.1	5.6	5.7	
	341	750	磨・敲石	安山岩	F-7	IVb	122.4	66.1	4.9	3.6	3.4	
	342	一括	磨・敲石	砂岩	F-9	-	-	113.4	6.9	4.5	3.3	
	343	一括	敲石	安山岩	F-9	-	-	610.0	8.3	7.9	7.1	
	344	1000	敲石	安山岩	D-8	IV	125.9	259.0	5.7	5.2	5.2	
	345	1619	敲石	砂岩	E-7	IV	125.5	360.0	8.9	6.9	4.3	
	346	165	台石	砂岩	G-6	III	120.9	2200.0	28.0	21.0	3.7	
69	347	1636	石皿	砂岩	E-7	IV	125.7	7900.0	34.6	28.0	0.7	
	348	2	台石	砂岩	1トレンチ	IV	120.6	930.0	11.0	10.1	6.1	
70	349	1409	台石	砂岩	E-9	IV	125.2	740.0	13.2	9.0	3.6	
	350	1600	石皿	砂岩	E-7	IV	125.8	885.0	12.9	12.2	3.3	

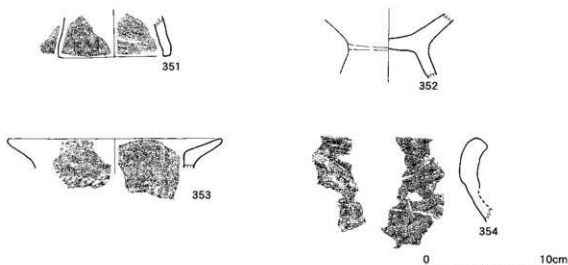


## 第5節 古墳時代～古代の調査

遺物は調査区の南側周辺部から出土し、古墳時代の遺物2点、古代の遺物2点と判明した。それらに伴う遺構は検出されず、遺物包含層自体も確認されなかった。

351は古墳時代の土師器(甕)の脚部の一部で、底面が接地面とほぼ平行になっている。端部の外面はやや外弯し、底面にかけて窄まる。内面もやや外弯し、底面の近いところで段を有する。内外面に一部ススが附着し、工具で横位の丁寧なナデ調整が施されている。352は古墳時代の成川式土器(甕)の脚部の一部である。脚部外面は外反しながら開き、端部は平坦であると思われる。脚部内面は天井部がほぼ平坦で、底部との接合部には指で押圧されたと思われる痕跡が残っている。底部と脚部の外面は横位のナデ調整が施され、底部内面はナデ調整で深部はヘラの先端部で押圧されたと思われる痕跡が残っている。353は古代の土師器(甕)の口縁部の一部である。口唇部は外反し、内外面はナデ調整が施されている。口縁部外面の屈曲部の下には長さ約5mm、幅約1mmの斜位(左下がり)の刺突が施されている。354も古代の土師器(甕)の口縁部の一部と思われる。口唇部は外反し、内面には横・斜位の粗いケズリが施されている。外面は風化が進んでいるためか調整が不明である。胎土とよい違和感のある遺物である。

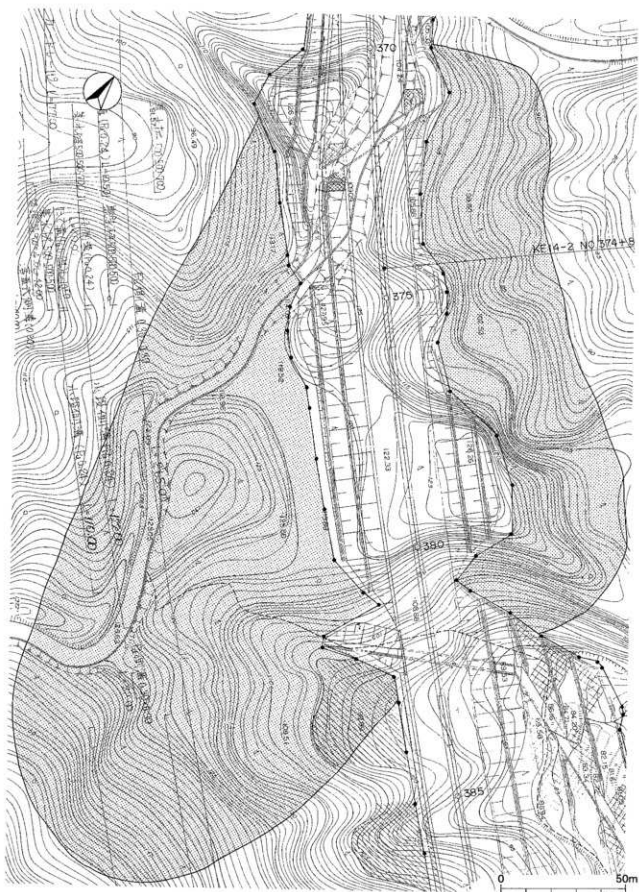
遺物包含層自体もなく、以上の遺物は流れ込みの可能性がある。



第71図 古墳時代～古代の土器

第13表 古墳時代～古代出土土器観察表

標記No	図No	注記No	出土区	出土層	出土位置 (m)	類	部位	胎土	調整		遺存状態	色調		文様	備考	
									外面	内面		外面	内面			
71	351	48	G-7	Ⅲ	122.045	その他	脚	長石・輝石・石英	ナデ	ナデ	1/8	にぶい體	褐	—	古墳・成川式	
	352	—	D-8	—	—	その他	脚	石英・輝石・長石・角閃石	ナデ	ナデ	—	にぶい體	灰黄褐	—	古墳・成川式	
	353	649	F-8	IVa	123.401	その他	口縁部	石英・長石・角閃石・輝石	ナデ	ナデ	1/8	にぶい體	にぶい體	刺突文	—	古代土師器類
	354	—	G-9	表土	—	その他	口縁部	長石	ナデ	ナデ	—	浅黄體	浅黄體	—	古代土師器類	



第72図 遺跡残存範囲図

## 第V章 発掘調査のまとめ

「大田城跡」の遺跡名をもつ本遺跡は、調査前から地元の郷土史研究者の熱心且つ積極的な研究により、中世の山城である一字治城の堡塁としての役割を担っていたとの見方がなされてきた（浜田・貴島1973）。この一字治城は、島津貴久がフランシスコ・ザビエルと会談した城として知られている。

そこで、確認調査・本調査では中世山城の可能性を視野に持ちながら調査を行ったが、本丸や堀の跡と推定される部分からは山城の存在を示す遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。

しかし、下層からは旧石器時代の遺物が出土した。また、縄文時代早期の遺構を検出し、遺物も出土した。本来ならば、遺跡名の変更となるが、遺跡の残存範囲図で示したとおり調査区域外での中世山城の存在は否定できず、また周辺遺跡の実情等も考慮した結果、本報告書では遺跡名の変更は行わないこととした。

ここでは、Ⅰ類土器・Ⅱ類土器の特徴や石斧から見える本遺跡の特徴なども含みながら、旧石器時代・縄文時代早期の調査成果及び課題を若干の考察も付記して述べることにする。

### 1 旧石器時代

Ⅶ・Ⅷ層を中心に遺物が出土しており、平面分布状況から3ないし4か所のブロックが区別される可能性がある。ブロックはF-7区及びF・G-7・8区の境付近で、調査区域の南側、緩傾斜地になっている位置で検出されている。20m×20mの範囲内に集中している。

出土器種には図示したナイフ形石器、台形石器、三稜尖頭器、スクレイパー、彫器、石核、磨石・敲石類のほか、石器製作に伴う剥片、砕片類など総計469点が出土している。石器器種組成及び台形石器・三稜尖頭器の形態的特徴などからみて、ほぼナイフ形石器文化期後半期中葉の一時期に概括されるものと判断している。

剥片石器類及び石核の石材には黒曜石、安山岩が、磨石・敲石類では砂岩・ホルンフェルス及び多孔質の安山岩が用いられている。このうち黒曜石については理化学的分析をおこなっていないが、外観的特徴から、上牛鼻・平木場系に類似する風化面が赤褐色を帯びた黒色を呈する不純物を含む漆黒色の黒曜石、三船産黒曜石に類似する白色の不純物を多く含み、濁白色透明の部分がある黒色半透明の黒曜石、淀姫系の原産地資料に類似する青灰色不透明で白色の不純物を含む黒曜石の三種に区別される。図示しなかった剥片・砕片類については個別の細分類はおこなっていないが、概括的には、上牛鼻・平木場系に類似する黒曜石が主体を占め、これに次いで三船産類似の黒曜石、次いで淀姫系類似の黒曜石が一定量組成する石材構成となっている。

### 2 縄文時代早期

Ⅳ層から遺構としては集石3基、土坑2基が検出されている。集石については、3号集石の周辺からⅠ類土器の底部片とⅡ類土器の口縁部片が出土している。

遺物としては、土器が小さな土器片も含め2,225点出土しており、Ⅰ類土器・Ⅱ類土器が主体を成している。何れの土器も岩板式土器から前平式土器への移行期に位置づけられる土器である。石器は石鏃、石匙、石槍、石斧、磨石・敲石のほか、砕片類を含めると298点出土している。

鹿児島県では、平成14年度までに重複する遺跡も数に含むと37遺跡から岩本式土器が出土し、19遺跡から前平式土器が出土している（黒川2002）。

本遺跡の出土土器は貝殻文円筒形土器が中心である。これまでの各研究者の型式概念についての論考や研究史を踏まえて、Ⅰ類として分類した岩本式土器（長野1984、新東1989）は、南九州の貝殻文系土器の中では水迫式土器（下山・鎌田1999）に次いで古い土器とされる。また、Ⅱ類として分類した前平式土器（河口1955）は岩本式土器に次いで古い土器とされる。つまり、本遺跡の出土土器は、縄文時代早期初頭から前葉の土器群の文化変遷を考えることができる資料の一つと考える。

### Ⅰ類土器の特徴

Ⅰ類に分類した土器は、口縁部から底部までほぼ直線の円筒形で底部は平底を成している。口唇部内面に段を有し、口唇端部には刻みが施され連続する小波状を呈する。口縁部上端には貝殻もしくはヘラ・櫛状と思われる工具で斜位の刺突文、横位の刺突線文、爪形状の刺突文を連続して施している。口縁部から底部にかけての外表面は、横方向に丁寧なナデ調整が施されている。非常に細かい横方向のハケ目が観察されるものもある。底部接地面はナデ整形が行われている。

胎土内に含まれる鉱物は石英、長石、輝石、角閃石である。2点のみだが、長さ1mm程度の金色の雲母を含むものもあり、外面よりも内面にきらきらと輝く特徴が見られる。鹿児島県立埋蔵文化財センター第三調査係の調査（県内外河川の鉱物・岩片調査）では、金色の雲母が多く含まれる河川地域は、大隅半島南部・屋久島・甕島・薩摩半島北部に位置する紫尾山系の一部である（縄文の森から2005）と指摘し、本遺跡から出土した金色の雲母を含む土器片は、土器もしくは材料が持ち込まれた可能性があると推測する。

#### 〔細分類〕

- Ⅰ a 類・・・口縁部上端は貝殻もしくはヘラ・櫛等による縦・斜位の連続する刺突文を施し、口唇端部は小波状を呈する。器面は、ナデ調整もしくは細かい条痕調整が極めて丁寧な調整を施している。口縁部の内面は段を有する。出土比率約20%
- Ⅰ b 類・・・口縁部上端は貝殻もしくはヘラ・櫛等による縦・斜位の連続する刺突文を施し、口唇端部は小波状を呈する。器面は、木口状もしくは繊維状の工具によると思われる調整や貝殻条痕調整が施されている。口縁部の内面は浅い段を有する。出土比率約21%

### Ⅱ類土器の特徴

Ⅱ類に分類した土器も口縁部から底部までほぼ直線の円筒形で底部は平底を成している。口唇端部は平坦な面を呈する。貝殻もしくはヘラ・櫛状と思われる工具で縦位・横位の連続する刺突文を口唇端部及び口縁部上端に施している。下位には横位・斜位の若干粗い貝殻条痕文が底部まで施されている。底部接地面はナデ調整や貝殻条痕調整が施されている。

胎土内に含まれる鉱物は、Ⅰ類土器にも観察された石英、長石、輝石、角閃石である。

#### 〔細分類〕

- Ⅱ a 類・・・口唇端部と口縁部上端にそれぞれ一回ずつ、貝殻もしくはヘラ・櫛による縦・斜位の連続する刺突文を施し、口唇端部は平坦な面を呈する。口縁部の内面は段の痕跡をもっている。出土比率約19%
- Ⅱ b 類・・・口唇端部と口縁部上端にそれぞれ一回ずつ、貝殻もしくはヘラ・櫛による縦・斜位の






連続する刺突文を施し、口唇端部は平坦な面を呈する。口縁部の内面は段を有しない。

出土比率約12%

II c 類・・・口縁部上端に貝殻もしくはへら・櫛による一列の縦・斜位の連続する刺突文を施し、

口唇端部は平坦な面を呈する。口縁部の内面は段を有しない。出土比率約28%

口縁部の出土比率・・・I 類土器とII 類土器の出土比率は41：59でII 類土器が多い。

分類	I 類土器：岩板式土器		II 類土器：前平式土器		
細分	I a 類	I b 類	II a 類	II b 類	II c 類
模式図					

第14表 土器分類表

※本文中の分類模式図を簡略化

#### 石斧及び石斧未製品から見る大田城跡

本遺跡では、石槍及び石斧が出土しているが、特徴としては、ほとんどが未製品である。また、それらの製作に生じたと思われる剥片・砕片類も出土している。そのため、本報告では製作場としての可能性や製作過程などを考え、第58図のような製作段階の区分を行った結果、小畑弘己が指摘しているように3段階の製作過程となった（小畑2004）。

〔第1段階〕・・・粗割整形段階

〔第2段階〕・・・側縁部の剥離整形及び敲打調整による段階

〔第3段階〕・・・敲打調整及び研磨による最終調整段階（再加工程）

各段階に区分された石斧及び石斧未製品の形態的特徴を述べると、第1段階は扁平のものと棒状（ノミ状）のものが存在する。第2段階は重量平均500g以上で厚さ約4cm以上の重厚感があるもの、扁平のもの、長さが10cm未満の小型のもの、棒状（ノミ状）のものが存在する。第3段階は重量平均500g以上で厚さ約4cm以上の重厚感があるもの、扁平のもの、長さが10cm未満の小型のものが存在する。これらは、北側に位置するD・E-6・7区周辺に若干まとまって出土している。

この他の石器として、磨石・敲石類は遺跡全体に分散しており、石皿や台石は2点がD・E-6・7区周辺に、残りは分散しているのが出土分布から見られる。

石斧及び石斧未製品の石材は、灰色の良質な頁岩が1点、残り全てはホルンフェルスが利用されている。これを石材利用の観点から考えると県内産の石材を主として利用している傾向が強いと考える（小畑2004, 星野・國師2004）。薩摩半島の頁岩・砂岩等の産出地帯と知られている紫尾山周辺から本遺跡までの直線距離は約25～30kmあり、半島中・南部域の産出地帯とは近接した距離である。また、磨石・敲石類、石皿、台石などの礫石器の石材には主に安山岩・砂岩が利用されており、安山岩の産出地帯との直線距離は約5～10kmである。

## 石材

本遺跡で使用されている石器（図化した151点）の石材は、ホルンフェルス、安山岩、黒曜石、砂岩、頁岩、チャートである。いずれの石材も出土量に差はあるものの薩摩半島で用いられている石材と考えている。石材重量の統計は、図化した151点と図化できなかった不定形石器と判断した分の合計である。しかし、遺物取り上げの際に不定形石器として判断されなかったものがあるので、全体におけるパーセンテージは必ずしも遺跡が本来保有するものと限らないが、傾向としては示されると考える。

### 砂岩

中～粗粒砂岩が多い。風化したと思われる灰黄色のものから、にぶい黄色をしているものが多い。石皿、台石、磨石、敲石などの加工具に利用されている。本遺跡でもっとも重量がある石材である。総重量は33945.8gで、全体の44.6%を占める。

### ホルンフェルス

表面は灰オリーブ色したものが多く、一部風化したと思われるシルト化したものが見られる。石槍、スクレイパー、石斧などの剥片石器に利用されている。定型石器の石材として、主に利用されている。総重量は21507.6gで、全体の28.3%を占める。

### 頁岩

灰色で石斧として利用されている。その他の石器には利用されていない。総重量は、1618.9gで、全体の2.1%を占める。

### 安山岩

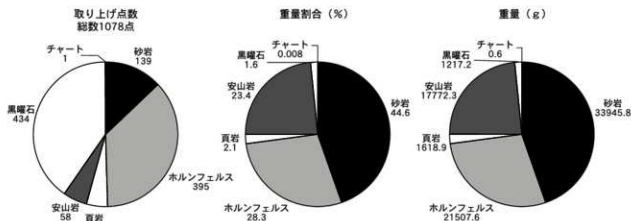
ホルンフェルス同様、定型石器の石材として利用されている割合が高い。輝石安山岩が多い。主に磨石、敲石に利用されている。総重量は17772.3gで全体の23.4%を占める。

### 黒曜石

ナイフ、石鏃、石核などに利用されている。肉眼観察ではあるが、三船産、淀姫産、上牛鼻産、平木場産などの黒曜石が用いられている。総重量は1217.2gで全体の1.6%を占める。

### チャート

灰白色の石鏃1点のみが利用されている。総重量0.6gで全体の0.008%を占める。



第15表 石材別点数・重量割合・重量表

## 参考文献・引用文献

〔論文・研究史・その他〕

- 河口貞徳1955「鹿児島県における貝殻燻土器について」『鹿児島県考古学紀要第4号』
- 浜田盛秀・貴島清蔵1973『大田城の発見』大田城顕彰保存会
- 長野眞一1978「まとめ」『岩本遺跡』指宿市教育委員会
- 長野眞一1984「まとめ」『上蔵川遺跡群』鹿屋市教育委員会
- 中村直子1987「成川式土器再考」『鹿大考古第6号』鹿児島大学法文学部考古学研究会
- 新東晃一1988「南九州の円筒土器と角筒土器—前平式土器と吉田式土器の型式概念をめぐる諸問題—」『鎌木義昌先生古希記念論文集 考古学と関連科学』
- 宮田栄二1991「鎌形剥片石器—南九州縄文早期の特殊な石器—」『南九州縄文通信No.4』南九州縄文研究会
- 水ノ江和同1998「九州における押型土器の地域性」『九州の押型土器—論攷編—』九州縄文研究会
- 横手浩二郎1998「手向山式土器の細分と編年試案」『九州の押型土器—論攷編—』九州縄文研究会
- 下山寛・鎌田洋昭1999「水迫式土器の設定」『ドキドキ縄文さきかけ展』指宿市教育委員会
- 桑波田武志2001「岩本式土器から前平式土器へ移行期の土器に注目して—」『鹿児島考古第35号』鹿児島県考古学会
- 黒川忠広2002「南九州貝殻燻土器1—鹿児島県—」南九州縄文研究会
- 小畑弘己2004「磨製石器と植物利用—南九州地方における縄文時代草創期—早期前半の石器生産構造の再検討—」『文学部論叢第82号』熊本大学文学部
- 屋野一彦・国師洋之2004「鹿児島県内における縄文時代の磨製石斧と石材」『縄文時代における各地の石斧生産と石材利用』石器原産地研究会
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005「土器胎土の鉱物を求めて—土器製作地推定のための基礎的研究—」『研究紀要縄文の森から』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 〔報告書〕
- 指宿市教育委員会1978『岩本遺跡』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書
- 鹿児島県教育委員会1981『中尾田遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(15)
- 鹿屋市教育委員会1984『上蔵川遺跡群』鹿屋市埋蔵文化財調査報告書1
- 鹿児島県教育委員会1992『西丸尾遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(64)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 1993『榎崎B遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(4)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 1996『小牧3A遺跡・岩本遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(15)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 1996『一湊松山遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(19)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 1997『神野牧遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(20)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2000『沖田岩戸遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(26)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2001『上野原遺跡(第10地点)』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(28)
- 田代町教育委員会2001『ホケノ頭遺跡』田代町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
- 指宿市教育委員会2001『水迫遺跡』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(34)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2002『小倉畑遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(34)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2004『桐木遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(75)

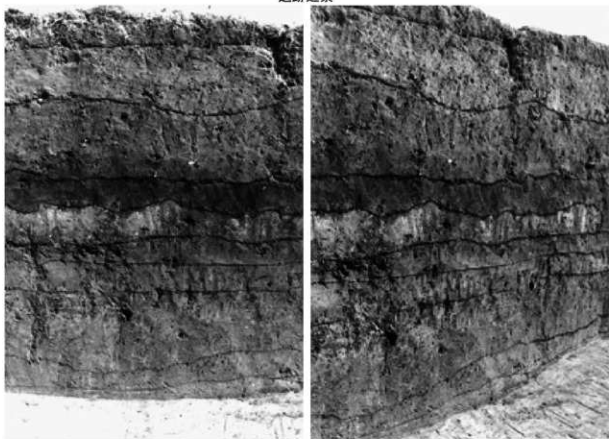
圖 版



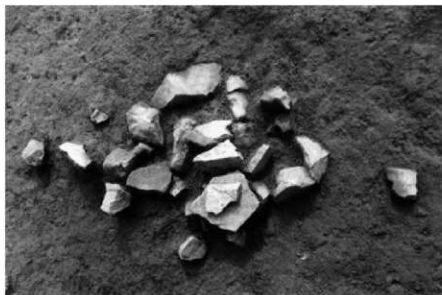




遺跡近景



基本土層



1号集石



2号集石



3号集石

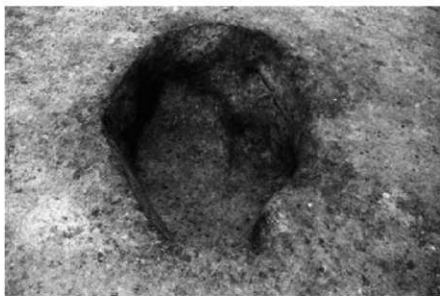
1号土坑完掘状况



2号土坑检出状况



2号土坑完掘状况





E-8区 IV層遺物出土状況



E·F-8区 IV層土器出土状況



刃部磨製石斧出土状況(1)



刃部磨製石斧出土状況(2)



調査風景(1)



調査風景(2)



調査風景(3)



旧石器時代の遺物



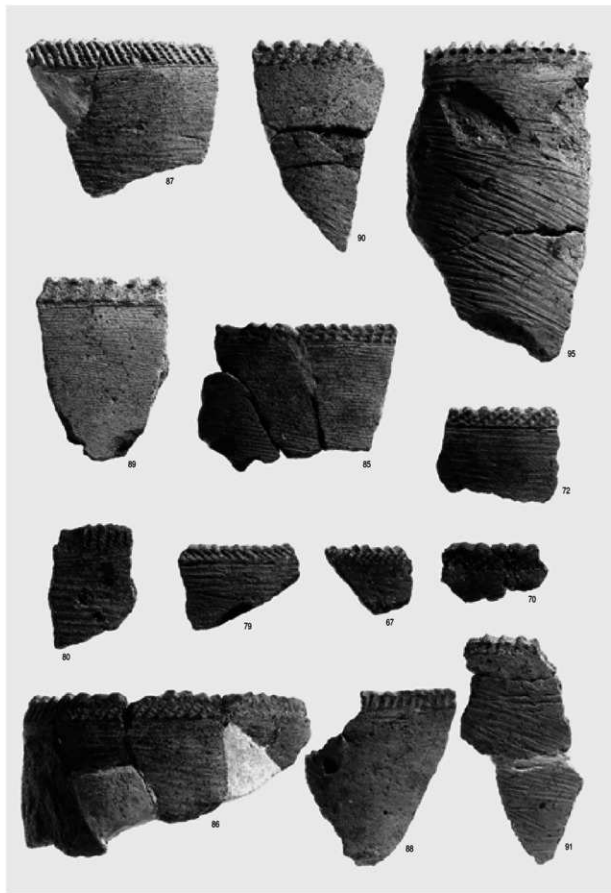


縄文時代早期の土器（I a 類土器）

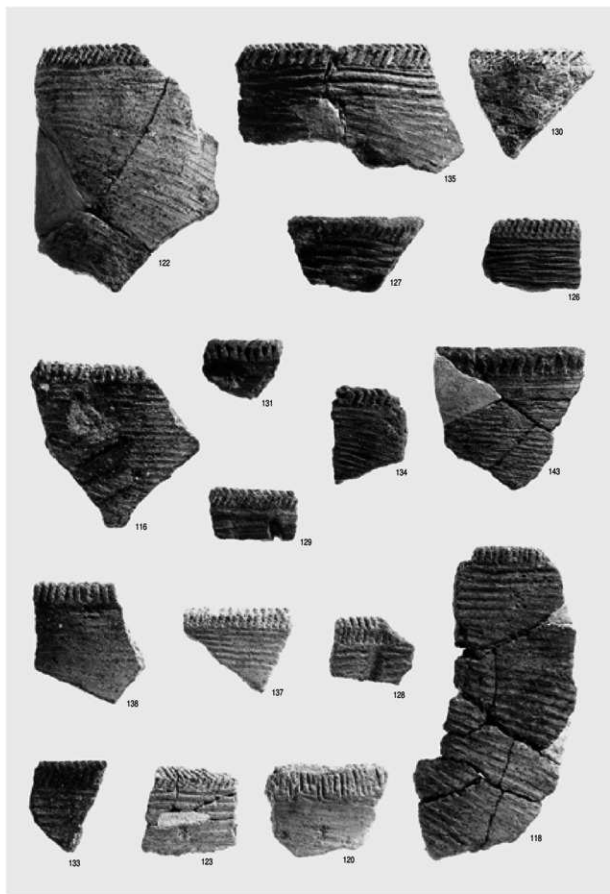


縄文時代早期の土器（I b 類土器）

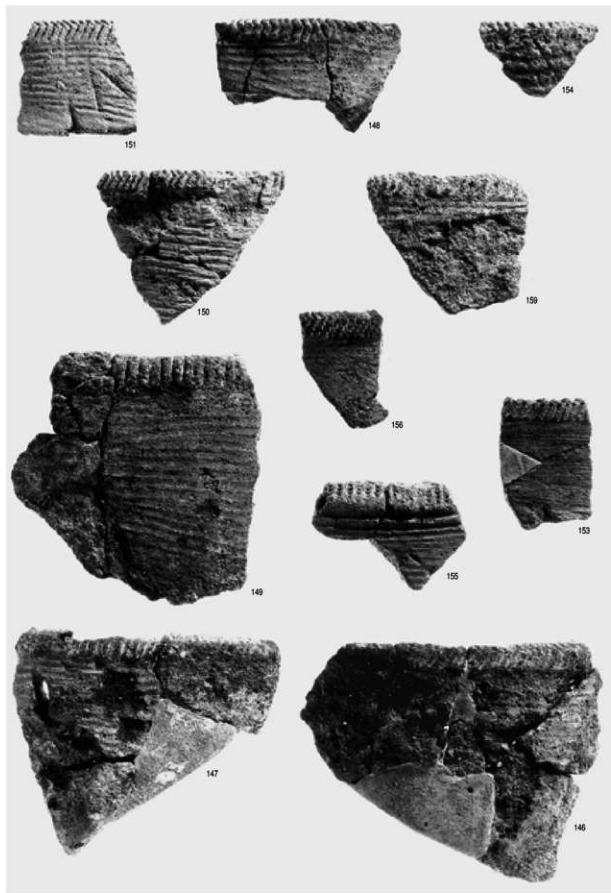




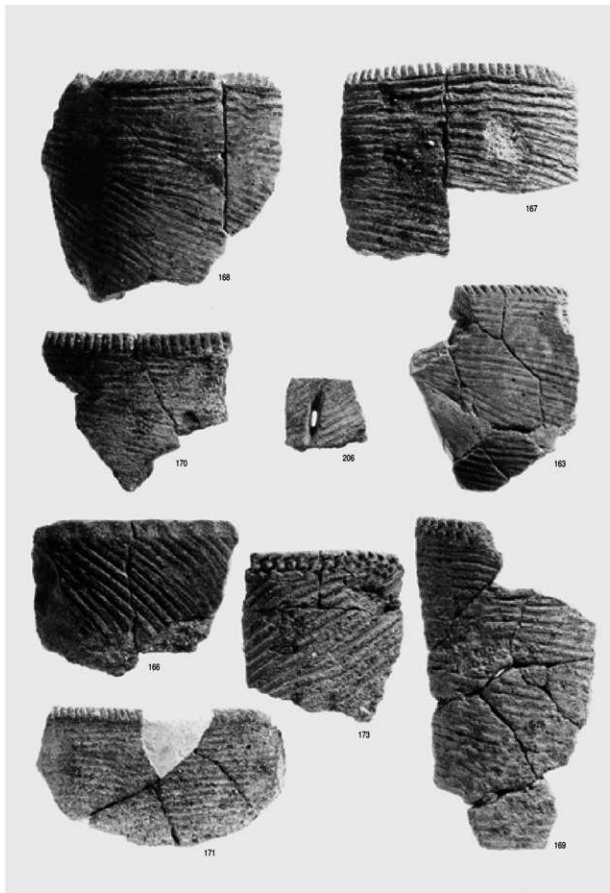
I b 類土器



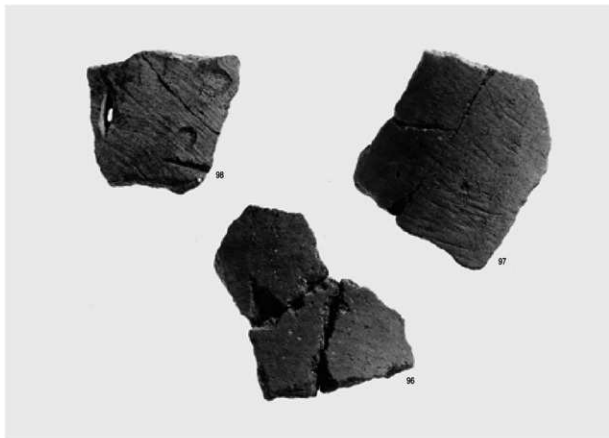
II a 類土器



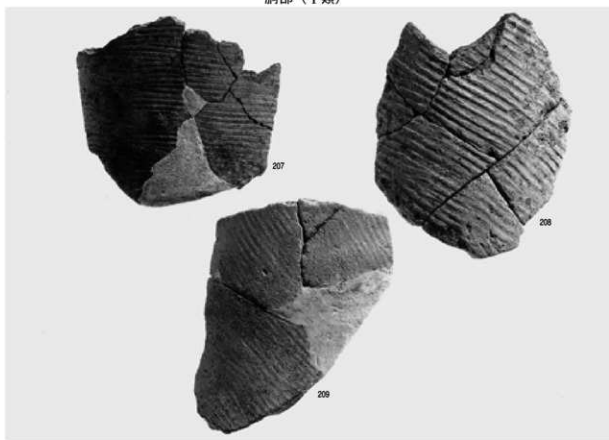
II b 類土器



II c 類土器



胴部 (I類)



胴部 (II類)





I類底部 (内面)



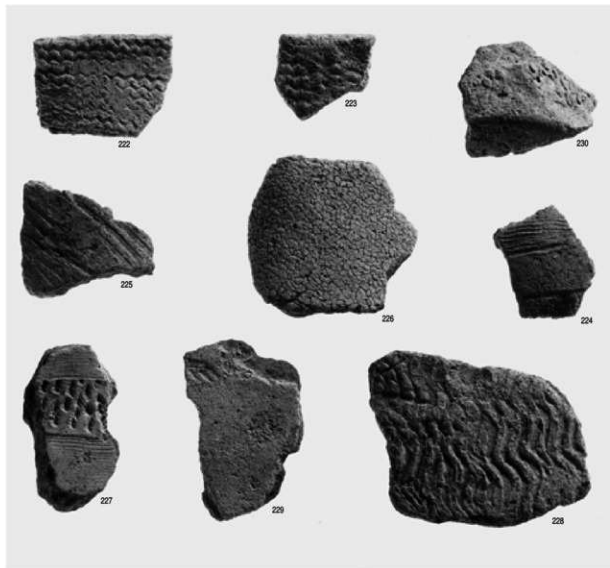
I類底部 (接地面)



II類底部



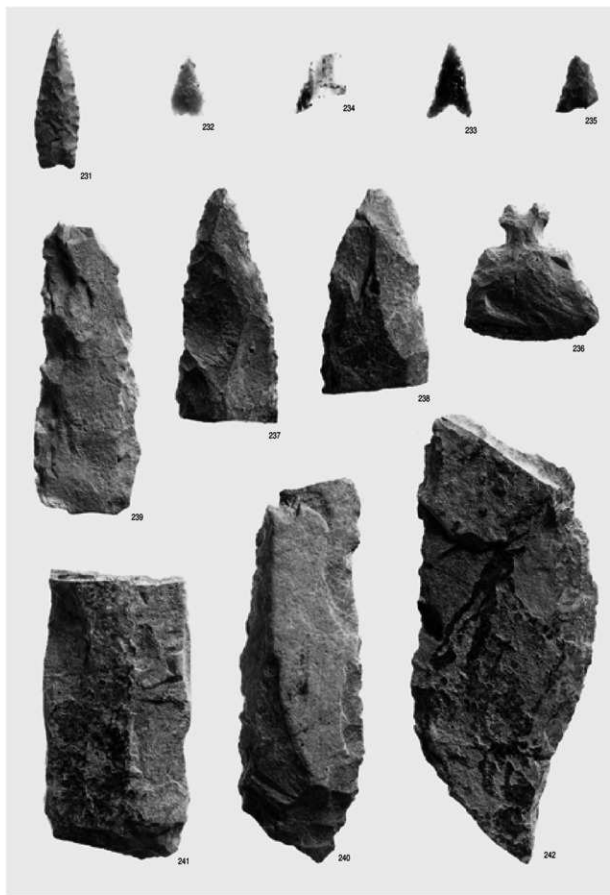
II類胴部～底部 (内面)



その他の縄文時代の土器



古墳時代～古代の土器



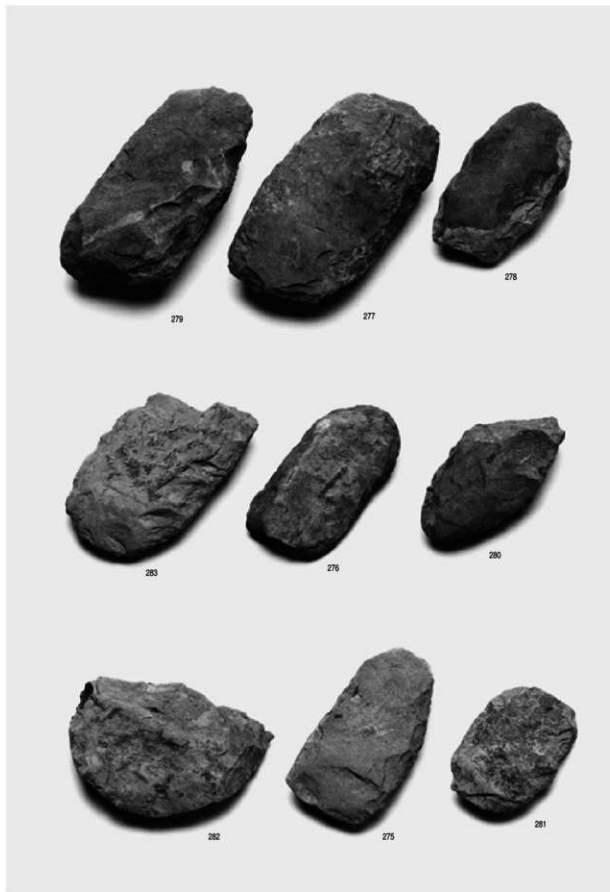
剥片石器(1)



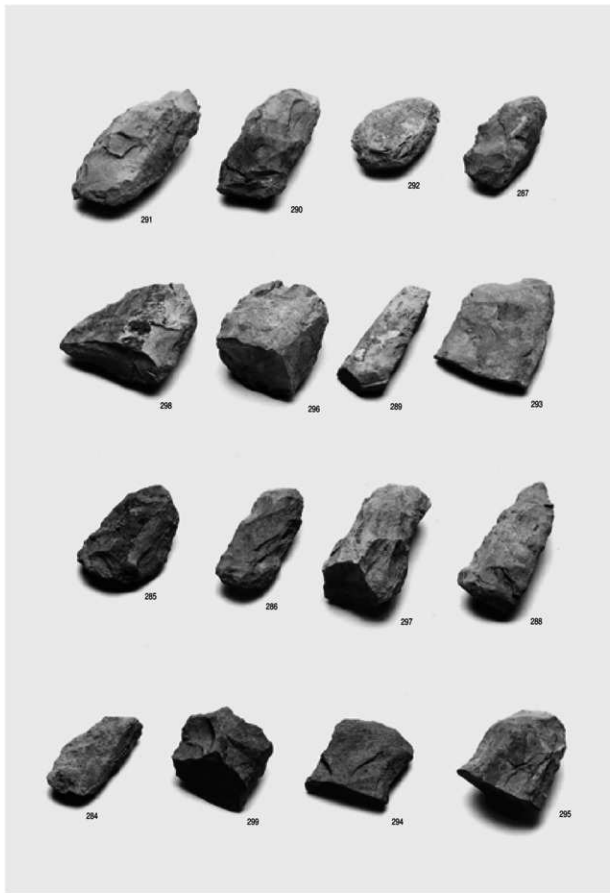
剥片石器(2)



石斧未製品



石斧未製品(1)



石斧未製品(2)



石斧未製品(3)





礫石器

## あ と が き

遺跡の東側（じょうやま）に城山と呼ばれる標高140mの一字治城がある。

一字治城は、県内では最も古い城跡のひとつで、平安時代末に紀氏により築城されたと推定されている。その後、天文14年（1545）に島津貴久は本城を三州守護職の居城と定め、天文19年に鹿児島の内城に移るまで、薩隅平定の本拠とした。貴久は、本城でフランシスコ・ザビエルと会談し、布教を許したと伝えられている。

そのような環境の中、一字治城にほど近いこの地は、所在地が伊集院町大田字城山迫で大田城跡と呼ばれている地であった。古代から中世にかけての本格的な城館の調査と奮い立って発掘調査を行ったわけであるが、調査結果は意外なものであった。中世以降の成果品はなく、旧石器時代・縄文時代早期の遺構・遺物が多く発見された。特に縄文時代早期の岩本式土器・前平式土器は南九州の縄文文化発生期を語るにはなくてはならぬ遺跡となった。石器では、石斧の製作過程がわかる資料が豊富に出土し、石槍と共に重要な問題点を提供できた。

『苦難を自分の宿命として諦めるのではなく、自分の人生は自分で切り拓くのである』報告書作成にあたっては、この言葉を信じ、幾重にも励まされながら、こうして刊行を迎えることができた。

万全を期したが、必ずしも十分とはいえない。今後、検討を要するものが多いと思うが、機会を見て不備を修正し、その責務を全うしたい。

調査に当たり、便宜を図ってくださった伊集院町教育委員会、発掘作業員としてご協力いただいた地元の方々、整理作業に従事していただいた鹿児島県立埋蔵文化財センター臨時職員の方々々に心より感謝申し上げます。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（95）  
南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XV

お お た じ ょ う あ と  
**大田城跡**

発行日 2005年3月  
発 行 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
〒899-4461 鹿児島県国分市上之段1175番地1  
T E L ( 0995 ) 48- 5811  
印刷所 株式会社あすなろ印刷  
〒899-0041 鹿児島市城西2- 2- 36  
T E L ( 099 ) 250- 7033